

上りしなり。

第五 シルレル出奔してパツエル

パツハに留まる

シルレル出奔の意愈々決せり。時に同窓の友にストライヘルなるものあり。音楽者たらんと欲して窮屈なるステットガルトに踞踏するを好まず。乃ちシルレルと相携へて出奔の途に上れり。時に千七百八十二年九月十七日なりき。

音楽者と詩人。彼等は夜暗に乗じてステットガルトを逃れ、コンハイムに入れり。彼等の囊中は甚だ乏うして、彼等の期望は甚だ少なりしなり。何處に往き何處に止まらんか。はた如何にして生活し如何にして衣食すべきか。彼等は自ら之れを知らざるなり。恰も是れ大洋の中に漂へる葉舟の如し。此の時に當りて僅かに一縷の期望を繋ぎたるものは。シ

(三) 各藩の政府は「プロテスタント」、加特力兩教の中何れにて

も國教に採用するを得ると

(四) 各藩は又兩派を併せて採用するを得。然れども諸侯は己れ

と異なる宗教を奉ずる者を國外に放逐するの權利を有す。

(五) 僧侶的貴族にして一旦改宗して「プロテスタント」と爲りたる者は。其の位階領土を返還せざるべからず。

右の五ヶ條を見るに。加特力派は猶幾多の特權を有して信仰の自由を束縛せりと雖も、「プロテスタント」が是に依りて幾多の權利を得たるは明かなり。

第十二項 カール五世の晩年

カール五世は初め威權赫々として歐洲に雄視せしも。一たびモリスに破られてより。形勢頓に一變し。パツサウ及びアウグスブルヒの條約はルーテル派の氣焰を高め。諸侯漸く離反せり。カールは是れより元氣阻喪し體軀亦頗る衰弱せしかば。王位を捨て塵世を避けて靜かに餘年を送らんと欲し。千五百五十五年にライン地方を其子フィリップに譲り。翌年西班牙及びシシリをも之れに與へたり。次いで彼れは日耳曼の王位をもフィリップに譲らんと欲したれども諸

侯皆フィリップを好まず。カールは止むを得ずして千五百五十六年位を弟フェルナンドに譲りて蕭條たる孤村に退隱し。千五百五十八年に死せり。噫英雄の末路何ぞ其れ莫寂たるや。

第十三項 宗教改革が日耳曼の政治文學に及ぼしたる影響

宗教改革の後日耳曼は加特力と「プロテスタント」との二派に分れ。互に相反目嫉視して紛議殆んど絶ゆるときなかりき。アウグスブルヒの決議は兩派の争を調停したりと雖も。是れ唯外面の調和のみ。其の裡面に於いて兩派の衝突は一朝一夕にして調和すべくもあらざりき。帝王は陽に局外中立を保てりと雖も陰に加特力に黨して常に「プロテスタント」の不利を計れり。されば「プロテスタント」の諸侯及び人民は帝王を敵視して苟も機に乗すべき有れば直ちに反きて其權勢を殺がんとを謀れり。然り而して王室の萎靡を希望する者は皆に「プロテスタント」派の諸侯のみならずして。加特力派の貴族も之れを希望せり。故に宗教改革以後帝王の權威は益々衰へ。諸侯の威力愈々加はれり。議會も亦衆論に従つて事を決するの所に非ずして。一二強藩の左右する所と爲り。日耳曼を統一するの中央政府は

ルレルの懐に横たはれる「フィースコ」のみ一掃の戲曲は實にシルレルの生命なりき。彼れの生命は係つて此の戲曲の成功如何に任り。彼れは「フィースコ」を公衆の前に朗讀せり。聴衆は其の作の意外に拙きに失望して未だ聴き終らずして歸り去りぬ。されど彼れの作は決して拙きに非ざりしなり。唯聴衆の識見は未だ「フィースコ」の眞價を知るに足らざりしのみ。果然一人のシルレルの才を識るものは現はれたり。名優イフランド是れなり。イフランドは獨り始めより終りに至るまでシルレルの朗讀を傾聴して終に言へり。曰はく、「フィースコ」は傑作なり「盜賊」よりも劇に適せりと。シルレルは此の一言に望を繋ぎ、僅に一縷の血路を開けり。されど「フィースコ」は未だ留れざるなり。彼れの囊底は全く空虚となれり。

ストライヘルは書を家に飛ばして三十フ
ロリンを得、飄然としてオッガルシヤム
に來れり。

シルレルはストライヘルと與にオッガル
シヤムに在ると數日にして幸運の福音
は漸く彼に傳へられたり。彼れステッ
トガルトの學校に在るの日非ルヘルム、
ツォルツォゲンなるものと相親しめり。其
の母フラウ、フオン、ゾオルツォゲンはテ
ソングア森林中の孤村パウエルバッハ
に別墅を有せり。シルレル乃ち書を之れ
に裁して此の別墅を借らんとを乞ひしか
ばゾオルツォゲン夫は痛くシルレルの窮
困を憐れみ直ちに其の乞を許せり。千七
百八十二年の冬シルレルは涕を揮つてス
トライヘルと袖を分ち獨りパウエルバッ
ハに來れり。ステッットガルトを逃れて
より漂泊流落すると殆んど三ヶ月。是に

至りて僅かに心を安んずるを得たり。時
に年二十三。

爾來シルレルはパウエルバッハに留まる
と七閱月。其の間我が可憐なる年少詩人
は何事をか爲せる。テウソングアの森林
鬱乎として蒼々たる所彼れは如何なる生
活を送りしか。幸福の生活か、はた不幸
の生活か。彼れは新に漂泊流浪の苦難を
脱して聊か安身立命の地を得たるが如し
と雖も、而かも彼の心は猶甚だ安せざり
しなり。彼れは前途を豫想して己れが果
して文壇の勇將たるを得るや否やを疑へ
り。熟々一身を顧みれば素と是れ亡命の
孤客にして未だ容易に故郷に歸るを得
ず。之れを思ひ彼れを思へば豈に斷腸の
感なからんや。是に於いて由來沈鬱の人
は益々沈鬱となれり。パウエルバッハに
於ける七ヶ月は、實に不幸の歲月なりき

殆んど是れ無きに至りぬ。

ルーテル一たび起つてより日耳曼の文界は頗る生氣を帯び來れり。
彼れが翻譯せる聖經及び其他の著述は大に民間に愛讀せられ。爾
來日耳曼の文學はルーテルが聖經に用ひたる高部日耳曼の國語を幾
踏せり。ルーテルの著に次ぎで最も世人に歡迎せられたるはニ
ルンベルヒの製靴工ハンス、サヒスと稱する一詩人の詠作なり。サ
ヒスも亦熱心なる改革派にして其の時は諷刺に富み滑稽に長せり。
斯くて日耳曼文學は改革派の筆に依りて大に進歩せると同時に。他
の一方に於いては印刷術の發達する有りて亦大に文學の進歩を助け
たり。當時日耳曼には幾多の大なる出版者あり。アルベルトデー
レル、ハンス、ホルバエン、ハカス、クラナヒの如きは其著名なる
ものなりき。

第二節 フエルヂナンド第一世

フエルヂナンドハ紀元千五百五十八年を以て日耳曼の王位に即け
り。次いで彼れは自ら皇帝と稱したり。由來皇帝の位は法皇の授け
る所なりしかどもフエルヂナンド以後の日耳曼王は最早斯の如き虛
禮に従はず多く自ら皇帝の位に即けり。

フエルヂナンドが自ら皇帝の位に即くや。法皇は是れに謂つて曰は
く。王もしアウグスブルヒの議決を破り加特力派の地位特權をして
舊に復せしめば皇帝の位を認許せんと。さればフエルヂナンドは法
皇の恐るゝに足らずして恐るべき者は寧ろ「プロテスタメント」派の勢
力なることを詳知せしかば敢へて法皇の言を容れずして却て「プロテ
スタメント」と親しめり。

此の時に當りて「プロテスタメント」も亦「ルーテル」教會及び改革教會
の二派に分れ。「ルーテル」教會は更に分れて溫和派及び過激派の二
と爲れり。斯くて小黨分立して頗る和合一致を欠きしかども猶「プ
ロテスタメント」は此の間に長足の進歩を爲せり。
千五百六十四年フエルヂナンド死し。長子マキシミアン位を繼げ
り。之れをマキシミアン第二世となす。

第三節 マキシミアン第二世

マキシミアン三世性頗る聰明なりしかば。加特力と「プロテスタ
ント」との紛争を防ぎ國內の平和を保つを得たり。王の位に在る
や。「ゼシユート」と稱する一の黨派起りて加特力を授けて「プロテ
スタメント」を抑制せんと企てたれども。王は一派を助けて他派を

憂愁の生活なりき。

不幸の歲月憂愁の生活なる七ヶ月間彼れは何を以てか己れの心を慰めたる。曰はく詩なり戯曲なり。ミニューズ」の神は常に彼れと與に在り。彼れは常に此の女神の機手に扶けられて。満胸の憂愁を遣りしなり。『バーレ、ランド、リーベ』及び『ド、カルロス』は實に此の憂愁中の安慰より溢れ出てたる詩想の結果なり。

第六 シルレルマンハイムに移る。

陰鬱なるテッリンギアの森林中にて陰鬱なる歲月を送れる、陰鬱なる詩人は、今や陰鬱の中より救はれて、光明界に入るの時機は漸く近づけり。ゾエルテンベルヒ公はシルレルの天性の到底狂ぐべからざるを知りて、怒漸く解け復た彼をして強ひて軍隊に入らしむるを欲せず。是に

凌ぐの不正なるを悟り敢へて「ゼンシュート」に黨せざりしのみならず。却りてルーテル派に左袒するの傾向ありき。されば奥太利地方にすら「プロテスタント」は傳播せられて日耳曼人の過半は新教を奉ずるに至りぬ。

千五百七十六年マキシミアン死し。其の子ルドルフ位を繼ぐ。

第四節 ルドルフ第二世。三十年戦争の萌芽

ルドルフは父の聰明に肖す。性頗陋にして嚴酷なり。痛く「プロテスタント」を嫌つて加特力に與みせり。されどルドルフは優柔不漸にして果斷勇爲の氣象に乏しかりしかば、「ルーテル」黨は敢へて之れを恐れず。されど王は數々新教を抑壓せんとして幾度か命令を發したれども更に其の効を見ざりき。斯くて王の施設は因循姑息にして朝廷の威信日に衰ふるの勢ありしかば王族の諸侯は甚だ之れを憂ひ。攝政を置き若しくは太子を立て、以て王を補佐せんと欲したり。されど王猶之れを好まず。己れ一人にして政を爲すに足るを示さんと欲し。強硬の手段を採りて大に匈牙利及びボヘミヤの「プロテスタント」を苦しめたり。匈牙利人は王の虐政に堪ふる能はずして

於いてかマンハイム劇場の支配人なるダールベルヒはシルレルをして劇場の詩人と爲せり。是れ可憐なる我がシルレルが新なる期望の生活に入るの時なり。時に千七百八十三年七月なりき。

シルレルは始めて安身立命の地を得たり。是に於いてか彼れの筆端は愈々健なり。『フイースコ』は改題せられ、劇に上るに至りぬ。

始めて劇に上りたる「フイースコ」は意外にも人氣に投せざりき。されど第二に演ぜられたる「ガバレウツンド、リーベ」(奸謀と戀)は非常の喝采を博したり。『フイースコ』は「カバレ、ツンド、リーベ」。此の二編は頗る處女作「盜賊」に似たる所あり。其理想に偏せる相似たり。往々にして兒戯に類するの空想を寫す相似たり。其の結構組織の体裁相似たり。されど後の二

終に土耳其王の援を請へり。斯くてルドルフの處置は益々出て、益々拙なりしかば。奥太利家の諸侯は到底黙々に附する能はざるを知り。千六百〇六年相議してルドルフの弟マッシチスをして奥太利家の家長と爲し政務の衝に當らしめたり。されどルドルフは納降器を擁して皇帝の位に在りき。ルドルフが前きに新教徒を屈服せんと欲し。ババリア公にトナウヴェールスの自治市を取るを許せるや、「プロテスタント」の徒は大に之れを憤慨し。千六百〇八年「プロテスタント」同盟なるものを作りて攻守進退を共にして緩急相應すべきを約せり。此の同盟の構成に最も與つて力ありしはアンハルト公クリスチアンなれども。其の首領はバラチン撰舉侯なりき。而してバラチン撰舉侯は改革教會に屬せしを以て。「ルーテル」教會の徒は此の同盟に加するを好まず有力なるサクソニー撰舉侯の如きも全く是れに關せざりき。

「プロテスタント」同盟成るの後幾も無くして。ユーリヒのザイルヘルム公死せしかば。同盟の加入者たるブランデンベルヒ撰舉侯及びノエブルト侯は其の相續者たることを主張し來りて其の領地を分割せり。ルドルフ王は二侯の處置を以て擅斷横行と爲し。弟レオポルドを遣はして二侯を討せしむ。是に於いてか「プロテスタント」同

作は頗る演劇に適するの點に於いて迥に處女作に優れり。年少詩人の經驗漸く加はりたればなり。

シルレルはパウエルバッハに在りても、マンハイムに來りても幾多の琴歌を作れり。されど彼の詩は此の時に至るまで猶頗る粗雑なりしなり。思想整はず、字句鍛練を経ず。後世に傳ふるに足るの佳什は甚だ少なかりき。

シルレルがダルベルヒと結びたる劇場詩人の契約は千七百八十四年の八月を以て満期となれり。

時にシルレルは負債山の如く生計頗る困難なりしかば、「タリア」と題する雜誌を發刊して收入を得んと企てたり。而して彼れは毫も他人の筆を藉らず己れ一人にして全紙を滿たさんと決心せり。千七百八十五年の春「タリア」の第一號は現は

盟は二侯を援けて王の軍に抗せんと欲し。佛蘭西王ヘンリー四世と結んで大に軍を起し。二侯と與にレオポルドの軍を攻めて大に之れを破れり。加特力派の諸侯は之れを聞いて大に驚愕し。急に聯合を組織して以て「プロテスタント」同盟に當らんと欲し。パルリア公マキシミアンを戴きて聯合の首領と爲せり。斯くて大戦將に起らんとせしかども。佛蘭西王ヘンリー死して「プロテスタント」同盟の勢力頗る沮喪せしかば。終に大に戦ふに到らずして和を講せり。然れども兩派の同派聯合は實に後年「三十年戦争」の端を開きたるものにして。日耳曼全土を激戦熱争の大渦中に投ずるの兆は既に此の時に現はれたり。

攝政マッシアスは宗教の異同に依りて國內に紛争を起すの不可なるを知り。埃太利に合して信仰の自由を許せり。千六百〇九年ボヘミアの諸州も亦ルドルフ王に迫つて所謂「國王の書狀」なるものを得たり。王は此の番狀を以て。貴族、騎士、及び自治市に完全なる信仰の自由を與へ。且國內に「プロテスタント」教會及び學校を起すを許せり。王は斯くの如き權利をボヘミア人に與へたればボヘミア人は猶王に釋然たる能はず。千六百十一年王を捕へてブラーグに幽せり。翌年王病を得て死せしかば。マッシアス繼いで王位に即けり。

第五節 マッシアス、〇三十年戦争の發端

マッシアスは盛式壯典を以てフランクフルトに即位せり。されど彼れ亦決して王者の器に非ざりき。彼れは陽に「プロテスタント」に信仰の自由を許容せしも陰には「セシエート」派を援けて新教徒を傷けんと謀れり。且王果斷敢爲の性に乏しかりしかば王室の命令行はれず。朝廷の威嚴日に地に委するの狀あり。されば其の兄弟等は大王と與に政務を分たしめたり。次いで千六百十七年フェルデナンドはルドルフの後を承けてボヘミア及び匈牙利の王と爲れり。是れより朝廷の實權はフェルデナンドの手に歸してマッシアスは唯手を拱して其の命を仰ぐのみなりき。

フェルデナンド年猶若かりしと雖も。性剛毅にして敢爲勇進の氣象に富めり。マッシアス百歳の後には必ず之れに代つて日耳曼の王位に即き。王室の勢權を恢復し大に紀綱を張つて以て時昔權威赫々たりし日耳曼帝國を再現するの野心あり。然り而して彼れは頗る「プロテスタント」を嫌惡し極力之れを壓服せんと企てたり。前きにステリアは大半新教を奉ずるに至りしも。フェルデナンドがステ

れぬ「ドンカルロス」の第一段及び「教育制度としての演劇」てふ論文は載せて此の初號にありき。蓋し彼れは演劇を以て國民を教育せんと欲したるなり。學校の教場以外に、教會の講壇以外に、最も有力なる教育法は演劇なることを信じたなり。演劇は萬人之れを喜び見る、臺詞は無學の者も猶能く之れを聞くを喜ぶ。平民的教育は劇場に在りて存す。善を勧め。惡を懲らし、知らず識らざるの間に人を導いて道德界に入らしむるものは實に劇の有用なる所以にして、作劇者たるもの、責任は重且つ大なりと謂つべし。是れシルレルの當年抱負せる所なりき。シルレルは斯くの如き抱負を持して「タリア」を發刊したり。世人は幾分か之れに注意したり。されど雜誌の發刊は毫も彼れの負債を減却するに足らずして却て

彼れをして愈々窮困せしめたり。時恰もツアイマル公カルル、アウグストマンハムに來りて勲をシルレルに賜ひ且つ彼れを以てライプツィツヒの議員と爲さんと欲せり。ライプツィツヒに在る諸友も亦彼れの來遊を勸むると甚だ切なりしかば。彼れは終に意を決してマンハイムを去れり。時に千七百八十五年の四月なき。

第七 ゴーリス及びドレスデン

に於けるシルレル
千七百八十五年四月を以てマンハイムを去りたるシルレルはライプツィツヒに來りて其附近の一村なるゴーリスに居をとしぬ。是れより先きシルレルが「タリア」を發刊するや、ライプツィツヒの文士ツエゲ、ケールテル、エル、エフ、フベル、シンナ、ストック及びビドラ、ストックの四人は書

リア公たりしより盡く國內の「プロテスタント」教徒を追放し。スリアをして再び舊時の加特力教國たらしめたり。されば新教徒が彼れを忌憚せるも決して偶然に非ず。もし彼れにして王たらば日耳曼は必ずや再びカール五世の時代の如く舊教と新教との間に大衝突を來たして戦亂相繼ぐに至らん。是れ萬人の盡く期せし所にして。フェルチナンド即位以後の事實は果して是れを證明せしなり。マツシアスの晩年に三十年戦争は其端緒を開けり。是れより先き。ポヘミアの「プロテスタント」は二の新教會堂を創立せり。一はブラーグの僧正領地に於いて。他はブラウナウの監督領地に於いてせり。然るに僧正、監督等は王の許可を経て。一の教會を破壊し。他の教會を閉鎖せり。新教徒大に悲り之れを皇帝に訴ふ。帝令して曰はく。千六百九年の「國王の書狀」は新教の教會を僧侶の領地内に建設するを許したるものに非ず。故に僧正、監督等は其の領内の新教會堂を破壊閉鎖するも。新教徒は之れを争ふを得ず。ポヘミアの新教徒は此の命令を聞いて愈々憤激せり。時に偶々流言あり。此の命令は皇帝の發したる者に非ずしてブラーグの王宮より出でしものなりと。是に於いて新教徒は終に堪ふる能はず。千六百十八年五月二十三日伯爵テッルンを將として王宮に到り。參政院に迫つて彼の

をシルレルに寄せて雑誌の大に己れに益する所あるを稱揚し。以てシルレルに親交を求めたり。シルレルがゴーリス村に移りし後は屢々彼等と往來して文を語り時を談せしと云ふ。

シルレルはゴーリスに在りて如何に生活したるか。余は之れを知るに由なし。されど彼れは猶孤獨なりき。彼れは猶負債を有したりき。彼れは戀に失敗したり。畢竟するにゴーリスの生活は爾かく幸福愉快ならざりしなり。

ゴーリスの生活は甚だ長からざりき。シルレルは同年(千七百八十五年)復更にドレスデンに移りてケールテルの家に近く寓せり。是れより先きケールテルは閨秀文學者ミンナストックを娶りて居をドレスデンに卜し。ミンナの妹ドラ、ストックも亦之れに同居せり。而してシルレルの

命令の出所を問かんとを求めたれども。參政等躊躇して答へざりしかば。新教徒は直ちに二人の參政を捕へて之れを戶外に驅逐し。終に全く王宮を占領し。「ゼンシュート」黨を國外に放逐し。新に參政院を組織して樞機を司らしめたり。時にポヘミア王フェルチナンドは日耳曼皇帝の朝廷に在り。直ちに兵を擧げて新教徒を討せんと欲せり。是に於いて「プロテスタント」同盟(本章第四節)も亦ポヘミアの新教徒を援けてフェルチナンドに抗せんと欲し伯爵マンズフェルドを以て將として。三千人の兵士を率ひて赴き援けしめたり。ポヘミア人も亦伯爵テッルンを戴きて元帥と爲し職備を整へて以てフェルチナンドの來るを俟てり。戰未だ開始せざるに當りて皇帝マツシアス死し。フェルチナンド繼いで帝位に即けり。時に千五十九年なりき。

第六節 フェルチナンド第二世〇三十年戦争

第一項 「プロテスタント」黨の敗軍

ポヘミア人は全力を擧げてフェルチナンドに抗せんと欲し。フリードリヒ五世を立て、ポヘミア王と爲せり。フリードリヒは英國王セ

來るに及びフヘルも亦來りてドレスデンに在り。是に於てカライブツイツヒの文星は皆ドレスデンに集まりぬ。

一架の閑亭エルベ河に枕して、清樓は清流に映じ、翠色滴るが如きの青松は河に臨み、また樓を擁し、盛夏八月猶炎熱の何ものたるを知らざるものは、是れ即ちケ―テルの邸に非ずや。此の閑邸に近く寓せるシルレルは日々此の閑邸に來りてケ―テル夫妻及びドラ、ス―ックと與に詩を賦し、樂を奏し、或は綠林の間を逍遙し或は清流に沿ふて閑歩せり。且つケ―テルはシルレルに給するに清酒閑靜なる書齋を以てしたりしかば、シルレルは日に此閑靜に在りて思を幽玄無邊の詩境に馳せて「ミューズ」の神と語りしなり。閑窓の下に「ミューズ」の神と語りたる彼れは、何等神來の筆を揮ひたるか。彼れ

ームス第一世と姻戚なりしかばボヘミア人は之れを立て、以て英王の應援を得んと欲せしなり。フェルチナンドも亦飽くまでボヘミア人を鎮壓し次いで日耳曼全國の新教徒を全滅せんと欲し汲々として戰備を整へたり。彼れはフランクフルトに往きて皇帝の位に即くや。途ババリア公マキシミアンを訪ひ之れを説きて己れに黨せしめ。若し「プロテスタント」同盟にしてボヘミアを援けばマキシミアンは必ず加特力聯合を率ひてフェルチナンドを援くるの約を結べり。次いでフェルチナンドは書を西班牙に贈りて之れと結託せり。是に於いてか帝の軍、勢頗る張れり。之れに反してボヘミアの新王フリードリヒは年弱うして思慮に乏しく、徒に遊樂淫佚に耽りて深く國事を顧みず。さればボヘミアの臣民は皆望を失ひ君臣相和せずして上下離反せり。加之「プロテスタント」派の諸侯は奮つてボヘミア人を援くるを努めず姑息冷淡にして氣勢毫も揚らず。サクンニー公は帝に騙されて歡を加特力黨に通じ。其他の「プロテスタント」同盟に加はりし者も亦皆勢を望んで躊躇し。敢へてボヘミア人を援くるものなし。斯くてボヘミア人は全く孤立の地位に陥りしかば、千六百二十年フリードリヒとジェスセンベルヒに戰つて大に敗れたり。テリーはババリア公マキシミアンの將なり。勇悍にして武略

は雜誌「タリア」に幾多の散文を載せたり。彼れは「フィロソフィセ、ブリーフェ」を草して其の宗教に關する意見を發表せり。彼れは「ガイステルセル」してふ小説を物したり。而して此の間に於ける大作は「ドン、カルロス」の完了是れなり。蓋し「ドンカルロス」の初篇成りてよりシルレルは久しく筆を止めたりしかば、其前後の意匠結構、感情は自ら調和せざる所あり。されど其の想像力に富むの點に於いては彼れの傑作たるを失はず。作中の主人公ボサ伯爵は實に政治上社會上の進歩に關するシルレルの意見を發表したるものにして、之れを處女作「盜賊」に比すれば彼れの思想の進歩歴然として見るべし。

第八 シルレル、ヴァイマルに移る

千七百八十七年七月シルレルはドレスデ

あり。加特力黨の軍が始めに大勝を得たるはテリーの力與つて多きに居れり。ボヘミアの軍ゾエスセンベルヒに敗るゝや其の王フリードリヒは家族と與に逃走せり。是に於いて帝はボヘミアに入りて新教徒の首魁を戮し。其の會堂を破壊し。其の僧侶を放逐し。加特力以外の宗教を信するを嚴禁せり。其他の苛政を布き暴飲を徴して人民を虐げしかばボヘミアの形勢は全く一變し。會て文物彬彬として商業の繁盛を致したるの國は寂寥荒涼として轉た征人をして今昔の感に泣かしめたりき。其後「プロテスタント」黨はマンسفエルド伯及びブルンスツックのクリスタアンを將として戰を繼續せり。一千六百二十二年「プロテスタント」黨は一たびテリーを破りたれども。テリーは忽ちにして頽勢を挽回し。終に大にマンسفエルド及びクリスタアンを破り。是をして其軍を散せしめたり。千六百二十二年「プロテスタント」同盟は終に瓦解し帝の勢は隆々として日に熾なりしかば。新教徒は全く壓服せられて紛争は既に局を結べるの觀ありき。然れども是れ只皮相の觀にして。三十年戰爭の序幕は漸く此の時に開かれたるなりき。

ンを去つてヅァイマルに移れり。當年のヅァイマルは實に文士詩人の叢淵なり。公爵夫人アマリア、公爵カレル、アウグスト、公爵夫人ルイサ共に文を好み詩を愛したりしかばヅァイマルの朝廷は文化燦爛として太陽の如く輝き、幾多の文士は星辰の太陽系を繞るが如く齊々として宮庭の周圍に集りぬ。

シルレルはヘルデル及びブーランド等に歡迎せられてヅァイマルに來れり。ヅァイマルに來りてより、彼は心を歴史の研究に委ねたり。「ニーデルランデ叛亂史」は千七百八十八年に出て「ゲッシヒテ、デス、トライスシグヤーリゲン、クリーグス」千七百九十二年に出たり。其他雜誌は「タリア」に掲たる史論頗る多かりき。是に於いては彼は史家を以て目せられ、終にエナ大學の史學講師を囑托せら

れ千七百八十九年五月に第一回の講演を爲せり。而して彼の安身立命の地盤は初めて鞏固となりぬ。

第九 エナに於けるシルレル〇其の結婚

シルレル史學講師となりてエナに移りてより此に住すること十年間彼の文運の隆盛を極めたる時代は實に此の間に在りき。彼れは歴史の講師として大に成功したり。其の始めて講壇に上りしや、幾百の生徒は肅然として耳を傾け皆其の博識に駭けり。シルレル音吐甚だ大ならず、辯舌爾かく爽快ならざるも、事を説くや秩序整然、組織自ら具はりて人をして一聞首肯せしむるの妙あり、學生が彼れを仰慕せる決して偶然に非ず。大學講師としての生活は彼れの爲めに頗

シルレル

近世史

一九九

斯くてフェルチナント帝の勢は益々熾にして終には盡く「プロテスタント」の信徒を滅すの恐ありしかば。丁扶王は大に之れを忌み。北歐諸國の王と連衡して日耳曼帝に抗せんと企てたれども英王ゼームス一世は因循にして決せざりしかば連衡終に成らず。されどもマンスフェルド及びクリスチアンは幾多の應援を得たりしかば。再び兵を擧げて帝と雌雄を決せんと欲せり。此の時に至るまで帝の手兵は甚だ少なく帝の爲めに戦ひし者は大抵パバリア公及び加特力聯合の軍隊にしてテリーの指揮する所ありき。是に至つて王は自ら親兵を組織せんと欲したれども國帑乏軍費を得るに由なし。時にアルベルド、フォン、ツァルレンスタエンなる一貴族あり。帝に談つて曰く。帝若し余を以て將と爲せば自ら兵を集めて帝を援げんと、帝悦んで直ちに之れを許せり。ツァルレンスタエン直ちに三萬の軍を得。千六百二十六年マンスフェルドをデッサウに擊つて大に之を破れり。同年マンスフェルド及びクリスチアンは相踵いで死し。丁扶王も亦ルッテルに於いてテリーの破る所と爲りしかば。「プロテスタント」黨の勢は益々萎靡せり。斯くてテリー及びツァルレンスタエンは丁扶王を追窮し。ホルスタエン及びメックレンベルヒを蹂躪せり。是に於いてツァルレンスタエンはメックレンベルヒ公の位を得。次い

でハンサ同盟をも己れに燃せしめんと欲し。或は賄賂を行ひ。或は威力を示し。百方術策を運らしたれども。終に其意を達する能はず。同盟の自治市は賄賂を斥け威力を恐れず。嚴然として自由を擁護せり。帝はテリー及びツァルレンスタエンの力を藉りて「プロテスタント」を壓服したりしかば日耳曼全國は其の意の如くならざる無し。是に於いて「復舊條例」なるものを發し。前きにパッサウの條約に依りて「プロテスタント」の手に歸したる寺僧及び僧侶の領地を舊に復して加特力の寺院及び僧侶に返へせり。

第二項 瑞典王グスターフ、アドルフの來援〇「プロテスタント」黨の勝利

パバリア公マキシミアンはツァルレンスタエンの威勢を嫉み。帝に請ふて之れを斥けしむ。帝ツァルレンスタエンを退くるを好まざれども。若しマキシミアンの請を聽かずんば加特力聯合も亦己れに背反せんことを恐れ。千六百三十年終にツァルレンスタエンの任を解き。其軍半ばは解散し半ばはテリーの部下に屬せり。此の時に當りて「プロテスタント」派は意外にも有力ある應援者を得たり。瑞典

る愉快なりき。彼れはゲーテの如く熱
 關なる交際社會を好まず。長袖能く舞
 ひ、綺羅相誇ふの虚容は彼れの愛する所
 に非ざりき。彼れの心胸に充滿するもの
 は理想なり。彼れは思を理想の幽玄界に
 安んじて俗塵の紛擾を避けたり。故に大
 學講師として口に學生に接し、千古興亡
 の蹟を説き、文明の衰興する所以を論ず
 るは實に彼れの性質に適したるの職務な
 りしなり。

愉快なる生活は更に幸福なる生活を來せ
 り。何ぞや。彼れの結婚是れなり。
 シルレルは幾たびか戀に失敗したり。さ
 れど彼れは終に圓滿なる婚姻を結びて圓
 満なる家庭を作れり。而して彼れの最愛
 なる妻と爲りし者は即ちシャーロット、フ
 オシ、レンゲフルド是れなり。請ふ余を
 してシャーロットの人と爲りを一瞥せし

王グスタフ、アドルフ是れなり。アドルフは熱心なる新教徒にし
 て、日耳曼の新教徒が虐待せらるゝを見て憤慨に堪へず奮つて之れ
 を救はんと欲せり。加之彼れは心算かに野心に抱藏し日耳曼の一
 州を得て他日日耳曼帝の位を得るの素を爲さんと欲せり。千六百三
 十年夏彼れは一萬五千の兵を率ゐてルーゲン島に上陸したりしか
 ば日耳曼に新教徒は恰も旱天に雲霓を得たるの思を爲し熱狂して之
 を歓迎せり。されど諸侯は其の野心有るを恐れ。彼れに對すること
 甚だ冷淡なりき。

アドルフはボメラニア公に迫つて強ひて己れに黨せしめられたるも。
 サクソニー撰擧侯及びブランデンブルヒ撰擧侯は依然として彼れに
 與みするの色無かりき。千六百三十一年「プロテスタント」派の自治
 市なるマグデブルヒは敵將テリーの陥るゝ所となり。非常の殺戮虐
 待に逢へり。サクソニーの撰擧侯は此の横暴を聞いて大に恐れ且つ
 憤り。終に意を決してアドルフに黨せり。テリーはマグデブルヒ
 市を屠りたるの餘威を以てサクソニーに來り。「プロテスタント」諸
 侯の同盟を解散せんと欲したりしかば。サクソニー公はアドルフと
 與に之れを逃へて。大にブラエテンフルドに戰へり。サクソニー
 の兵は敗れて逃走したれども瑞典の軍は勇悍能く戰ひ。終に大にテ

めよ。

舞臺にシルレルのツァイマルに來りし
 や。バグエルバッハに行きて恩人ヴォル
 ツォンゲン夫人(第五項)を見、其の子に
 してシルレンの學友なる非ルヘルムとに
 伴はれて、ヴォルツォンゲン家の縁戚な
 るレンゲフルド家をルドルスタットに
 訪へり。家に二女あり長をカロリチと曰
 ひ、幼をシャーロットと曰ふ。シャーロ
 ッテ時に歳二十一。容姿花の如く、嬌態
 頗る愛すべし。婿々として金褐色を爲せ
 る長髮の風に翻へる時何ぞ其の可憐な
 る。青瞳嬌羞を帯びて見ざるが如くにし
 て人を見るの狀、實に無限の意味を藏
 す。而かも彼女は先きに情人の戦死に會
 ふて、深い失望の中に陥りぬ。玉容自ら
 憂を含んで暗に深思を見はす所、恰も是
 れ梨花雨を帯びて力なきの觀あり。今や

シルレル

近世史

二〇一

リーを破り。多く其の精兵を殺せり。
 プライテンフルドの戰以專新教徒の軍氣大に張り羅馬教派の威勢
 頗に衰へたり。アドルフはサクソニー公をしてボヘミヤを經略せし
 め。己れは戦勝の勢に乗じて軍を南方に進めたり。途中過ぐる所
 諸侯人民悉く之れを歓迎せざるは無し。敵將テリーは之れをレヒ
 河に遮らんと欲し。兵を糾合して來て對陣せしかども。再びアドル
 フに破られ大に傷つて死せり。アドルフは益々進んでフランクフ
 ルトに入りしかばムニッヒは勢を望んで降れり。ババリア公マキシ
 ミリアン終に抗すべからざるを見て逃れてレグンスブルヒに走れ
 り。アドルフ乃ち公の宮城に入れり。

斯くて形勢全く一變し。日耳曼皇帝の地位は殆んど累卵の危きに陥
 れり。帝此の危機を救ふには再びツァルレンスタエンに依頼するの
 外策無きを知り。辭を卑うし禮を厚うして其の援を請へり。ツァル
 レンスタエンは帝をして約せしむるに兵馬の全權を己れに委任すべ
 きを以てして其の請に應じ。四萬の兵を糾合して直ちに戰に督手
 し。千六百三十二年ブラーグを取り。サクソン人をボヘミアより驅
 逐したり。次いで彼れは方向を轉じてニールンベルヒに向ひしか
 ども。アドルフは彼れに先づて是に在り。ツァルレンスタエンは戰

彼女は一たびシルレルを見て一種微妙の感情は胸底に洶けり。失戀に依て生じたる失望の胸底より期望の火は燦々として焼へ來りぬ。シルレルも亦シャーロットを見て深く之れを慕ひ、心私に百年を偕にせんことを誓へり。噫此の妙齡の佳人と、壯年の一詩人と。二人の肝膽は既に相照らせり。二人の意氣は既に相投合せり。天は終に二人をして同穴の誓を結ばしめたり。千七百九十年二月二十日。是れ實に新婚新夫が華燭の下に婚誓を帯びて百年相變はらざらんことを約せるの夜なりき。時に新夫は三十一歳。新婦は二十四歳。圓滿なる家庭は茲に成れり。然り圓滿なる家庭は茲に成れり。温良にして柔和なるシャーロットは女神の如くシルレルを慰めたり。されどシルレルの生涯は猶未だ幸福を完うする能はざり

を避け更に轉じてサクソニーに向へり。アドルフ之れを尾してルネーゲンに至る。千六百三十二年十一月十六日兩軍大に此の地に戦ひ。瑞典の軍は勝利を得たり。されどアドルフは此の戦に陣歿せしかば「プロテスタント」派の軍氣大に阻喪せり。アドルフの死後其の宰相アクセル、オクセンステールン代つて瑞典の軍を統率しアドルフの遺圖を繼ぎて戦を繼續せり。此の時に當りて「カール」は再び帝の思む所と爲り。千六百三十四年終に元帥の任を免せられ。次いで暗殺に逢へり。是れより加特力派は勇將を失つて軍氣甚だ振はず。

第三項 瑞典・佛蘭西同盟して日耳曼の新教徒を援く

「カール」はサクソニーの暗殺せられてより。王子フルチナンド加特力派の軍を統率せり。千六百三十四年フルチナンドは瑞典の軍とノルドリッゲンに戦つて大に之れを破り部將ホルンを虜にせり。是に於いてサクソニー公は帝と「カール」に和を講せり。此の時に當り戦争多年將士兵卒皆に疲れ人々平和を渴望せざるは無かりき。さればもし佛蘭西の宰相リッソーにして戦を好まずんば戦争は茲に局

き。彼れは結婚の後久しからずして二暨の侵す所と爲りて。痛く其の健康を害し。爾來終生健全なる能はざりしなり。若し最愛なるシャーロットの彼れと共に在りて慰藉扶持、すること無くんば彼れの後半生は如何に暗濛たりしならん。シルレルの詩名は既に中外に喧傳せり。丁抹のアウグステンベルヒ公及び宰相フォン、シメルマンはシルレルの病を聞きて、痛く同情を表し。三千ターレルを贈りて其の病を慰め、且らく山水に放浪して健康を養はんことを勧めたり。シルレルは其の芳志を謝して之れを受け、千七百九十三年秋妻と與に故郷ヴェルテンベルヒに歸省せり。是れ彼れが父母を見たるの最後なりき。父は千七百九十六年に死し母は千八百二年を以て逝けり。シルレル夫妻は郷里に在ること數ヶ月に

を結びしならん。然れどもリッソーは常に奧太利家の權勢を嫉み機に乗じて之れを斃さんと欲せると一朝一夕に非ず。是に至りて彼れは竊かに瑞典の將オクセンステールンを煽動して戦を繼續せしめ。且之れに約して曰はく「佛蘭西は軍を出して大に瑞典を援くべし。瑞典は佛蘭西に報ふるが爲めに戦の後日耳曼の一州を割いて佛蘭西の領と爲すを承諾すべし。是れより三十年戦争は全く最初の面目を一變して復た宗教的戦争に非ず。徒らに英雄の野心を逞うするの國際的戦争とは爲りぬ。」

千六百三十七年フルチナンド死し。太子位に即く。之れをフェルチナンド三世と爲す。

第七節 フェルチナンド三世〇三十年戦争の結果〇ヴェストファリアの條約

フルチナンド即位の後も三十年戦争は猶未だ局を結ばず。瑞典及び佛蘭西の軍は連りに日耳曼を侵せり。リッソーは名を「プロテスタント」を援くるに托して其の實は日耳曼の領地を蠶食するを謀れり。其將ベルナル、チャーレン、コンデ等は皆勇略絶倫の勇將

して復たエナに歸れり。爾來彼れは何事をか爲せるんふ次項を見よ。

第十 シルレル哲學を研究す。

中學に關するシルレルの主要なる著述は「ゲッシヒテ、デス、デアイスシグエーリゲン」を以て終れり。爾來彼れは心を哲學に専らにしてカント派の哲學を研究せり。

シルレルは哲學上に何等の貢獻する所ありしか。彼れは果して能くカント派の哲學を悟了したるか。若し哲學史上より觀察すれば彼れは爾かく哲學界に重きを爲すの人に非ざるなり。されど彼れは此の研究に依りて自ら益したること決して鮮少なからざりしなり。彼れの思想は哲學の研究によりて一大變化を受けたり。シルレルが哲學上に研究したる問題は専ら美學なりき。美學に關する彼れの論文

にして數々日耳曼軍を破れり。瑞典にも亦バル、トルステンソン、ランゲル等の名將ありて軍氣頗る張れり。さればフェルチナンドは毎戰多く敗北して到底瑞、佛の同盟軍に抗する能はず。且つ戰久しきに涉りて。人心皆休息を希ふを以て和を講ずるの得策なるを覺り。千六百四十三年媾和の談判を開始せり。然るに佛蘭西及び瑞典は戰勝の餘威を挾んで過大なる要求を提出して日耳曼を困しめたりしかば。談判は存其久しきに亘りて容易に決せず。一事の決する所なくして空しく數年を経過せり。始め日耳曼が和議を講ずるや佛、瑞に對して各別に談判を開き。佛國とはシューンスターに談判し。瑞典とはオスナブルクに談判せり。斯くて交渉談判する殆んど五年にして議漸く調ひ。千六百四十八年十月二十四日を以て媾和條約始めて成立せり。是れ即ち史上に有名なるヴェストファーレンの條約にして三十年戰爭は始めて此の時に終れり。三十年戰爭は歴史上有數の大戰爭にして是れが爲めに日耳曼の人口の過半は戰死し。繁盛なる市邑は大抵荒野に歸し。商業貿易は全く杜絶し。多年永續し來りたるハンナ同盟は瓦解し。其日耳曼の福利安寧を害したると擧げて數ふるに遑わらず。然らばヴェストファーレンの平和條約は常に萬人の歡迎すべき所なるに。却て然らずして人々之れに反對せしは抑も故あり。讀者請ふ左に掲ぐる所のヴェストファーレン條約の梗概を見よ。

第一 佛國は「カルヴィン」宗に對して信仰の自由を與へ。獨逸も亦「プロテスタント」に對して信仰の自由を與ふること。

第二 「プロテスタント」信徒の權利は加持力教徒と同等たるべき事。

第三 然れども埃太利家相傳の直領たるポヘミアには「プロテスタント」を信するを許さざる事。

第四 佛蘭西はメツツ、トゥル、フルデン、アルサス、ストラスブルヒを得。且つ日耳曼をしてライン上流に在る城壘を撤去せしむる事。

第五 瑞典は西ポメラニア、ステッタン、ブレメン、ヴィスマルを得るの外。五百萬ターレルの償金を日耳曼に要求するを得ること。

第六 瑞典及び佛蘭西は日耳曼がヴェストファーレン條約を破るの恐あるときは何時にても日耳曼の處置進退に干渉するを得る事。

第七 瑞西及び和蘭共和國は從來も既に獨立の實ありしが。此の

は「ノエ、クリア」及び「ホレン」と題する二雜誌に掲載せられたるもの頗る多し。就中「美性及び高尚」、「質朴及び感情的詩歌」の如き最も著しきものなり。蓋しシルレルの哲理想は多くカントより來れりと雖も。彼れは自家の學識と創造力とに依りて幾多の嶄新奇抜なる説を立てたり。近世の獨逸文學者、技藝家が彼れの研究せる美學によりて裨益を得たるに頗る大なり。彼れ亦哲學界に忘るべからざるの人物なる哉。

第十一 「ツァルレンスタイン」成る

左手に史學を持し、右手に哲學を掲げ。千古興亡衰盛の蹟を追ひ、廣大無涯の思想界に逍遙せるシルレルは、筆端愈々流麗にして詩想益々豊富なり。千七百九十七年彼れはエナの一隅小丘高き所に書屋

を構へ、耳を欬て、幽禽の聲を聴き、首を揚げて閑雲歸鳥の間に無限の詩思を求めたり。是に於いてか麗々たる詩想は愈々麗に、筆端一たび動けば風雲起り、鬼神泣くの概あり。曰はく「潜水子」、曰はく「手套」、曰はく「イビカスの鶴」盡く是れ此の間に成る處なり。

詩に於いては「潜水子」、「手套」等の傑作を出したるシルレルは何等の作を戯曲に献じたるか。曰はく「ツアルレンスタイン」是れなり。

「ドンカルロス」は決してシルレルの最後の戯曲に非ざりしなり。彼れは「ドンカルロス」以後更に一戯曲を著はさんと欲し常に其考案を凝らせしなり。而して多年經營苦心の結果は「ツアルレンスタイン」と成りて現はれたるなり。彼れはゲーテの助言によりて此の戯曲を三部に分てり。第一は「ツアルレンスタインの出陣」、第二は「デービッコロミニ」第三幕は「ツアルレンスタインの死」、是れなり。第一は千七百九十八年十月に、第二は翌年一月にツァイマルの劇場に演せられたり。同年四月に至りては第三幕をも併せ演せられぬ。

「ツアルレンスタイン」は儘にシルレルの戯曲中の最大傑作なり。彼れは幾多の戯曲を草して幾多の経験と智識とを得。舊作の缺點短所を鑑みて以て之れを矯正するを努めたり。故に「ツアルレンスタイン」は「盗賊」の如くはた「ドンカルロス」の如く激越過激の所なしと雖も、其の思想や、着意や、潤色や、着實妥當にして頗る老練の趣あり。ゲーテが之れを評して芳烈なる美酒に似たりと言へるは、蓋し亦故ある哉

條約以後は名義上に於いても獨立國たるべき事。

ヴェストファーレン條約の大要は實に右の如し。其第一、第二に加特力派の反對を受ける法皇インノセント十世の如きは殊に之れを喜ばす終に條約を發して此條約の無効なるを宣言せり之れに反して第三は大に新教徒の攻撃せし所なりき。ヴェストファーレン條約が新舊兩教徒の感情を害したると斯くの如くなるのみならず。一般國民の爲めには非常の損害を來せり。第五第六は即ち是れなり。其の第七に至つては日耳曼の國權を侵害せると亦大なりと謂ふべし。されば此の條約に依りて利益を得たる者は唯佛蘭西瑞典のみにして。姦雄リセリューの計畫は着々として其功を奏せり。日耳曼の人民が此の條約に不平を抱きしもの亦宜なる哉。然れども當時戰爭久しきに亘りて日耳曼は舉國疲弊兵馬皆勞れたれば止むを得ずして斯くの如き不利の條約を承諾せしなり。

第八節 三十年戰爭以後に於ける日耳曼の政治的并に社會的狀態

第一項 諸侯の獨立

向愈々加はれり。ヴェストファーレンの條約成るに至りて日耳曼皇帝は終に諸侯の獨立を公認し。苟も日耳曼皇帝に反抗するに非ざる限りは外國に對して戰を開き和を講ずるの權利すら諸侯の手に委せり。是れと同時に皇帝の權柄は愈々殺滅せられ。法律を發布、解釋し、戰を宣し和を講じ若しくは兵隊を徵集するの權利の如き日耳曼聯邦全体に關するものは皇帝に屬せずして議會に屬するに至りぬ。左れば議會も亦徒らに形式、外觀を具ふるのみにしてその實權は甚だ微弱なりければ列藩を結合司配するの中心力は殆んど欠如して。日耳曼は終に諸侯分立の國とはなりぬ。

第二項 國際公法の萌芽

右に述ぶるが如く日耳曼は幾多の小邦に分裂して統合一致すること無かりしかば。往々にして無益の紛争を醸し。大藩は小藩を凌辱し。強邦は弱邦を併呑するの弊ありき。故に弱小なる邦を保護して強大なるもの、専横跳梁を防ぐには。一定の法規を設け、之れを以て聯邦を律するの必要を感じたり。爾來歳を経るに従つて這般の法律は次第に播成せられたり。されば中央政府の權力微弱にして諸侯を制収する能はざりし時代に在りても。聯邦は猶一種の法規に司配せら

芳烈なる美酒の如き「ヴァルレンスタイン」は果して世人を酔はしめたり。此の曲一たび演ぜられて天下は拍手して其の妙を賞せり。是に於いてシルレルは益々戯曲に心を專にしぬ。彼れがヴァイマルに移りしは乃ち戯曲に關する助言をグーテに得んが爲めなりき。

第十二、シルレルヴァイマルに移る

シルレルは千七百八十八年以來グーテと相識れり。二人の交情が如何に温乎たりしか、二人は如何なる事業を共にせしか。是れ余がグーテの傳中に記せし所なり。

既にシルレルはエナに住し、グーテはヴァイマルに在り。兩地相距る甚だ遠からずと雖も。而かも鴛鴦も重ならざる親友を離隔するの遺憾なき能はざりき。シル

れて爾かく横暴なるに至らず。小藩の大藩と土壤を接する者も猶能く安全なるを得たり。而して此の法規は實に現今世界の列國を司配する國際法の基礎なりき。

第三項 文學科學

兵馬倭骨三十年の久しきに亘りしも日耳曼の文學は猶全く枯死するに至らざりき。却りて多少の進歩發達を來たしたるの觀ありき。科學者には有名なるヨハン、ケプレル及びオットフォン、グエリキありケプレルは天文學を以て著はれ、グエリキは排氣機の發明を以て著はれたり。次に哲學界にはヤコブ、ホエムを出し後世の日耳曼哲學に貢獻する所頗る多かりき。次ぎに詩人として有名なるはマルチン、オピッツなりと。オピッツは「第一シレシア文學派」の鼻祖にして其傑作少なからざりき。其の他バウル、フレンミングと稱するはオピッツ派の詩人及びバウル、グルハルトと稱する宗教的詩人の如きも亦此の時代に生れたり。

第四項 一般人民の智識

宗教改革以後文學は漸く發達し科學は既に曙光を放ち。幾多の學者出て幾多の學校創立せられたれども。一般人民の智識は猶未だ開發せられず依然として迷信妄想の霧中に彷徨しき。占星術は多くの人民に信せられ。魔法は衆に喜ばれ兒戯に類するの預言占考を信するもの滔々として皆然らざるは無かりき。されば日耳曼當代の文學智識は唯一部少數の學者間に止まり。一般民衆は猶愚昧無智なりしを知るべし。

第九節 レオポルド第一世

第一項 佛帝ルイ十四世日耳曼を侵す
○ブランデンブルヒ撰舉侯フリードリヒ、井ルヘルム

レオポルド第一世は千六百五十七年を以て位に即けり。王資性温良にして率直なりしかども剛毅果斷の氣象に乏しく又智慮材略を缺けり。然るに當時不幸にしてルイ十四世は佛蘭西の帝位に在り。彼れ野心燃ゆるが如く頗る權謀術策に富めり。耽々として四隣を睥睨し苟も機に乗すべきあれば直ちに來りて虎狼の慾を逞うせり。彼れ日耳曼の諸邦分離しレオポルドの與みし易きを見て之れを窺へること久し。千六百六十七年終に來りてニーサーランドを侵せしかども日耳曼の諸侯一人として之れを邀ふるもの無く。ルイは殆んど及に血

レルは戯曲に關する助言をグーテに求め、グーテは時に關する忠告をシルレルに聞かんとを希へり。是に於いてかシルレルは終にエナを去りてヴァイマルに來りぬ。時に千七百九十九年十二月なりも。

ヴァイマル公はシルレルに賜ふに一千弗の養老年金を以てし。グーテと與に演劇の改良を計らしめたり。

ヴァイマルに移りてよりレルレルの作りし所は何ぞ「マリア、ステ。アルト」、「オルレアン」の處女、「井ルヘルム、テル」の鐘の歌の如き是れなり。

第十三 シルレルの晩年

少壯にして幾多の辛酸を嘗めたる詩人は、幸福安寧の晩年に入りぬ。彼れの名聲は天下に喧傳し、彼れの家産は漸く豊に。今や文界の偉人として王侯貴人の尊

敬を受く。彼の晩年は多福多幸ならずとせんや。
 千八百二年彼れは貴族に列せられたり。千八百四年伯林に遊ぶ。歸り來りてより寢食頗る常ならず。千八百五年四月二十九日ヴアイマル劇場より歸るや熱に侵されて復た起つ能はず翌月九日溘然として逝けり。歳四十六。

獨逸文界の二偉人。一は千七百四十九年に生れて千八百三十二年に死す。命を保つと八十三歳。他は千七百五十九年に生れて千八百五年に死す、年を重ねると四十六。若し歳月の長短を比較せばシルレルはゲーテの半に過ぎず。而かも此の短歳月を以て彼れが如き偉大の傑作を出し八十餘年の長命を保てるゲーテと並び稱せらる。シルレルも亦偉なる哉。若し天

ぬらずして之れを取れり。仍て千六百六十九年ルイは和をアーチンに講じ。西班牙をして強ひてニーザラランドの一部を割譲せしめたり。次いで千六百七十二年ルイは更に來りてライン地方を侵せり。時にブランデンブルヒの撰擧侯にフリードリヒ、井ルヘルムなるものあり。彼れ雄略材幹あり人呼んで大撰擧侯と稱じき。是れより先きに井ルヘルムはクレフネ、マルク、ラヴェンスベルヒ等の地を得たり。是に至りて此等の土地が佛王ルイの侵略を被らんとを恐れライン地方を援けて佛軍を拒がんとせり。次いでレオポルド及び西班牙王チャールスも亦井ルヘルムに黨せり。然るにレオポルドの宰相にロプコヰツなるものあり。佛王の賄賂を受け僧侶撰擧侯等及びミューンスタルの監督と心を協せて陰かに内應を爲せり。是を以て日耳曼軍數々敗れ。井ルヘルム止むを得ずして暫らく佛王と和せり。
 其後レオポルドはロプコヰツの官を奪ひ、元帥モンテクリに兵馬の全權を委任し再び佛蘭西と戦つて會稽の恥を雪がんと欲せり。斯くてモンテクリは佛軍を下部ラインに破りたれども。上部ラインに於いては塊太利の軍佛將チュールンと戦つて利あらず。依つてレオポルドは應援をブランデンベルヒ撰擧侯フリードリヒに請ふ。

彼れに興ふるにゲーテの如き健筆と長壽を以てせば、彼れは終にゲーテを凌駕したるやも知るべからず。余はシルレルの傳を終るに臨み轉た彼れの短命を悼まざるを得ず。

塊太利の宰相 メッテルニヒ

コルシカの風雲兒ナポレオン、ポナバルトが西歐の山河に龍驤虎嘯して天下殆んど之れに抗するもの無きに當り。苟かに列國を合縱してナポレオンの鋒銜を挫くの機を窺ひたる者。普魯西にはフォン、スタインあり。塊にはフォン、ソッテルニヒあり。スタインの勲業は余之れを鐵血宰相ヒスマルクの傳中に併せ説かん。メッテルニヒの經歷と事業とに至つては。乞ふ之れを本章に細説せんことを。
 メッテルニヒは瀟洒洒脱の風あり。權謀縦横の才あり。能く笑ひ。能く談り、能

千六百七十四年フリードリヒはレオポルドと同盟を結べり。次いで丁抹も亦同盟に加はれり。然れども瑞典は日耳曼に黨せずして却て佛蘭西に黨せり。日耳曼の諸侯中にも亦數を佛王に通せるもの頗る少なからざりき。斯くてフリードリヒは兵を將ひて戰を佛國に挑みライン地方に在りしが。瑞典王來りてブランデンベルヒを侵すと聞き急に軍を回して之れを拒ぎ。千六百七十五年フェルベルリンに戰つて大に瑞典の軍を破り。進んでポメラニアを進略せり。同時にライン地方に於いても戰を繼續せしが。佛軍はチュールンを失つて意氣且らく沮喪せしかども。忽ちにして勢再び張り。日耳曼の軍、戰頗る熾めり。千六百七十八年ライン地方及び西班牙は終に和を佛蘭西と講せしかば。日耳曼帝は獨力を以て佛蘭西と戦ふの不利なるを悟り。翌年フレイブルヒの地を割きて佛王と和せり。井ルヘルムも亦前きに經略せるポメラニヤの地を瑞典に返へして戰を止めたり。後數年にして井ルヘルム死せり。異日ホーヘンツォルン家の隆盛を致したるものは實に井ルヘルムが其の基礎を築きしに依れり。

第二項 ルイ十四世ストラスブルヒを取る〇句

牙利の内亂〇土耳其人の侵入

く交り。能く謀る。而かも彼れの笑ひ彼れの談るや。奇智百端忽ちにして人を籠絡するの妙あり。彼れの人と交るや。陽に肺肝を吐露するの状を示して而かも其の胸中や測るべからず。彼れの謀るや周到緻密にして而かも陰險秘密なり。彼れは實に外交家たるの天才を有したり。其の晩年や民権黨の厭惡する所となり。江湖に流落して其の生を終れりと雖も。彼れも亦一世の偉人たるを失はず。

第一 メッテルニヒの少壯時代

クレメンス、ゲンツェル、チボムク、ロタル、伯爵フォン、メッテルニヒは千七百七十三年五月十五日を以てライン河畔のコブレンツに生る。家世々貴族の名門にして父は奥國の公使と爲りてニーゼルラントに駐在せり。

斯くて佛獨は和を講じたれども。ルイ十四世は望獨の念猶禁する能はず。言を左右に托してライン河の兩岸に沿へる幾多の市邑村落を占領せり。日耳曼の諸國は大にルイの專横を憤り攻撃非難の聲轟然として起り、戦復び破裂せんとす。ルイの狡猾なる陽に公平正義を装ひ。フランクフルトに協議會を開きて争議を決せんと欲せり。されど協議會は徒らに議論を開はすのみにして毫も歸決する所なし。時にルイ十四世はストラスブルヒの市を渴望すると久し。蓋し同市は南部日耳曼の要衝にして商業上國防上の鎖鑰なり。ルイは市民に賂つて内應を爲さしめ。千六百八十一年突然兵を遣して之れを占領せり。日耳曼帝之れを聞いて大に驚き急に兵を起して佛蘭西を討たんと欲したれども。時偶々匈牙利の人民内亂を起せるを以て。暫ららく手を袖にして傍觀するの止むを得ざるに至りぬ。是れより先き日耳曼帝レオポルドは匈牙利の新教徒を遇すると頗る苛酷なりしかば。人心恟々として怨聲道途に滿てり。是れ即ち彼等が千六百七十八年に叛亂を起したる所以なり。何人の叛くや佛王ルイは竊かに使を遣して叛徒を煽動し約するに東西相起つて日耳曼皇帝を夾撃せんことを以てせり。佛王は又土耳其王を德懇して何人を援け以て益々日耳曼を困しめたり。千六百八十三年土耳其其の軍大擧して日耳

メッテルニヒ十五歳にしてストラスブルグの大學に入れり。是れ恰も佛のナポレオンが巴里の兵學校を卒ゆるの頃なりき。一は武斷的英雄となり。他は術策的權謀家となりて。他時歐洲の中原に颯天動地の快技を演じたるものは。實に此の雙個の聲譽兒たりしなり。

千七百九十年日耳曼皇帝レオポルドフランクフルトに於いて踐祚の式を擧ぐるやメッテルニヒは許されて此の盛典に参列するの榮を得たり。時に歳僅に十七。舉止圓轉風采瀟洒既に萬人の注視する所と爲れり。彼れ即位式に列したるの時埃太利公に見ゆるを得て深く其の歡心を求めたり。公は即ち他日フランシス二世と稱して日耳曼皇帝の位を繼ぎし者なり。メッテルニヒがフランシス二世に寵用せられたるもの。其の素や遠しと謂つべ

曼を侵し將に維納に迫らんとす。皇帝レオポルド抗する能はざるを知り戦はずして逃れたり。土耳其軍終に維納を圍みしかども市民は固く守つて降らず。防戦數月に亘りて市將に陥らんとするの時。ローレーン公カール、波蘭王ヨハン、ソビエスキ來りて維納を援けたりしかば土軍圍を解きて去れり。其の後土耳其軍數々來寇したれども毎に利あらず。千六百九十九年終にカルロヰツに和を講せり。當年匈牙利の内亂、土人の來寇は多く佛帝ルイ十四世の煽動德懇に出でしを知らば。彼れが權謀術策に富みしとも亦以て想見するに餘りあらん。彼れの狡猾多智なる。何人土人が日耳曼を困しむるの間袖手して知らざるが如くし。私かに鏡を養ひ軍を練り以て日耳曼の困弊に乗せんと企だてたり。果然彼れは千六百八十八年を以て再び兵を將ひて日耳曼の境上に臨みしなり。余は次項に於いて此の戦争を叙せん。

第三項 ルイ十四世再び日耳曼を侵す。

千六百八十八年佛王ルイ十四世來りて日耳曼を侵す。是れより先きルイ十四世は己れの好む所の一人を以てケールンの撰舉侯に推したれども日耳曼帝拒んで之れを納れざりしかば。ルイ乃ち是を名とし

メッテルニヒはストラスブルグ大學を卒へて。更にマインツの大學に入り。法學を修めたり。歳弱冠なる頃。彼れの矯々たる態度は益々光彩を加へ。彼れの閑雅なる舉止は愈々優美を添へて。眞個愛すべきの佳公子とは爲れり。加之彼れ快活にして能く談笑し。多藝にして機智に富めり。是を以て其の名は噴々として交際社會に喧傳せられ。人皆其の風采を仰慕せり。彼れ終に擢んでられて公使に任ぜられ英都倫敦に赴けり。

て以て來り侵せるなり。斯くて佛軍はライン沿岸の市府を掠奪し殺戮劫掠到らざる無く。無辜を殺し幼老婦女を捕へて毫も寛假する所無かりき。ハネデルベルヒ及び其の他の繁盛殷富なる市城は一朝にして或は燒棄せられ或は破壊せられ盡として荒野の觀を呈せり。殊に甚しきはスペエルに在る日耳曼皇帝の墳墓は佛軍の發掘する所と爲り。其の銀棺は奪ひ去られ其の骸骨は街路に遺棄せられたり。日耳曼の諸州は是を聞きて悚然として佛人の殘忍を恐れ又其の暴横を憤れり。皇帝も亦決然として起ちて佛軍を討たんと決心せしかばブランデンベルヒ撰舉侯フリードリヒを首めとして皇帝を援けんとする者甚だ多かりき。加之歐洲の諸國も亦佛王ルイの專恣を詈り英王及びオレンヂ侯井ルヘルムを首領として同盟を結び日耳曼を援けて佛の不法を懲さんと欲せり。然れば此の戦争の詳細なる事項は日耳曼史よりも寧ろ世界史に屬すると多しとす。斯くて陸海の戰繼續する七年にして千六百九十七年に至り佛蘭西、英吉利、和蘭、西班牙は和を締じたりしかば日耳曼帝も亦獨力を以て佛と争ふの得策に非ざるを知りて直ちに和を講せり。此の締和條約に依りて佛は猶ストラスブルヒを領有したれども。フラエブルヒ、ブラエサッハ、フライッスブルヒ等を日耳曼に返還せり。

愛する所と爲る。豈に不世出の麒麟兒に非ずとせんや。

メッテルニヒは二十二歳にしてハーグ駐在公使に任せられたれども。時恰もハーグは戰の巷と爲りしを以て。任地に赴く能はずして維納に往けり。是れ彼れが塊都を見たるの始めなりき。

メッテルニヒ維納に來りて後久しからずしてカウニッツ公の女を娶れり。公の父は三朝に歴仕して外務大臣の顯職に昇りしものにして。權勢一世を凌げり。今やメッテルニヒは斯の權家の令嬢と婚す。其の得意や想ふべきなり。嬢容姿絶世風采温雅。眞個にメッテルニヒの好配なり。

合金の後メッテルニヒはカウニッツ公の家に入りて新婦と與に暫らく閑日月を樂まんと欲したり。されど當時國事多端にし敏腕快手の外交家を要すると最も切な

第四項
ブランデンブルヒ撰舉侯フリードリヒ普魯西王と爲る

大撰舉侯と稱せられたるフリードリヒ、井ルヘルムの子フリードリヒは父に繼ぎてブランデンブルヒ撰舉侯と爲り。普魯西公を兼ねたり。彼れは普魯西の公位を昇せて王位と爲さんと欲し日耳曼帝レオポルドニ昇位を認可せんとを請へり。蓋し公と曰ひ王と曰ふも唯名義上の差異にして實際に於いては殆んど差異なしと雖も。フリードリヒは外觀を衒ひ虚飾を事とするを好みしかば王の美稱を得んことを望みしなり。レオポルドは公國を以て新に王國と爲すは事甚だ稀にして且つその實權を増さんと恐れ敢へて是れを許すを好まざりしかども當時内外多事且つ佛國は再び兵を起すの憂ありしを以て終にフリードリヒの請を容れて普魯西王の位を授け。以て其の勸心を收め一旦緩急あれば己れの用を爲さしめんことを謀れり。千七百一年一月十八日フリードリヒは壯嚴華麗の式を以て普魯西王の位に即けり。是れ實に後年獨逸聯邦の盟主と爲れる普魯西王國の起源なり。

るを以て。メッテルニヒは久しく閑地に
悠々たるを得ず。忽ちにして公使に任せ
られ。ドレスデンに赴けり。時に千八百
〇一年なりき。

第二 メッテルニヒ公使と爲りて
ドレスデンに駐在す。

メッテルニヒ前に既に英京に公使たり
しも當時年猶少うして未だ外交界の
腕を振ふに及ばざりき。彼れが外交家の
技倆を見はせるは實にドレスデンに公使
たりし時より始められり。
ドレスデンはナポレオンの動靜を察する
に最も便利の地なりしを以て。歐洲列國
の有名なる外交家は多く此の地に集まれ
り。少壯メッテルニヒの如くにして此の
要地に在るの命を受く。其の技倆の非凡
なる以て見るべきなり。
ドレスデンは實に外交の要地たるのみな

第五項 西班牙王位継相の争

是れより先き西班牙王チャルヌ二世はバ
リア撰擧候の子を以て太子と爲せしか
ども太子はチャルヌに先ちて死せり。次
いでチャルヌも亦千七百年十一月十一日
を以て死せり。其の將に死なんとする
や佛蘭西王ルイ十四世はチャルヌ(西
班牙にてはカルロスと訓む)に
追り己れの孫アンジョーのフリッ
ップを立て、嗣と爲さしめたり。ル
イ十四世はチャルヌの同胞なるマ
リア、テレサと婚しルイド
ーフィンを生めり。フリッップは即ち
ルイ、ドーフィンの子なり。然るに日
耳曼帝レオポルドの皇后マ
ーガレット、テレサも亦チャ
ルヌの同胞なりしかは其の子
埃太利侯カールを立て、西
班牙の王位を繼がしめんと欲
したり。蓋しマリア、テレサが
佛王ルイ十四世に嫁するや西
班牙王位相續權を放棄したれども
。マーガレット、テレサはレオポ
ルドに嫁するの後も西班牙の
王位を相續するの權利を棄てざりし
を以て。正當の順序條理より曰ふ
時はマーガレットの子カールは西
班牙の王位に即くの權利ありし
なり。然るに佛王ルイは強ひて
チャルヌの遺言を得て己れの孫
なるフリッップを立てんと欲
したりしを以て。玆に日耳曼と佛
蘭西とは忽ち衝突を來して干戈
を以て相見ゆる

らず。文藝美術の發達を以て稱せられた
り。さればメッテルニヒが此に在るの間
種々の技藝を學び。又政治學を研究し。
好個紳士の標本と爲れり。彼れ當年猶威
を外交界に振ふ能はざりしも。後來有爲
多望の外交家たるは萬人の認めし所な
りき。

第三 メッテルニヒ伯林駐在公使
と爲る

メッテルニヒはドレスデンに駐在すると
二年にして。更に伯林駐在を命せられた
り。時に歲二十八。
此の時に當りナポレオンは將に大擧して
埃太利を攻めんと欲し汲々として戰備を
急げり。埃太利にして之れに當らんと欲
するには普魯西と合縱して以て其の援を
藉らざるべからず。されど魯、埃が覇を争
つて相反目せると一朝一夕に非ず。俄に

の已むを得ざるに至りぬ。

日耳曼帝レオポルドは傲を四方に發して諸侯の應援を求めたりしか
ばプロテスタント派の諸侯は大抵帝に與みせり。蓋し佛王ルイ
十四世は常に新教徒に敵したるを以て。もし彼れの孫フリッップが西
班牙王と爲りルイ自ら後見の地位に立ちて佛蘭西と西班牙との勢力
を併合せば實に列國の均勢を破るのみならず新教徒の運命を危うす
るの恐ありき。是れ新教の諸侯が日耳曼帝を援けたる所以なり。帝
の將軍にサヴォイ公フランシス、ユーゼーンあり。沈毅勇敏にして
頗る材略あり。千七百〇一年ユーゼーンは佛國の軍を伊太利より驅
逐せんと欲し。埃太利の兵を率ひ。普魯西、ハノーバルの援兵と與
にアルプス山を超へて伊太利に入れり。後數月にして英吉利及和蘭
も亦戰を佛國に宣して日耳曼に應援せり。次いで日耳曼の列藩は盡
く兵を起してレオポルド帝を援け以て佛蘭西に抗せしかば日耳曼の
軍勢俄かに十倍せり。獨りバヴアリア撰擧侯及びケールン撰擧侯は
日耳曼に左袒せずして佛蘭西に與みせり。千七百〇三年佛軍ライン
を渡りてバヴアリア軍と共に埃太利に進まんとす。然るにバヴアリ
ア撰擧侯は佛軍と進路を與にせずして己れ獨りテロールを征せり。テ
ロールは最初少しく敗れたれども終には頽勢を挽回して大にバヴアリ

宿怨を捨て、攻守を共にすると豈容易に期すべけんや。策略縦横の大外交家に非ずんば到底兩國の間を融和する能はざるなり。メッテルニヒが伯林に赴けるは實に此の難局に當るの命を受けたるなり。メッテルニヒ伯林に在ると四年。術を盡くし策を運らし。經營慘澹以て普魯西をして起たしめんと欲したれども。普が埃太利を嫉視すると依然として舊の如く。メッテルニヒの才略を以てしても終に兩國の合縱を固うするに由なかりき。蓋し普が埃を援けざりしは一は埃太利を嫉むの情に出でしと雖も。一は佛、魯を敵とするを恐れたるに依れり。當時ナポレオンは魯帝アレキサンダー一世と親交を訂し緩急相應するを約せり。されば普國にして埃太利に與みせば敵を東西に受けざるを得ず。是れ普國が以太利と同盟する

アの兵を破り撰擧候を追へり。千七百四年英國の將マールボロー公は日耳曼の將ユーゼンとハエルブロンに相會して兩國の軍を合せ七月二日を以てババリア候及び佛國の軍をドナウヴェルト近傍に討つて之れを破れり。次いで八月十三日更に一層劇烈なる戰は起れり。此の日、佛國及びババリアの軍はヘーヒスタード近傍に陣し。佛將タラールは右翼を將ゐてブレンハエムに陣せり。故に此の激戰を稱してブレンハエムの戰と謂ふ。斯くて兩軍愈々鋒を交へ戦久しく決せざりしが英軍及び日耳曼軍は終に勝利を得たり。此の戰に佛軍及びババリア軍の死せしもの二萬餘人。降りしもの一萬餘人の多きに及び。佛將タラールも實に因中に在りき。是に於いて佛軍は急にライン河を渡りて本國に逃れ。ババリア侯は逃れてニーゼルランドに走れり。日耳曼軍乃ち進んでババリア及び其附近の諸州を略取せり。日耳曼軍は既に佛蘭西を破りたれども。西班牙王位承繼の争は未だ局を結ばざりき。千七百〇五年レオポルド死してヨセフ立ち猶佛國と争へり。

を憚りし所以なりき。

第四 メッテルニヒ伯林駐在公使

と爲る○タルーランドと

メッテルニヒ

ナポレオンの勢は日に益盛にして歐洲の大半は彼れの席捲する所となりぬ。埃軍がアウステルリッヒ及びエナに取れてより。日耳曼は殆んどナポレオンの掌中に歸せり。是に於いてが埃帝は聰慧機敏の外交家を巴里に派して梟雄の舉止進退を注視しその策略計畫を採知するの必要なるを感じ。メッテルニヒを以て最も此の任に適すと爲し。伯林より彼れを召還して更に巴里に赴かしめたり。凡そ至難至困の局面は必ずメッテルニヒの擔當する所なりき。彼れが一世を空うするの外交家たりしは以て見るべし。當年日耳曼は實に外交家の舞臺なりき。

メッテルニヒ

近世史

二一九

第十節 ヨセフ第一世○西班牙王位相續

戦争の繼續

ヨセフ即位の後も西班牙王位承繼の争は猶局を終らず。先代以來有名なるツツォイ侯ユーゼンは帝の軍に將として佛蘭西と戦へり。ユーゼンは匈牙利及びババリアの内亂を鎮定し。更に伊太利に轉戦せしが最初は大に敗れたれども千七百〇六年九月七日チーリンに於いて大に佛軍を破りたり。其後ユーゼンは再び英將マールボローと軍をニーゼルランドに合し。千七百八年及び千七百九年の兩年に佛蘭西の軍を破りて有名なるオウデンナルド及びマルブラケットの二大勝を得たり。オウデンナルド戰の後佛王ルイはストラズブルヒを還付しフリッヅを西班牙王位より退かしむるを承諾して以て和を講せんと欲せり。然るに日耳曼及び同盟軍は此の條件に満足せずして曰はく。若し佛王自ら同盟軍を援け兵力を以てフリッヅを西班牙の王位より除かずんば決して和を講ずる能はずと。是に於いて和議終に破れ王位相續の争は猶結んで解けざりき。

而かも外交家と爲る者は多く貴族なりき身貴族の公子に生れて材幹智識ある者は盡く外交家となりて合縦連衡の策を盡せり。恰も是れ蘇秦、張儀の一流が漢土戰國の時代に於けるが如きの觀を呈せり。されば世人は競ふて外交場裏に技倆を試みんとを希はざるは無く、星槎外國に趣くを以て丈夫無上の光榮と思惟せり。學者は尊ばれず。文士は敬せられず。美術家も人に仰慕せられず。名譽、光榮、尊敬は只外交家の一身に集まれり。メシテルニッヒの如き奇計百出の大外交家ありて。此の間に處す。英名天下に鳴り威勢一世を蓋へしもの亦偶然に非ず。然り而して當時埃太利は數々ナポレオンに破られて。曠昔の威無かりしと雖も。積年累世の餘勢は猶未だ全く地に委せず。歐洲の列國は埃を目前に大國を以てし頗る

第十一節 カール六世○西班牙王位承繼
争の終局

紀元千七百十一年四月十七日ヨセフ一世死し。埃太利侯カール繼いで皇帝の位に即けり。之れをカール第六世と爲す。此の時に當り西班牙王位承繼の戦争は猶局を結ばず。カールは他くまでも之れを争はんと欲したれども。同盟は最早埃太利家を助くるを好まず各々兵を引ぬて國に歸れり。蓋し日耳曼王にして西班牙王を兼ねるときは其の勢力強大にして列國權勢の均衡を害すると佛王の孫フィリップを西班牙の王位に置くよりも更に甚しきものあればなり。加之英國は内政上の事情に依りてマールボロ公を召還したりければ。カールは到底獨力を以て佛國と争ふの不利なるを悟り。終に千七百十四年三月七日締和條約をラスタッドに結べり。此の條約に依りて埃太利は西班牙の王位を棄てたれども従來西班牙の領地たりしニールランド、ネーブルス、ミラン、サルヂニアの諸州を得たり。後千七百十七年九月七日のバーデン條約に依りて日耳曼はランダウ城を佛蘭西に讓與せり。又前きに佛國に黨したるの故を以て其の領地を沒收せられたるバヅァリア撰舉侯及びケールン撰舉侯も亦許され

敬意を表せり。メッテルニッヒの才ありて斯の國を代表す。亦快ならずとせんや。且つや彼れ權門に生れて權門の女を娶れり。父は公爵にして甥も公爵。闊高く族貴きと斯くの如し。彼れが萬人の羨む所となりしや亦宜なる哉。當時埃太利は門閥を尊ぶと甚しく。如何に材幹智識あるも門地の低き者は到底外交家てふ榮職を得る能はざりき。メッテルニッヒは即ち門地、材能兩つながら具はる。其の一世に飛躍せる誠に所以あるなり。メッテルニッヒ巴里に赴きしは千八百六年にして。彼れ春秋を経るを既に三十三。十餘年來外交場裡に翔翺して天成の奇智に加ふるに幾多の經驗を以てす。風采愈々揚がり。權略益々加はれり。明亮緻密なる頭腦と。多岐萬端なる智識と。冷靜深刻なる意思と。幾多の妙藝巧

て花領に歸れり。

カール六世年老いて猶一子無し。帝仍て有名なる「ブラグマテック、サンクシオン」なる一典範を制定し。若し埃太利家に男系の相續者無きときは女系を以て相續者と爲すの制を定めんと欲したり。皇女マリア、テレサの生るゝに及んで帝は愈々此典範を定めんと欲し。百万術を盡くして歐洲の諸王及び日耳曼の諸侯を勸誘し終に其の希望を達せり。

紀元千七百四十年十月二十一日カール死せり。「ハプスブルヒ」王統の男系是に至りて盡く。

第十二節 マリアテレサ○普魯西の勃興

第一項 マリア、テレサ即位の困難

カール六世は「ブラグマテック、サンクシオン」を制定して女系相續の制を立てたりと雖も。カール死して其の女マリア、テレサが帝位を繼がんとするや。幾多の反對に遭遇して位に即くの甚た困難なるを見たり。而してマリア、テレサを排して自ら埃太利に王たらんと欲したるものは。バヅァリア撰舉侯アルベルト、サクソニー撰舉侯オーガスタス三世、及び波蘭王是れなり。然れどもマリア、テレサ

技とを具へたるメッテルニヒは今や華麗歐洲に冠たるの巴里に在りて機智敏慧己れに劣らざるの一大外交家に逢遭せり。佛の外務大臣タルレーランド即ち是れなり。タルレーランド風半蒲酒、舉止閑雅、應對流るゝが如く。談論風の發するに似たり。眞個に是れ佛蘭西紳士の好標本なりき。其の學藝に長せる其の權略に富める。亦メッテルニヒと伯仲するに足れり。此の公使と此の外務大臣と。手を握り袖を連らねて天下の形勢を談す。風發の辯縱横の談勢翳として吾人の面前に在るが如し。

メッテルニヒとタルレーランドとは多くの點に於いて酷似せり。其の多智多能なるは相似たり。其の快活滑脱なるは相似たり。其の學藝優美にして談話に巧なる相似たり。其權謀術策に富める相似

は此の三人よりも更に強大にして恐るべき敵を有したり。有名なる普魯西のフリードリヒ大王即ち是れなり。フリードリヒは前の三人に先ちて早くも兵を起し埃太利の領地中最も良好なる土地を侵略せり。故に余は次項に於いて普魯西が如何にして斯く有力なる一國と爲りしかを略叙せん。

第二項 普魯西王國の隆興

余は本章第九節第四項に於いてフランデンブルヒ撰擧侯にして普魯西公を兼ねたるフリードリヒが普魯西王の位を得たることを一言せり。是れ即ちフリードリヒ一世なり。フリードリヒ一世性華奢を好み佛王ルイ十四世の浮華に摸倣して無用の虚飾を事したり。されど彼れは汲々として普魯西の勢力を強固にするを力めたるを以て。同國が後日盛大を致したるは彼れの盡力に負ふ所甚だ鮮なからざりき。就中彼れの功績の最も顯著なるものは。ハルレ大學ベルリンの科學各校及び其他幾多の學校を設立したると是れなり。フリードリヒ一世は千七百十三年に死し。其の子フリードリヒ・ユルヘルム繼いで普魯西王となる。

たり。されど二人の間には黑白雲泥の如き一の差異ありて存したりき。

タルレーランドは自由民權的思想を有し立憲政体の創設を希望したり。唯彼れは佛國の人民が亂暴騷擾を極め萬事を破壊するを見て却つて憲政の創建を妨害せんとを恐れ。秩序を保ち平和を維きて徐ろに彼岸に達せんと欲したり。是れ彼れがナポレオン一世を補けて暴民を鎮壓せんと欲したる所以なり。されどナポレオンの野心は次第に膨脹し專制抑壓を以て國民を司配し憲法を制定するの意なきに及んでタルレーランドは其の事を與にするに足らざるを悟り。飄然として彼を去れり。若し夫れメッテルニヒに至りては民權自由の主義を惡むと蛇蝎も首ならず。君主專制を以て無上の良政と爲し。立憲政治は徒らに下民の横議を醸し政治の紊

して武骨なり。少しく己れの意に適せざるとあれば激怒憤恨始んと當るべからず。妻子家族と雖も毫も假釋する所無かりき。最も學問を擯斥し學者を輕蔑せり。唯彼れの性質の一長所はその能く節儉力行なるの點にありき。されど此の節儉すら頗る極端に走りて殆んど弊害に陥るの恐ありき。凡そ古來の帝王にして彼れが如く質素の生活爲せしものは殆んど是れ無かるべし。彼れが父に繼いで王位に居れり。斯くてユルヘルム一世の樂みとする所は喫煙室の集會にして。彼れは毎夜朝臣を喫煙室に集め。臭煙室に滿つるの中に國事を談じて以て無上の快樂と爲したり。彼れは斯くの如く粗糲武骨にして又頗る苛酷壓制なりしと雖も。常に汲々として普魯西の國力を養成するを計り。歐洲の諸國より兵士を募集して軍隊を組織せしかば。その死時には精銳無比の兵士八萬の多きに達せり。殊に王は軀幹長大の兵卒を愛し。人を歐洲の諸國に派出し無算の資を投じて巨人を募れり。有名なるポツダム親兵と稱するものは即ち此の巨人の軍隊なり。千七百四十年五月三十一日フリードリヒ・ユルヘルム死し。フリードリヒ二世繼ぐ是れ即ち後世雷名を轟かしたるフリードリヒ大王なり

亂を來たすに過ぎざるを極論せり。彼れの眼中塊太利皇帝ありて。人民の權利なし。皇帝を擁護して民權の膨脹を抑へんが爲めに一身を賭するも敢へて彼れの辭せざる所なりき。其のタルレーランドと政見を異にする亦甚しからずや。加之兩人はその氣質に於いても亦多少の差異なくんばあらず。タルレーランドは吝嗇にして財貨を積むに汲々たりしも。メッテルニヒに至りては爾かく貨殖に汲々たらず。邦家社稷の爲めには往々にして萬金を投ずるも惜まざるあり。兩者の性質見識や一長一短。未だ容易に優劣を分つべからず。而かも彼等が一代の偉物なりしや亦疑ふべからざるなり。

メッテルニヒの巴里に在るや才氣横發。觀察周到。人皆其の非凡なるに驚けり。彼れは實に巴里に駐在せる列國公使中の

フリードリヒ二世即位の時二十八歳。學博く材多くして前途頗る多望の青年なりき。彼れ幼にして學を好み文を嗜みしかば粗暴殘忍なる父に嫌惡せらるゝ。甚しく酷遇虐待にさらざる所なかりき。フリードリヒ終に父の虐待に堪ふる能はずして、千七百三十年密かに逃れて英國に走らんとせり。事中途にして覺はれしかば父憤怒すると甚しく法庭を開きて死刑の宣告をフリードリヒに下したり。斯くてフリードリヒは將に刑架上らんとせしかども。その母及び宮臣等之れを憫れみ百方辨疏して僅かにその死を救ふを得たり。カッテと稱する一少年はフリードリヒの逃走に加擔したるの故を以て。フリードリヒの目前に於いて刑戮せられたり。

フリードリヒは斯くの如き粗暴殘忍なる父の下に成長せしを以て頗る其の感化を受けて。温厚親愛の情を缺き苛酷嚴格の人と爲れり。されど性來多能多材なれば。即位の後直ちに政務に敏學し汲々として國運の隆盛を謀れり。彼れは徹頭徹尾專制主義を取り。會て一事だも宰臣に諮問する無く。宰臣は如何なる小事と雖も自ら決行する能はず。必ず先づ王の裁可を待たざるべからず。されば大臣は毫も政權無く唯王の命令を奉じて之れを執行するに過ぎざりき。

日耳曼皇帝カール六世の死せるや。人皆以爲らくフリードリヒは必

王たりしなり。列國の公使等は睦乎として彼の後に從ふのみ。千八百六年メッテルニヒ佛國とフォンタインブローの條約を結び。連敗の餘猶能く塊國の体面を傷けざるを得たり。ナポレオン倨傲不遜萬人を傲視して一世を眼下に睥睨す。獨りメッテルニヒに接するに至りては。禮を厚うし辭を和らげて。敢へて輕蔑する事無かりき。ナポレオンは深く一個人たるメッテルニヒを愛したり。されど外交官たるメッテルニヒを畏るゝこと大なりき。其の愛したるはメッテルニヒが快活多材の人たりしが故なり。其の畏れたるはメッテルニヒが千百の陰謀を胸底に藏せるが爲めなり。且つ夫れメッテルニヒの意見は以て塊太利の宮廷を左右するに足れり。もしナポレオンにして彼れの感情を害せば。彼れ必ずや塊帝の皇女がナ

サヤマリヤ、テレサを援げんと。されどフリードリヒは胸中斷へず普國を擴張するの計を案じ。カール六世の死するや此の機に乗じて平生の希望を達せんと欲し。牽強附會の理由を以てシレンシヤの土地を塊太利より奪はんと企てたり。是れ即ち有名なるシレンシヤ戦争の起源なり。

第三項 第一回のシレンシヤ戦争

普王フリードリヒは使を維納に遣してマリヤ、テレサに言はしめて曰はく。女皇もしシレンシヤを余に割與せば。余も亦必ず女皇を援けて其の位を安全ならしめんと。マリヤ、テレサ之れを聞きて大に憤り斷乎して普王の要求を拒絶せり。然るに普王の機敏なる此の時既にシレンシヤに入りて塊太利の軍卒を驅逐し全く之れを占領したり。翌年塊太利の大將ナエペルヒは軍を率ゐ來りてフリードリヒを撃ちモル井ツツに戦へり。此の時フリードリヒは猶戰に慣れざりしかば砲聲相交るや戦々として魄奪はれ魂戰き走りて腕中に隠れたりと云ふ。されど其の將卒は皆奮闘勇戦せしを以て終に大に塊軍を破れり。

ナポレオンに嫁するを妨げん。是れを以てナポレオンは頗るメッテルニヒの歡心を求むるに力めたりき。

斯くてメッテルニヒはナポレオンに畏敬せられ。外交社會に雄視して。巴里に留まる事三年。その間常に銳眼を注いで佛國の内情とナポレオンの計畧とを偵知し。埃國をして之に應ずるの謀を爲さしめたり。時にナポレオンは魯國を侵すの意ありしが。メッテルニヒは早くも之れを洞觀し。謂へらく。是れナポレオンの一大失策なり。彼れが一蹶また起つ能はざるの期は近づけりと。而してメッテルニヒは直ちに此の意を本國に通じ。佛帝一朝魯國に失敗せば直ちに兵を擧げて起つの準備を調へしめたり。先見の明なる彼れの如きは實に稀なりと謂つべし。彼れ曾つてナポレオンの人物を評し

て左の如く言へり。

ナポレオンは大立法者となれり大行政官となれり大軍人となれり。是れ彼れの資性に適應したるの職司なり。彼れの思想は常に積極的方面に向つて進り其の觀念は物質的方面に傾けり。されば彼れは糗稜曖昧なる空想を好まず。夢幻の如き抽象的理想を嫌へり。一事一物も明亮に實際的に説明せらるゝに非ざれば。彼れは直ちに無稽の荒誕として敢へて顧みず。彼れの好む所の科學の肉體の智覺によりて會得すべきものに非ざれば則ち實驗と觀察とを基礎としたるものなり。十八世紀の哲學理想の如きは目するに虛妄誤謬を以てして之れを排斥し。ヴォルテールの如きは彼れの最も輕蔑したる所なりき。されどナポレオンは頗

メッテルニヒ

近世歴史

二二七

第十三節 マリア、テレサとカール第七世

○第二回 シレシア戦争

埃軍モルブリッに敗れてより。普魯西は佛蘭西、西班牙、バヴア、及びサクソニーと同盟して愈々埃太利に迫れり。佛蘭西の軍はバヴアリア軍と合して日耳曼に侵入し。サクソニーの軍はボヘミアに侵入せしかば。マリア、テレサの勢日に盛まり。維納も亦陥るに垂れたり。然るに此の時バヴアリア撰擧侯カールはサクソン人が獨り勢をボヘミアに選うるを嫉み。翻然鋒を轉じてボヘミアに向ひ其の首府フランクを取り終にボヘミア王の位に即けり。次いで千七百四十二年フランクフルトに於いて日耳曼皇帝の位に即きカール七世と號す。是に於いてマリア、テレサの勢は愈々非なるに至りぬ。さればマリア、テレサは百計を運らして頽運を挽回せんと欲し。幼兒ヨセフを抱きて匈牙利の議會に臨み。涙を振つて匈人忠勇義烈の精神に訴へ以て其の援を求めたり。匈人はマリア、テレサの哀訴を聞いて痛く同情の念に動かされ。奮つて其枉屈を伸べて前敗を回復せんことを誓へり。斯くて匈牙利の軍は直ちに埃太利を回復し更に進

んでバヴアリアに入り。カール七世がフランクフルトに即位せるの日ムニヒを取れり。

時に埃太利の將カールは普王フリードリヒとツァルムスラウに戦つて利あざりしかば。マリア、テレサは上部シレシアの全部及び下部シレシアの一部を割きて普王に與へ以て和を講せり。次いでサクソニーも亦埃太利と和せしかば。今や埃國と争ふものは唯佛蘭西とバヴアリアの二國のみと爲れり。時に佛蘭西の兵は屯してフラーグに在りしかば埃將カール討つて之れを驅逐し全くボヘミアを恢復せり。カール七世も亦敗れてフランクフルトに遁れしかばバヴアリアも埃太利の手に歸しぬ。加之英王ゲオルグ第二世は佛軍をテッチングンに破りければマリア、テレサの泰運は茲に開けて。勢俄に加はれり。普王フリードリヒは前に一度和を講せしかども。マリア、テレサの勢再び盛なるを見て心竊かに之れを恐れ。謂へらくマリア、テレサにして勢を得ば必ずや前に割讓せるシレシアを回復するを企つべし。若かず俄かに兵を起して其の勢を殺ぐにはと。千七百四十四年。名をカール七世の帝位を擁護するに托して。終に第二回のシレシア戦争を起せり。翌年カール七世は死したれども。普王は

る宗教を重んじ。人間社會を支配すべき思想は只宗教のみなることを信せり。然れども彼れの宗教を重んずるは眞個に神を恐れ聖靈を信するに非ずして。只社會國家を統御するの一方便として之れを重んずるのみ。故に彼れは加特力の教徒なれども敢へて自ら宗教上の儀式を守り禮拜を行ふと無し。

ナポレオンは頗る人を見るの明あり。苟も用ふるに足るものあれば直に拔擢して己れの用を爲さしむ。彼れ又佛蘭西人民の性質氣風を詳知して巧みに之れを利用せり。彼れが史を讀むとの多からざるは數々同一事實を引用するにても知るべし。されど彼れは一を讀むて十を推知するの才あり。彼れの追慕する所の英傑は、アレキサンダーと、シーザーと、シャールマンとなり。彼

猶戰を止めずして連りに埃軍を困しめたり。埃軍ホーヘンフリードベルヒ、ソル、及びクスセルスドルフ等に戦つて大に敗れたり。かば。終に和をドレスデンに講じ。普王が略取せるシレシアの土地をば全く是れに讓與せり。

第十四節

マリア、テレサとフランス第一世七年戦争

第一項 フランス第一世日耳曼皇帝の位に即く〇八年間の平和。

フランスはタスカニー公にしてマリア、テレサの夫なり。千七百四十五年カール第七世死せしかば同年九月十三日を以て日耳曼帝の位に即けり。普埃二國がドレスデンに和を講ずるに及び普王フリードリヒもフランスの帝位を承認せり。時に佛軍は猶埃太利と争ひ。サクセを將として屢々埃軍をニーゼルランドに破れり。千七百四十八年埃太利はハルマ及びピアセンザを佛國に割與して和をアーチエンに講せり。

アーチエンの媾和以後日耳曼は八年間の小康を得たり。此の間マリア、テレサ及び普王フリードリヒは汲々として民力の休養に力を盡

れは己れの家系の舊くして門地の高きを誇稱す。彼れは人を見ると恰も土芥の如く毫も他人を尊敬するとなし。されど彼れは家庭に在りては質朴にして眷族に愛せらる。彼れの風采は頗る揚がらず。口訥にして快談縱横の辯を有せず。軀幹矮小にして甚だ威嚴の見るべきもの無し。故に彼れは如何にもして身体を長からしめんと欲し。行歩必ず足指を用ひたり。彼れは又如何にもして其の身邊に人目を引かんと欲し。或る時は壯麗人目を奪ふの美服を裝ひ或る時は衆人よりも一層質素なる服裝を着け。常に人の意表に出づるを努むるが如し。

ナポレオンの胸中に燃々たる希望は只權勢を得るに在るのみ。彼れは曾て此の目的に適せざる事柄に時間と思慮と

くしたり。

フリードリヒはホッッダムにサンシ、ソウシの宮殿を建て、之れに居れり。王精勵勤勉親から萬機を總裁せけ。又風流韻事を嗜み音樂を愛し文學を好み。毎年一度必ず國內を巡視して民情風俗を視察し兵備の状況を監視せり。訴訟の法を簡易にして萬民をして冤枉の怨無からしめ。工業殖産を奨励して國富を謀り。宏壯なる堂屋を建て、伯林に偉觀を添へたり。王又佛蘭西語を善くし其の文士學者と親交せり。千七百五十年王は佛蘭西の學者ヴォルテールを聘して己れの宮中に留まらしめ、以て研學の師友と爲せり。されど後王とヴォルテールとの間に不和を生じければ。ヴォルテールは終に辭して去りぬ。

第二項 七年戦争

第一 其の發端

アーチエン媾和以後日耳曼は八年間の平和を得たれども是れ決して戦争の終局せるに非ず。普王フリードリヒとマリアテレサとは相和する能はざるに及ぶ。普王フリードリヒは如何にもして前に割讓せるシレシアの地を普王より取らんと欲し既々として機會

を畏したると無し。彼れは己れの初一念を貫くには如何なるものをも犠牲にするの決心を有す。彼れ既に斯くの如き決心を有す。彼れは如何なる時代に生るゝも偉人たるを得べし。彼れの眼は自己の大成によりて眩惑せられ天下の事一として意の如くならざるは無しと速断せり。彼れの事を行ふや。恰も戦車の進むが如し「車轍の過ぐる所萬事を破砕して顧みざるなり。彼れは家族に對しては必ずしも同情の涙無きに非ず。されど國事に當るに至りては情無く涙無く如何なる殘忍苛酷の事も冷然として忍ぶを得るなり。

ナポレオンは人に仁恵を施すこと無し人より受くるに非ざれば決して人に與へざるなり。彼れは公事を行ふに當りては愛憎に依りて其の進路を枉げざ

の來るを俟てり。時に歐洲の諸國も普國が一朝にして勃興し優に強國と比肩するの勢あるを見て皆竊かに之れを嫉み。苟も機に乗すべきあれば直ちに之れを擠さんと謀れり。普王フリードリヒも亦是れを察知し汲々として曾て戦備を怠らざりき。佛國は從來普王に黨したれども、是に到りて普王は佛國の恃むべからざるを知り。更に英國と結んで塊國に當らんと欲し千七百五十六年一月を以て攻守同盟を訂結せり。是に於いてカリア、テレサも亦事の漸く迫れるを見、舊怨を棄て、佛蘭西と同盟せしかばサクソニー、魯西亞も亦此の同盟に加入せり。斯くて同盟は必ず普國を擊破して大に其の鋒鏑を挫かんと期せり。

普王は塊太利同盟の成りしと聞きて毫も恐るゝと無く勇氣却て十倍し直に六萬の大兵を將てサクソニーに進み。千七百五十六年八月その境を歴して來れり「サクソニー」軍一萬七千人。不意の攻撃に逢ふて敵する能はず退いてエルベ河の溪間に入り。以て普軍を拒がんと欲せり。普軍急に之れを圍みしが偶々塊軍の來りて「サクソニー」人を援くるに會ふて軍を分ちて塊軍に當らしめ十月一日ロゾウシッツに戰つて塊軍を擊退せり。是に於いて「サクソニー」兵は全力を盡くして圍を潰さんと欲したれども復た普軍の破る所と爲り終に戈を倒にして降を乞へり。

るなり。其の敵を斃すに當りてや。如何なる手段をも彼れの辭せざる所也。

ナポレオンの建設したる伽藍は全く彼の獨力に成れり。彼れは其柱石として伽藍の全体を支持す。されど其の基礎は虚弱にして鞏固ならず。彼れが建築に用ひたる材料は只々他の破屋の古石朽木に過ぎず。斯くの如きの大屋堂に久しきを得んや。

ナポレオンの氣質と風采とを描き出してまた除蓋なし。メッテルニヒの觀察周なる大概斯の類なり。蓋し歴史家のナポレオンを寫すものは、多く其の半面を見て全面を見ず。是を以て或る者は漫りに讚辭を呈し殆んど彼れを拜崇すれども。或る者は彼れを以て惡魔と爲し奸雄と爲し。罵詈譏防至らざるなし。メッテルニヒの心は冷靜にして感情に奔らず。過激

して降を乞へり。

第二 フリードリヒの勝利

千七百五十七年普王フリードリヒは頗る危險の地位に陥れり。塊太利は佛、魯の外更に瑞典の同盟を得たるのみならず。日耳曼の諸侯も亦多く塊國に與みせり。而してフリードリヒに黨せしものは、ヘッセン、ブルンスウィック、ゴータの三侯に過ぎざりき。されど普王の大膽勇敢なる毫も之れに屈すると無く直ちに軍を起して四方を攻伐せり。蓋し王は敵の同盟をして軍勢を集めしむるときは容易に當り難きを知り。敵軍の未だ備へざるに乗じて之れを撃てり。其の進軍の迅速なる恰も疾風の如く敵をして迅雷耳を掩ふに遑わらざらしめたり。次いで普王は少數の兵を普魯西に留めて瑞典及び魯西亞に備へ。己れは自ら精兵を率ゐてポヘミアに入り。千七百五十七年五月六日塊軍とブラーグの近傍に會ふ。ローレン公カール塊軍に將として善く戦ひしかば。普軍殆んど敗走せんとせり。普の老將シュヴェリン之れを見て大に憤り自ら陣頭に立ちて旗旗を翻へし以て將士を勵げり。シュヴェリンは不幸にして忽ち敵丸に斃れたれども。普軍の氣爲めに大に振ひ再び突進して終に大に塊太利の軍を破れり。塊軍半ばはキュッテンヘルヒに逃れて塊將ダウンの軍に合し。

に流れず。故に彼れがナポレオンを評するや敢へて偏頗に陥らずして能くその全面を觀察し以て公平の判断を下したるなり。

第五 メッテルニヒと塊太利の宰相と爲る

千八百九年、佛の平和は復た破れてメッテルニヒは維納に召還せられたり。時に伯爵スタチオン、塊太利の宰相たり。スタチオン敢て平凡無爲の政府に非ざりしが、未だ以て塊國當年の至難なる政局に當るに足らず。此の時に當りてや、塊太利は屢々ナポレオンに破られ、國力疲れ瘡痍未だ癒へず。而して今また佛軍來り攻むるの勢あり。是れ豈に危急存亡の時に非ずとせんや。斯くの如き危機に處して禍を防ぎ社稷を擁護するの技倆を有するものは、只メッテルニヒの一人あり。

半ばはブラーグに遁れたり。

第三 普王フリードリヒの敗軍

千七百五十七年六月十八日、フリードリヒは塊將ダワンとコリン附近に戦つて大に敗れたりしかば、塊軍は勢に乗じて普軍を追ひ、シレシアの大部を取れり。時に普軍は東境を歴して普國の守兵を破り、瑞典も亦北境より來り侵すの勢ありしかば、フリードリヒの素運は全く傾きて又如何ともする能はざるの觀ありき。もし王をして干挫不撓の氣象無からしめば、失望落膽して地を割き禮を卑うして和を敵に乞ひしや必せり。されど王の勇氣は一難を経る毎に一倍し來り毅然として萬難を排せんと決心せり。果せる哉、彼れは幾も無くして二大勝利を得たり。余は次に之れを記さん。

第四、フリードリヒの二大勝利

塊軍佛軍を合して向ふ所殆んど前無く。將にサクソニーを取らんとせり。フリードリヒは撃つて之れを退けんと欲し、兵を率ゐてリアルに向ひ。十一月五日將にロスバツハに入らんとして敵軍に會ふ。敵軍は衆を恃んで大にフリードリヒを侮り、以て爲らく普軍を蹂躪し其の王を捕ふるに囊中の物を探ぐるよりも易しと。深く警戒を加へずして而して進む。フリードリヒは靜かに隊伍を整へ從容として將士と談話し以て敵の近づくを俟てり。敵既に近づくに及んで萬銃齊しく發し騎兵次いで馳突す。敵軍狼狽はすして走れり。フリードリヒ乃ちサクソニーを取り、普軍の勢大に張れり。是に於いて王は更に進んでシレシアを回復せんと欲し、ロスバツハの戦後一月にして大にロエタンに戦へり。此戦や普軍僅かに三萬の寡を以て塊軍八萬の衆を破り、全くシレシアを回復せり。

普王既にロスバツハ及びロエタンに勝ちサクソニー及びシレシアを復せしかば、此の機に乗じて和を結ぶに如かずと爲し。是れをマリア、ア、ブレナに圍りしも、マリア、ブレナは到底普王に釋然たる能はず。斷然和議を拒絶せり。

第五 クレフェルト、ツォルンドルフ、ホッヒキルヘンの戦

千七百五十八年普魯西の味方なるブルンスヰック公フェルチナンドは英國の援兵と與に佛蘭西の軍をクレフェルトに撃ちて大に之れを破り佛軍をライン河西に退けたり。時に普王フリードリヒはオルミツを取らんと欲して利あらず。魯軍普魯西を侵し劫掠を恣にするに聞き、一將を留めてシレシアを守らしめ己れは急に軍を率ゐて普魯西に向ひしが、八月二十八日魯軍とツォルンドルフに會し。大

るのみ、帝終にメッテルニヒを擧げて宰相と爲し賜ふに公爵の榮位を以てせり。メッテルニヒは佛蘭西に對するの政略は一日も開戦の期を延延して、一方に於ては前敗の瘡痍を癒し他方においてはナポレオンの蹉跌を待つに在りき。時にナポレオンは其妻ジョセフヒンの子なくして後嗣の絶んとを憂ひ、之れを去つて塊太利帝の女マリア、ルイサを娶らんとを希へり。メッテルニヒ乃ち機乘すべしと爲し、皇女を佛帝に妻はして、以て佛軍の銳鋒を避けんと欲せり。

ナポレオンが塊太利の皇女を迎ふるは、名は正當の結婚なりと雖も、其の實は戦勝の餘威を藉りて強いて皇女を奪ふに均し。若し塊太利にして兵強く力足らば憤然としてナポレオンの要求を排斥せしならん。夫れナポレオンの權勢は當年正に

其の極度に達して。赫々たる烈日の萬物を焼くが如く。凍々たる秋霜の草木を枯らすに似たり。列國震悚して敢て其の命に抗する無し。彼れ夫れ何を永めてか成らざらん。彼れは既に近世のジューリアス、シーサーと成れり。配するにシャールメンの後裔たる埃帝の女を以てせば、豈に亦壯ならずや。彼れがマリヤ、ルイサを娶らんとを希望したる偶然に非ず。ルイサも亦ナポレオンに嫁せば。チュネリ、グエルサイユの宏殿玉樓に入りて蓋世の英雄に配し。萬人の仰敬を受くるを得べし。而かも此の結婚や。終にマリヤ、ルイサの名譽に非ず。はた埃太利の光榮に非ざるなり。埃帝は唯ナポレオンの威を恐れ其の歡心を求めんが爲めに意を狂げて皇女を佛國に送るなり。名は婚嫁と稱すと雖も。その實は貢賦を撰ぶ所なし。

に是れに戦ふ。晨より夕に至りて勝敗決せざりしが。普軍終に勝ち魯軍は波蘭に走れり。是に於いてフリードリヒはサクソニーに至り弟ハインリヒを援けて埃將ダウンを對陣せり。ダウンは險要の地に據りて守備を嚴にしたれども普王はホツヒキルヘンの平野に陣して頗る攻守に便ならず。將士皆普王を諫めて陣を移さんとを勸む。王聽かず。十月十四日埃軍味爽に乗じてホツヒキルヘンを砲撃し大に普軍を破れり。普軍死傷殆んど算無く麾下の將士斃れたるもの頗る多かりき。翌朝曉霧晴るの後普王は敗餘の兵を糾合して徐に隊伍を整へ怒々として退けり。埃軍は普王の徳容迫らざるを見て。敢へて追はず。

第六 ミンデン及びクナルスドルフの戦○普王の大敗

千七百五十九年埃太利及び其同盟は全力を擧げて普魯西を壓服せんと欲せり。魯軍は大舉してオーデル河に進み。埃太利はダウンとロウドンとを將として將にシレンシアに迫らんとす。是れと同時に佛蘭西は再びライン河東の地を復せんと欲し、二道より進んでラインを渡りカスセル及び其他の市邑を陥れたり。ブルンスヰック公フルデナンド抗する能はずしてブレメンに退きしが。八月一日終に佛

恰も是れ漢家の美妃が單于に嫁して塞北の人と爲るに類す。若しマリヤ、ルイサをして一片凍平たる氣節を具へしめば。彼れ豈に潛然として双袖を沾さざるを得んや。されどルイサは輕躁にして貞節無く毫も婦徳の凜乎たるものなかりしかば。普に佛帝に嫁するを憂へざりしのみならず。却て欣然として佛蘭西に赴くとを承諾せり。噫。ルイサは萬乘の帝室に生れて。恬然として敵國に貢賦せられたるなり。

軍とミンデン附近に戦ふ。佛軍の騎兵中堅に在り。英國及びハノーヴエルの軍に破らる。フルデナンド乃ちサククヴィル公をして佛軍を尾撃せしむ。サククヴィル躊躇して應せざりしかば。佛軍は兵を全うして退くを得たり。是に於いてフルデナンドは再びライン以東の地を復せり。ライン河畔に於いてはフルデナンドは佛軍を破りたれども。普王フリードリヒには戰甚だ利あらず。魯軍のオデル河を渡るや普王は部將ヴェデルを派して之れを防がしむ。六月二十三日ヴェデルは魯軍とケーに戦つて利あらず。魯軍は進んで終に埃太利の軍と合し其勢頗る熾なり。是に於いてかフリードリヒは全力を擧げて埃魯の軍を破らんと欲し自ら軍を率ゐて之に赴けり。發するに臨み臣下に告げて曰はく此の戰は實に普國危急存亡の係る所なり。余今死を決して是れに赴く。軍若し敗れば復た生還せざるべし。汝等夫れ弟ハインリヒを擁立し。萬難に逢ふも決して敵に降ることなく。因新舊勝誓つて國辱を雪ぐべしと。斯くて普軍は魯埃の軍とクナルスドルフに會し。激戰數刻にして魯軍の左翼先づ敗れ走る。フリードリヒは勢に乗じて之れを追撃せんとす。將士皆諫めて曰く我が軍長驅兵馬皆勞る。若かず兵を收めて小憩し以て明朝再び戰はんにはと。

ア、ルイサを巴里に遣はせり。

第六 ナポレオンの末路とメッテ
ルニッヒと。

メッテルニッヒがマリア、ルイサの婚嫁を計りて巴里に在るや。彼の烟眼は歐洲の大勢を觀破して謂へらく。明一年(千八百十一年)の間に歐洲の平和は猶擾擾せられざるを得べしと。此の時に當り魯國は北歐に僻在して佛軍の銳鋒を被らず。常に普、埃を援けて。ナポレオンに敵せり。ナポレオンは大に露國を害とし之れを席捲して全歐を意の如くせんを欲し。汲々として戰備に忙はしかりき。されど萬里軍を懸けて北地に臨み決して容易の業に非ず。用意周到準備完全ならざれば勝算得て期すべからず。故に千八百十二年の始めに至らざればナポレオンは到底師を魯國に出す能はず。是れメッテ

フリードリヒ聴かずして戰ふ。時に魯軍の右翼及び埃軍は猶精銳なりしかば普軍幾たびか吶喊して之れを衝きたれども終に敗れず。フリードリヒ終に勢の不可なるを悟りて退却せり。魯埃の軍乃ち此機に乗じて突進し普軍を斃すと一萬七千餘人。普王僅かに身を以て逃れたり。普王の豪毅勇敢なるも是に至りて失望落膽し。書を宰相フリーセンスタエンに贈つて曰はく。余が事既に終れり。向後普國の不幸は此の戰の慘狀よりも甚しきものあらん。余は生きて故國の不幸を目撃するに忍びず。余は今汝に別を告ぐと。王は當時實に自殺を企てたれども既にして翻然として心を改め。再び起つて敵軍に當らんと決心せり。恰も善し此の時埃と魯とは既に猜疑嫉妬の念を萌したりしかば。普王は此に乗じて兩者を離間し以て類勢を挽回せんと計れり。されどフリードリヒの泰運は容易に開くべくも見へざりき。余は次項に於いて彼れが如何に窮厄の境に陥りしを記述せん。

第七 普王フリードリヒの窮厄

フリードリヒのクテルスドルフに敗るゝや。其の部將の諸方に向へる者亦皆敵の破る所と爲れり。普國は元來小國なれば其の財源限りあり。敗衄相踵ぎ兵馬多く疲れ。軍資漸く支へざらんとす。之れに

ルニッヒが千八百十一年は平和なるべしと預言せる所以なり。

メッテルニッヒは千八百十一年の平和を預見すると同時に。魯國征討はナポレオンの大失策なることを預想し。ナポレオンが一朝北歐の寒地に蹉跌するの曉には四面均しく起つて彼れを包撃せんことを謀れり。夫れ佛帝の征魯の舉たる突飛無謀の輕舉にして。彼のタルレーランドの如きも頗る之れに反對し。若しナポレオンにして他くまでも師を出さば斷然職を辭するの意を決せり。且つ夫れ歐洲の列國は一として佛國に黨するもの無し。波蘭、伊太利は鑿きにナポレオンの保護の下に立ちしも今や深く彼れを怨めり。普魯西は耽々として積年の怨を報ふるの機を窺へり。英國は依然として佛國を惡めり。佛の四面盡く是れ楚歌ならざるは無し。

メッテルニッヒ

近世史

二二七

反して埃國は列強の同盟を控へ。兵多く財饒かにして他まぐでも戰鬪を繼續するの勢あり。されば此の際フリードリヒにして辭を卑うし腰を屈して和を埃國に請はんか。其の普國に不利なるの條件を提出して以て之れを困しむるや炳乎として明なり。故に普王は假令刀折れ矢盡くるも他くまでも埃軍と戰はんと決心したり。千七百六十年の暑普將ホウクエはランドスフトに於いて埃軍の圍ひ所と爲り勇戦奮闘する方めたれども衆寡敵せずして終に大に敗れホウクエは敵の游ぶる所と爲れり。普王はドレスデンを取つて此の敗に報せんと欲したれども埃將ダウン大兵を率ひて來つてドレスデンを援ふに會し。志を果たさず。時に埃將ロウドンはシレンシアを畧し將に盡く之れを取らんとす。普王急を聞き直ちにシレンシアに向ふ。ロウドンはダウン及びラスシの二將と軍を合して埃軍を包圍し盡く之れを塵殺せんと企てたり。八月十五日ロウドンはフツフンドルフの高丘を占領して普軍を砲撃せんと欲し。夜密かに之れに赴けり。然るに普王亦フツフンドルフの戰に利あるを知り。ロウドンに先つて既に之れに據れり。ロウドンの來るや普王は直ちに砲撃して之れを破れり。普將ツイトテンも亦ダウンを撃つて之れを破れり。斯くて此の戰は全く普軍の勝利に歸したれども。幾も無くして窮厄は再

而るにナポレオンは幾年の成効に誇りて
 轉た倨傲の念を生じ。自ら思へらく。余
 は失敗の外に立てる人物なり。然るに世
 猶余に敵せんとするものあるは笑ふべき
 の甚しきものなりと。噫ナポレオンの聰
 明を以てしても終に斯くの如き輕信を抱
 くに至りぬ。其の舉止や進退や。亦實に
 危険なりと謂ふべし。メッテルニヒはナ
 ポレオンの倨傲甚に到れるを見て竊に笑
 つて曰はく。梟雄の末路は既に近づけり
 と。

メッテルニヒはマリア、ルイザ合衆の賀
 典終るの後。直ちに巴里を去つて。維納
 に歸り。密に佛國と戦ふの準備に着手せ
 り。彼れは第一に列國を合縱して佛軍に
 當るの必要なるを認め。私かに普國、魯
 國及び其他の小國に檄を飛ばして一致結
 合の一日も緩ふすべからざるを説けり。

普王の頭上に墜ちたり。魯軍は埃將ラスシと與に普魯西を侵し十
 月四日終に柏林に入れり。されど魯埃の軍は柏林に留まると僅に數
 日にして引ひて歸れり。次いで十一月三日普王は埃將ダウンをトル
 ガウに撃つ。晨より夕に至つて 戰 猶決せず。普軍死傷頗る多かり
 しかば。王は軍を收めて夜の明くるを俟つて再び戰はんと欲せり。
 然るに此の夜埃將は密かに軍を引いて去り。翌朝フリードリヒは再
 び戰を挑まんと欲したるときは最早斐騎を止めざりき。是に於いて
 普王はサクソニーの大半を復し。ラエプフイツトに入りて冬期を經
 過せり。

千七百六十一年普王の弟ハインリヒは埃將ダウンをサクソニーに防
 ぎて頗る功を奏せり。普王は魯將プッテルリンと埃將ロウドンとの聯
 絡を妨げんと欲したれども。終に其の功を奏せず。二將は相會して
 其の軍を合せ普王をブンツェルツ附近に圍めり。然れども埃魯兩
 國が互に猜疑嫉妬せること既に久しかりしかば一事成す所なくして
 空しく圍を解ひて去れり。其後ロウドンはシレジアの要衝たるシュ
 ヴァイドニッツを取り。ブンツェルツはボメラニアに入りてコル
 ベルヒの市を陥れたり。されば埃魯の二國は相聯絡して力を協せ
 んよりは却て分立孤行するに利ありしなり。

第八 普王フリードリヒ勢再び張る

千七百六十二年に至りて普國は漸く窮厄を脱して泰運の兆に向ひ
 ぬ。此の歳一月五日魯國の女皇エリザベス死し。ピートル三世繼いで
 位に即けり。ピートルは完く前代の對外策を變じ。雷に普國と和
 せしのみならず更に一步を進めて攻守の同盟を結べり。次いで瑞典
 も亦普國と和を講せしかば。今や普王は全力を擧げて埃太利に當る
 の機に達せり。

斯くて普王は魯軍の應援を得て將に進んで埃將ダウンをブツケルス
 ドルフに撃たんとす。行軍中途にして魯帝ピートル三世の兇徒に暗
 殺せられたるの報到る。魯皇カザリン二世魯將の埃軍を援くる者に
 命じて急に軍を引いて歸國せしむ。普王フリードリヒは凶報を公に
 せば我が軍の氣を沮みて敵軍の振はんとを恐れ。魯將に請ふて三日
 の間軍を回さずして凶報の洩るゝを防げり。斯くて普王は敵軍の未
 だ凶變を知らざるに乗じて撃ちて之れを破れり。

此の後普王の弟ハインリヒと埃軍をフラエヘルヒに破り。ブルンス
 井ツク公フェルチナンドも亦佛軍と戦つて之れに勝てり。こゝに於
 いて普王は暫らく國埃と休戰を約して兵馬の勞を解せり。

第九 フェルテスブルヒの媾和〇七年戦争の終局

彼れ謂へらく。ナポレオンにして佛國に
 君臨する限りは。歐洲の平和は到底永續
 するを得ず。苟も平和を克復し歐洲の安
 寧を保たんと欲せば。到底ナポレオンを
 倒して復び起つ能はざらしむるの外なき
 なりと。英のピット、カッスルレーの如
 き。普のハルデンベルヒの如きも亦是れ
 と意見を同うせり。されど列國は區々た
 る事情に拘泥して連合の議容易に成ら
 ず。殊に普魯西は最も同盟するに躊躇せ
 り。普王フリードリヒ、ナルヘルム三世
 は性來怯懦優柔にして悉も剛毅不屈の資
 なく。徒らにナポレオンの威を恐れ敢
 へて之れに敵するの意なく。却て硬骨有
 爲の宰相スインを追へり。(ピスマルク傳
 を参照せよ)。されどメタイン、ハルデン
 ベルヒ、シュオレンホルスト等は夙に日
 耳曼全國の力を擧げてナポレオンに當る

の必要なるを認めたりしかば。ハルデンベルヒがスタインの後を承けて普國の宰相たるに及び。メッテルニヒと約するに緩急相應するを以てせり。是に於いて普塊の同盟漸く成るを得たり。

既にしてナポレオンは愈々師を魯國に出たせり。果然メッテルニヒの豫想は的中して。梟雄大にモスクハに敗れ。急に兵を引ひて逃れ歸れり。是に於いてか列國は盡く戈を振つて起てり。而してライプツィヒの大戦。佛帝の壯圖全く敗れて。終に地中海中の一孤島に滿せられぬ。

ライプツィヒの戦未だ始まらざるや。メッテルニヒはナポレオンを見て語つて曰はく。閣下今大軍を擧げて來る。然れども閣下にして平和を欲せば。戦を止むる必ずしも難からず。戦ふと和するとは一に閣下の決心如何に存す。閣下もし和せ

マリヤ、テレサは猶普國と戦はんと欲したれども。歐洲列國の趨向は既に一變して復た塊太利と進退攻守を與にするもの無し。魯の女皇カザリンはビートルの遺志を繼いで普國を援け。瑞典も亦普國に與みし。佛蘭西は既に攻争に勞れてまた戦ふの意無し。さればマリヤ、テレサは全く味方の同盟を失つて獨力孤立の勢と爲りぬ。是を以て彼れ亦終に和を講ずるの得策なるを覺り。千七百六十三年二月十五日フヘルテスブルヒの媾和條約は塊普の間に成り。七年戦争は茲に漸く局を結べり。此の條約の決定したる最も重要な事項はシレンシアを普國の領有に歸したる是れなり。されば七年戦争が無敵の生命を害し若生塗炭の苦を來たして得たる所は殆んど是れ無かりしなり。蓋し彼のシレンシアの如きは七年の戦争以前に既に普國に割讓せられたるものなればなり。

されど普國は七年戦争より間接に得たるの利益は決して尠なからざりしなり。普國は森爾たる疆封を以て七年の間歐洲の列強と馳逐して千挫百折毫も屈するも無く既に凱歌を擧げて和を講せり。是れ豈に名譽の媾和に非ざらんや。斯くの如き名譽の講和は豈に大に普國の權勢を増さずして止むべけんや。果せる哉普國は尠なる一小國より一躍して直ちに強國の列に入れり。是れによりて日耳曼には南に

んと欲せば速に佛帝の位を去り歐洲列國の領地を舊に復するに如かずと。されどナポレオンは此の時猶三十五萬の大兵を擁し戰意勃々として禁する能はず。傲然としてメッテルニヒに答へて曰はく。余は寧ろ戦つて死するも。和して地を割き位を去る能はずと。メッテルニヒ喟然として嘆じて曰はく。噫是れ閣下の末路なり。余又何を言はん。袖を分ちて去れり。去るに臨みナポレオンの部將ベルチエールに語りて曰はく。君の元帥ナポレオンの大事既に去れり。是に於いてメッテルニヒ意を決して佛軍を邀へんと欲したれども。猶ナポレオンの悔悟せんとを願ひ。與ふるに數日を以てして其の猛省を促せり。然れどもナポレオンの決意亦愈々堅うして敢へて動かさず。千八百十三年八月十日媾和の談判終に破れ。烽火

塊太利あり北に普魯西ありて互に傾斜して相下らず。諸侯各々好む所に従つて或は塊に黨し或は普に與みせり。されば普は日耳曼に覇たるべきか將た塊は其の盟主たるべきかはフヘルテスブルヒ媾和以來歐洲の一大問題とはなりぬ。而して此の問題の決せられたるは實に十九世紀の最近に屬せり。事は後章に詳なり。

第十五節 ヨセフ二世

先帝フランシス一世千七百六十五年を以て死す。其子ヨセフ繼いで帝位に即く。是れをヨセフ二世と爲す。其の母マリヤ、テレサ與に政を視萬機を裁斷せり。

千七百七十二年塊太利及び普魯西は魯國と與に波蘭を討つて其の領土の大部分を取りて三國に分割せり。是れ即ち第一回の波蘭分割なり。此の分割に依りて塊は東ガリシア及びビロドシリアを得。普は東普魯西を得たり。蓋し當時波蘭の内政紊亂したりと雖ども。列國が是れを理由として其の土地を分割するは。是れ豈に他國の獨立を傷け主權を蹂躪する不法の處置に非ずして何ぞや。

千七百七十七年パウリアア撰舉侯マキシミアン、ヨセフ死せしかば皇帝ヨセフ二世は下部バヅァリアを得んと欲し兵を率ゐて之れ

一朝急を報するや。魯、普、埃の帝王は直ちに來りてテルブリックに會し。作戰の計畫を爲し。十月十六日より十八日に至る三日の間。同盟軍は佛軍とライプツィヒに戦つて大に之れを破れり。(本欄参照)翌年四月一日同盟國の君王及宰相は巴里に入り。同月四日ナポレオンを廢してエルバ島に謫し。翌月四日ルイ十八世を立て、佛蘭西の帝位を襲がしめたり。列國が佛國を討したるは。敢へて佛蘭西そのものを破壊せんことを欲したるに非ずして只ナポレオンを斃して歐洲の平和を恢復するを希望したるのみ。されば列國は敢へて佛蘭西に對して償金を要求するとなく。寛大なる條件を以て和を講せり。ナポレオンすらエルバ島に在りて年々佛國より六百萬法を受くるを許されたり。是に於いて歐洲の天地は始めて靜平に歸

を取り。バヴアリア侯の相續者なるカール、テオドルは到底抗し難きを知り其領土を三分してその二を帝に獻じ。以てその一を保つを許されんことを請へり。帝將に之れを許さんとする。然るにツツアエブルック公は帝及びテオドルの處置を不當とし。普王フリードリヒの援を得て帝の命を拒みバヴアリアを復せんと欲せり。普王亦埃帝の勢力の加はるを喜ばざりしかば直ちに公を援けて埃太利を撃たんとし。兵を將てポヘミアに入れり。されば埃帝はブルガウの一地方を取りて其地は盡くバヴアリアに返したりしかば。普埃の軍は終に一たびも戦はずして。千七百七十九年五月十三日和を講せり。當時此の出帥を稱して蕃薯戦争と曰へり。蓋し兩軍一戰を交へず兵士無事日に蕃薯を調理して之れを食ひ以て閑を消したればなり。

千七百八十年十一月二十九日帝の母マリヤ、テレサ死せり。是に於いて帝始めて萬機を親らせり。帝頗る敢爲勇進の氣象に富み。幾多の經營改革を實行せり。彼は寺院の弊害あるを見て之れを閉鎖するに六百二十四の多きに上れり。次いで信仰自由の勅令を發して。人民は如何なる宗教を信するも自由なるべきことを宣言し。羅馬教會の特權を非認したり。羅馬法皇は之れを聞き以て己れの權を侵害する

したり。されば靜平は忽ちにして再びナポレオンに擾亂せられぬ。讀者乞ふ次項に説く所を見よ。

第七 維納會議とメッテルニヒ

巴里會議の後列國の君王宰相等は更に維納に會議せり。蓋し此の會議たるや。名は歐洲列國の領土を定めて永久の平和を克復するに在りと雖も。其の實はナポレオンより奪取したる土地を列國の間に分割するに在りき。會合は千八百十四年十一月に始まりて翌年六月に終り。列國の群雄盡く一堂に集まる。實に千古の壯觀なり。而してメッテルニヒは之れが議長たり。其の光榮、得意想ふべきなり。會に列せし者。普魯西、丁抹、ババリア、グェルテンベルヒの四王。埃太利、魯西亞の二帝を首として。英のカッスルレー。

ものと爲し。自ら維納に至りて帝を詰れり。されば帝は敢へて意に介せず毫も歩を譲らず。法皇一事の爲す無くして空しく羅馬に歸れり。斯くて帝は幾多の改革を教會に施し。更に司法制度をも改革し裁判に對する貴族の特權を廢し全國畫一の行政組織を立てんと企だてたり。されば帝は一朝一夕にして直ちに斯くの如き大改革を實行し人情風俗の異同を顧みずして司法行政の組織を全國同一にせんと欲したれば。幾多の反對障礙に逢ふて終に其目的を完うする能はざりき。

千七百八十五年帝再びバヴアリアを得んと欲したれども。また普王フリードリヒの妨ぐる所と爲りて其の目的を達する能はざりき。普王は此の時多く諸侯と同盟して以て埃太利の運動を妨げたり。是れ實に普魯西が埃太利と覇權を争ふの始めなり。而して當年の同盟はフリードリヒの死と與に解散したり。

千七百八十六年八月十七日普王フリードリヒ二世死せり。王雄才大略一世を空うするの英雄にして外は普國の威勢を列強の間に耀かし内は内治を整へ民力を養ひ。普魯西をして俄かに歐洲の一大強國たらしめたり。蓋し王は常に戰を善くし武を好むの人に非ずして又政治の才に富み。七年戦争の後普國は人民疲弊し國力衰微の極に達

佛のタルレーランド。普のハルデンベルヒ。スタインあり。其他日耳曼列邦の君主の來り會する者擧げて數ふるに違わらざりき。メッテルニヒの豪奢なる盛宴を張り夜會を催うして此等の貴賓を樂ましめ。爲めに埃太利は日々一萬弗を費やしたりと云ふ當時維納の宮庭は日として宴會無きはなく夜として舞踏會無きはなく。有名なる俳優、音樂者、舞踏者は西より東より皆維納に集まれり。而して此の間に羽翹舞旋して貴賓を待遇したる者は實にメッテルニヒその人なり。余は史を繕きて維納會議に至る毎に未だ會てメッテルニヒの豪興、壯快を想はずんばおらず。

會議は十一月より始められり。其の始めや列席者の間に甚しき衝突無かりしも。日を重ぬるに従つて。魯、普、埃、英の四

したれども。王は巧みに財政を調理し民力を休養し一方に於いては司法行政の秩序組織を整頓し。他方に於いては殖産工業を獎勵し。數年にして戦後の瘡痍を癒し人民をして富國強兵を謳歌せしめたり。嗚呼フリードリヒ二世は實に千古の偉人なり。世呼んでフリードリヒ大王と曰ふもの亦宜なる哉。大王死して其の甥フリードリヒ、井ルヘルム二世王位に即きしかども。凡庸にして大王の遺圖を繼ぐに足らず。普魯西の覇圖は茲に少しく一頓挫を來たせり。

千七百八十八年帝兵を將て土耳其を撃つ。時に匈牙利及びニールランドの人民は久しく帝の改革施設を好まず。千八百八十九年ニールランドの人民は叛いて獨立するを謀り首府をブレダに定めたり。匈牙利の貴族も亦農民を煽動して叛亂を起さしめ前きに帝が實施したる改革をば大抵之れを廢止せり。王師を土耳其に出だすや。身體頗る健ならざりしが諸方の叛亂を開きて痛く心を苦しめ健康愈々衰へ。終に千七百九十年二月二十日を以て死せり。タスカニー公レオポルド位を繼ぐ。之れをレオポルド二世と爲す。

第十六節 レオポルド第二世

レオポルド二世は先帝ヨセフの弟なり。先帝が急進突飛の改革を

強國は利害の衝突を來し。議論紛々として毫も歸着する所無く。終には驚然として爭論するに至れり。而して佛のタルレーランドは權謀百端術策縱橫列國の君主宰相を誑かして以て佛蘭西の利益を傷けざらんことを謀れり。メッテルニヒとタルレーランドとは實に維納會議の主腦なりしなり。

然り列國の利害は衝突せり。殊に魯帝アレキサンダーはメッテルニヒと激争したり。蓋し魯帝はワルソー大公國を得んことを渴望したりメッテルニヒ以爲らく。魯をしてワルソーを得しむるは是れ魯帝の銳眼を埃太利の邊境に磨かしむるなりと。斷乎として魯帝の要求に反對せり。

され普王フリドリヒ、井ルヘルムは魯帝に賛成し。己れ亦魯帝の助を藉りてタクソニーを得んとを希望したり。加之列

施して衆民の怨を招けるを見て。大に其覆轍を鑑み。民情風俗を察して制度を舊に復し以て漸く民心を和げ。叛亂を鎮定せり。

時に佛蘭西には大革命起りて。人民は王宮を破壊し。ルイ十六世を侮辱し。貴族を虐殺すると殆んど數ふるに違わらざりき。而して革命の動機たる自由民權の説は漸く佛蘭西以外の人民を感化して歐洲各國の民心を動搖するの勢有りしかば。各國の君主は悚然として皆革命の毒害を怖れ。其の餘害の自國に及ばざらんことを希望せり。時に佛國の貴族にして難を日耳曼に避けたる者甚だ多かりき。亡命貴族等は日耳曼諸侯、普王及び埃太利皇帝が共に革命を忌み。自由民權説の擴張を防ぐの意あるを見て。連りに其の援を求め以て本國の革命黨を鎮壓せんことを請へり。時に日耳曼の諸侯は互に嫉妬猜疑し。普埃亦相快からざりしかば徒らに在昔日を曠うして議久しく調はざりしが。佛國貴族の哀訴愈切なりしかば。普王フリドリヒ、井ルヘルムは皇帝レオポルドとビルニッツに相會して。佛王ルイ十六世を援けて革命黨を壓服せんことを約せりされど。皇帝レオポルドは其の後幾も無くして死し。佛蘭西と戰を開くに及ばざりき。

國の公使は魯帝の威を畏れ。雷同してその要求に同意を表せしかば。メッテルニヒの抗議も終に其効なくして。波蘭の全土は盡く魯帝の領に歸し。曾て覇を東歐に稱したるの國は全く地圖より抹殺せられ。今やワルソーの古都は轉た征人をして亡國の涙を灑がしむるのみ。

魯國が波蘭を併するは列國の均勢を破るの恐あり。メッテルニヒが之れに反對したる固に宜なり。蓋し普、奥の兩國はフリードリヒ大王以來相敵視せしと雖も。魯鷲の跋扈を防がんと欲せば。區々たる内争を事とするに迫ららんや。故にメッテルニヒは普國の助を藉りて以て魯帝の要求を斥けんと欲し。周旋頗る力めたり。されど普王は頑平として奥と進退を與にするを好まず。却りて魯を助けて其の志を成さしめたり。メッテルニヒの

第十七節 フランシス第二世○佛國革命戦争○日耳曼帝國の解体

フランシス二世は先帝レオポルドの子なり。千七百九十二年を以て皇帝の位に即く。時に佛蘭西の革命黨は普奥二國が佛國に干渉するの意あるを憤り。千七百九十二年四月終に公然戰を奥太利に宣せり。奥太利は普魯西と同盟して愈々戰を開始せり。普王井ルへルムは親ら軍を率わ。ブルンスヴィック公フルデンを以て部將となし。佛蘭西の亡命貴族等を其軍に加へて。進んで佛軍を破り佛の名將數名を虜にし長驅して巴里に迫らんとせり。七月二十五日ブルンスヴィック公は令を佛國に下して曰はく。若し佛民にして正統の帝王たるルイ十六世を奉戴せずんば。巴里を屠りその人民を殺し恰も古昔羅馬人がエルサレムを滅したるが如くすべしと。佛國の人民は此の殘忍なる布告を見て憤然として大に怒り愛國の氣は却て十倍し皆死を以て巴里を守らんとを希へり。斯くて佛國の人民は到處に蜂起して普軍を攻撃せり。時に普軍は萬里軍を懸けて兵士の疾病に苦しむもの甚だ多かりしかば。ブルンスヴィック公は佛軍と戦ふの不利なるを覺り。終に退却の命を下したり。是に於いて普軍の氣

苦心は終に水泡に歸しぬ。

魯西亞に亞いで過大の要求を提出したる者は普魯西なり。普國はザクソニーの全部とライン河畔の要地とを得んとを求めたり。されどメッテルニヒ、カールレーラント、カッスルレーは全力を擧げて之に反對し。若し普魯西にして飽くまで此の要求を主張せば。英、佛、奥は攻守同盟を結んで以て三國に當らんとを謀れり。蓋し普國は國小に財乏しく。且久しくナポレオンに困しめられたるを以て。國力頗る疲れたりしかば。廣大の土地を得て以て。財源を作らんと欲したるなり。されど魯國にして他くまでも此の要求を貫徹せんと欲せば。勢英、佛、奥を敵として復び干戈を交へざるべからず。されど三國を敵とせば普の勝算到底期すべからず。是を以て普は終に一步を譲り。サク

頓に沮喪し争つてライン河を渡れり。普軍が斯く退却せるに際し奥太利の軍はニーゼルランドに在り。佛軍と戦つて利あらず。佛軍は勢に乗じて其の首府フラスセルスを取れり。千七百九十三年一月二十一日佛國の革命黨は終にルイ十六世を殺して愈々熱狂過激に走り。同年更に和蘭、西班牙、英吉利、等に戰を宣せり。日耳曼の諸侯は遂に巡邏日の終に佛國と戦ふに決したれども爲す所甚だ少なり。時に奥太利の軍はコブルヒ公を將としてニーゼルランドに在り。千七百九十三年三月十八日佛軍をニールンデンに破る。次いで英軍と與にフマールスに戦つて再び佛軍を破りコンデ及びヴァレンシエンの兩市を取れり。其後幾も無くして佛軍は頹勢を挽回し千七百九十三年十月十六日奥軍をヴァッテグニスに破り。次いで十二月二十六日佛將ホッヘは奥將ウルムセルをライン河畔に破れり。是の時に當り普軍は佛軍をマインツに攻めて之れを破り。又カイゼルラウテルンの勝利を得たり。されど奥將ウルムセルの敗るに及んで普軍も亦退きてマインツを守れり。千七百九十四年日耳曼帝フランシスは親ら兵を將ひてニーゼルランドに入り同盟軍と力を協せて數々佛軍を破れり。されど其の後須臾にして佛軍再び大に振ひ。五月二十二日佛將ビセグールは同盟軍をトルチーに破り。六月二十六

ンニーの一半を得て。最初の要求を撤回したり。
 佛蘭西がナポレオンの力に依りて獲取せる領土は盡く削られて。千七百九十二年の舊狀に復したり。されどタルレーランの機敏大膽なる。巧みに列國を操縦し。佛國をして甚しくその國威を失墜せしめざりき。彼れは一方に於いて普魯西と魯西亞を孤立せしめて英、埃、佛の同盟を構成し。他方に於いては。普、埃を離間して二國の勢力を殺ぎ。更に他の一面に於いては南日耳曼の諸邦を普國より分離したり。其の運動の機敏なる。その謀計の深遠なる。メツタルニヒすら往々にして一驚を喫したり。
 埃太利は伊太利半島中最良の土地を領有するを許されたり。ロンバルデーヴェニス、バルマ、ブラセンチア、是れなり。伊

日佛將ヂョルタンは大勝をフロエルスに得たり。是に於いてピセグルは更に進んで和蘭に向ひ。ヂョルタンは埃軍を撃つて之れをライン以東に驅逐せり。
 日耳曼は西歐に於いて佛蘭西と戦ふと同時に東歐に於いても波蘭を攻めて所謂「第二回第三回の波蘭分割を行へり。普魯西は第二回の分割に依りて波蘭の大半を得トルン及びダンツィヒの市を領有せり。埃太利は普魯西が俄に其の領地を擴張して權勢益々加るを嫉み百方策を運らして普魯西と魯西亞との交情を離間して普をして孤立せしめんことを謀れり。普王ヰルヘルムは此の奸計を知りて大に埃太利の不禮を憤り。佛國征討の軍を召還し以て埃太利をして獨り佛軍に當らしめんと欲せり。千七百九十四年波蘭の人民はコスシウスを首領として蜂起せり。普軍之れを討す。次いで魯軍も亦來り討つて終に盡く叛亂を鎮定せり。是に於いて魯埃は密約を結び第三回の波蘭分割を計畫せり。普王は二國が連りに秘密の畫策を爲すを見て心益々平なる能はず。千七百九十五年四月五日終にパセルの條約を以て佛國と和を講じ前に略取せるライン河西の地を佛蘭西に返還せり。同年八月八日「第三回波蘭分割」に關する魯埃の密約は普國に公報せられ。普は新東普魯西と稱する部分を得。埃は西ガリ

太利の南部チーブルス地方は曾つて日耳曼帝カール五世の管轄に歸したることをり。されば埃太利にして之れを得んと欲せば必ずしも口實の附すべき無きに非ざれども。埃は敢へて半島の南部に垂涎せざりしなり。蓋し南部の地たる之れを管轄統治すると甚だ難く。よし之れを有するも到底得失相償はさればなり。
 埃太利は右の外バリアよりテロルを得たり。
 右の外維納會議の議決したる所は。曰はく「ニーゼラントと和蘭とを併合して一王國と爲すと。曰はくチーブルスを「ポルボン」家(佛蘭西)に返へすと。ゼノアをヒエドモントの領と爲すと。等の如き是れなり。而して日耳曼の列邦の甚だ小なるものは併合して宜しきに適し。新に三十七の邦國と爲し。以て聯邦を組織し。

シアを得たり。是れ即ち最後の波蘭分割にして。曾て覇を東歐に稱したる雄邦は終に其影をたも止めざるに至れり。
 千七百九十五年佛軍埃太利の軍を撃つてメーン河東に退く。既にして埃軍は忽ち頹勢を挽回し。ホッピスに於いて佛軍を破り之れをライン河西に退く。翌年に至りて不世出の勇將ナポレオン、ボナパルトは佛軍に將として伊太利に入り。サルヂニヤを破り追つて和を講せしめ。進んで埃太利の軍を撃つて大に之れを破れり。埃帝聞いて大に驚き急に大將ヰルムセルをして大軍を率いて赴き援はしむ。されどヰルムセルも亦數々利あらず九月九日終に逃れてマンチアを守れり。此の時に當りて佛の三雄將モロー、及びヂョルダンも亦日耳曼を侵して深く敵地に入れり。然るに八月二十二日に至りヂョルダンは埃太利侯カールの破る所となり。次いで連敗二度に及べり仍てモローも亦退いて少しく敵鋒を避けたり。斯くの如く日耳曼に於いては埃軍頗る振ひしかども。伊太利に於いては毎戦ナポレオンの破る所となれり。埃將アルフィントは十一月十七日アスコールに敗れ。翌年(千七百九十七年)一月再びリツオリに敗れたり。斯くてナポレオンは連戦埃軍を破り。終に進んで埃太利の本國を侵さんとし。伊太利よりアルプス山を越へてカリンチアに入りレオベンに

統ぶるに聯邦議會を以てしたり。斯くて列國の君主宰相等が紛々として議論を維納に圖はすに當り。突如として飛報は佛蘭西より來れり。曰はくナポレオンはエルバ島を逃れて佛蘭西に來り。再び大軍を糾合して。ルイ十八世を廢し。將に來りて戰を列國に挑まんとすと。列國の君主宰相等は之れを聞きて駭然として驚き。直ちに會議を中止し。抗議論を止めて再び同盟を形成し。雲霞の如き大軍を以て佛蘭西及び白耳義に進めり。ライケルールの激戰、佛軍利ならず。ナポレオンの大事全く地に委せり。同盟軍は進んで巴里に入り四千萬磅の債求を佛國に要求し。佛國が之れを皆済するまで十五萬の兵を留めて巴里を占領せり。列國の君主が巴里に在るや。所謂神聖同盟なるものは魯帝アレキサンダー、普王

陣せり。當時ナポレオンは離軍萬里後援難かず輜重全からず。若し埃太利にして奮然として之れを撃たば佛軍を破ると必ずしも難きに非ざりしなり。然るに策此に出でず。徒らにナポレオンの猛威に恐れ戰はずして和議を講じ。四月十八日レオベンに於いて第一の媾和條約を結べり。次いで反復討議の末十月十七日「カムボ、フォルミオ」の媾和條約は成れり。此條約に依りて佛國は埃領ニーゼルランドを得。伊太利の北部はシサルビン共和國と爲りて埃太利の管轄を脱し。埃太利は新にヴェニス、フリウリ、イストリア、ダルマテア及びダルマテア近海の島嶼を得たり。埃帝は又密約を以て佛國に與ふるにライン左岸の諸州を以てせり。

「カムボ、フォルミオ」條約成るの後埃太利は常に佛國の強暴を惡み機を窺つて再び雌雄を決せんと欲し。英魯の二國と同盟して千七百九十九年戰を佛蘭西に挑めり。時にナポレオンは遠く埃及を征して國に在らざりしかば。最初は佛軍屢々利ならず。三月二十五日佛將ジョルダンがストックアハに敗れ。次いで佛將マセナノに敗れ。伊太利に於いては佛將セラハはヴェロナ、及びマクナノに敗れたり。加之魯將スワロツフは埃軍と合して伊太利に入りしかば。佛軍益々利ならず伊太利は大抵埃軍の占領する所と爲れり。然るに翌年に至

フリードリヒ、井ルヘルム、埃帝フランシスの間に成れり。蓋し此の同盟は名を宗教に藉りて。佛蘭西革命の鼓吹せる自由民権の思想を抑えんと欲したるに外ならず。想ふに立憲政治を敵視せるメッテルニヒの如きは此の同盟の成立に參りて力ありしならん。

第八 「ナポレオン戦争」以後メッ

タルニヒの内治政策

ナポレオンライケルールに敗れてセントヘレナに流され。歐洲は漸く平和に復するを得たり。戰後メッタルニヒが埃太利に取れる政策は如何。

日耳曼列國は多年戰役に困しみ。民力疲敝財貨欠乏。貿易行はれず。工業衰頹し。政府の困難人民の疲敝實に云ふべからず。メッタルニヒは之れを見て。内治を整理し財政の困窮を救済するは當時燒眉

りて魯帝は軍を引ひて國に歸り。同盟軍は頗る其の勢力を減じたるに際し。ナポレオンは猛氣凜然として埃及より歸りしかば佛軍は勇氣、俄に百倍せり。千八百零六年六月ナポレオンはアルプスを越へて伊太利に入り。同月二日ミランを取り。次いで十四日には大に埃軍をマングナノに破り全く前敗に失ひし所を恢復せり。伊太利に於いてナポレオンが斯くの如く埃軍を破りしと同時に。日耳曼に於いても佛將モローは連りに勝利を得。十二月三日には有名なるホーヘンリッデンの戰に大に埃軍を破れり。是に於いてか埃帝は到底佛軍に抗し難きを知り。千八百零一年二月九日ルチヴイルに媾和條約を訂結せり。此條約は「カムボ、フォルミオ」條約の有効なるを確認し。パタビヤ、ヘルツェナア、シサルビン、リグリア、等を共和國と爲せり。且つライン左岸の諸州を公然佛國に讓與し。翌年八月二十四日ライン左岸の諸侯は領土を佛國に渡して退引せり。是に於いてナポレオンは始めて其の宿望を達しライン河を以て佛蘭西の東境を劃せり。

日耳曼帝國の創建以來未だ曾て今回の如く凌辱を被れるは無し。聯邦の併合分離若くは諸侯の廢立一にナポレオンの願便を待たざる無かりき。ナポレオンは日耳曼の諸侯を輕侮すると甚しく己れの意に

の急務なるを覺れり。彼れは此の目的を達せんが爲めには戦争を豫防し平和を維持するの必要なるを認め、列國の均勢を保ちて彼此相侵すの憂無からしむるを努めたり。故に彼れは自國既有の領土主權を擁護するの外敢て外國を侵して以て領土を擴張するを欲せば、只現在の狀態を保ちて天下をして事無からしめんとを勉めり。一利を起すよりも一害を除くに如かずて夫觀念は當時メッタルニヒの政策を支配したる根本的原則なりき。事物の現状を存せよ。事を起す勿れ。争ふと勿れ。紛擾を醸す勿れ。是れ彼れが萬事萬物に應用したる思想なりき。一昔以て彼の主義を蔽はば彼は實に極端なる保守主義を懐けり。然りメッタルニヒの保守的精神は中庸を失つて極端に奔れり。されば彼れは弊害ある改革に反對

任せて其の領土を侵略し其の位を奪ひたれども。諸侯は互に猜疑嫉妬すると既に久しく寇も一致結合すると無かりしかば唯々としてナポレオンの爲す所に默從せり。されば奧地利は終に佛國の凌辱に堪へず。千八百五年英、魯及瑞典と同盟を結び大舉してナポレオンを服せんと計れり。然れどもナポレオンの機敏なる迅雷の如くライン河を渡りて日耳曼に入りしかば。ハバリア、サルテンベルヒ。バーデンは皆勢を以て風靡し佛國に黨せり。時に奥將マックは大軍を率ひてウルムに在り。佛軍に歸路を遮られて進退難れ谷より。十月十七日三萬の兵を以て降をナポレオンの軍門に乞へり。是に於いてナポレオンは愈々進んで維納を取り。十一月十三日奥帝の宮城に入り。時に普魯西の軍は來り援けて奥軍とモッツァアに合す。ナポレオン進んでダニューブ河を渡り。十二月二日普魯の軍とアウスタルンツに戦つて大に之れを破れり。斯くて佛軍は大に陸上に勝を制したれども。海上に於いては到底英國に敵する能はず。トラファルガーの戦に佛の艦隊は死んを粉砕せられたり。加之佛の同盟たるハバリア軍は奥侯フェルゲナンドの擊破する所となれり。されば當時日耳曼帝フランシスにして剛毅不屈の氣象を以てナポレオンに當らば之を擊退すると必ずしも困難ならざりしならん。況んや魯

したるのみならず。有益なる進歩にも同意を表せざりき。彼曰ふ現狀を存せよ敢て之れを改むる勿れと。噫彼れは終に十九世紀の大勢に反抗せる人物たりき。メッタルニヒが最も嫌惡せる進歩的思想は自由民權の思想是れなり。メッタルニヒが最も反對せる改革は君主專政を廢して主權政治を創設すると是れなり。而かも自由民權てふ思想は既に國民の腦裡に充滿したるを如何せん。國民が立憲政治を希望すること大早の雲霓も管ならざるを如何せん。メッタルニヒは終に衆怨の府たらざるを得ざりしなり。彼れは政變の端となれり。彼れは排佛の中心となれり。輿論を失へると斯くの如くにして猶且彼れが宰相の位に在るを得たるものは何の故ぞや。曰はく彼れは奥帝フランシスの信任を得たればなり。フランシス

國及び普魯の奮つて後援を爲すを。然るに惜しい奥帝は凡庸にして優柔なりしかば偏に佛軍の威を怖れて終に十二月二十五日ブレズブルヒに於いてナポレオンと和を講せり。此の講和條約に依りて奧地利はヴェニスを伊太利に讓り。タロル、シヨールベルヒをハバリアに、スワビアの一部をバーデン及びサルテンベルヒに割讓せり。而して奧地利は僅かにツルツブルヒを得たるのみ。加之バーデン、サルテンベルヒ、ハバリアの三選舉侯は此の條約に依りて全然日耳曼帝の管轄を脱し獨立の王國と爲れり。奥帝は斯くの如き不法の條約を承諾し唯々としてナポレオンの命に服從せり。此の時に當りて日耳曼の諸侯は全く皇帝に服從するの意無く。日耳曼は全く個々孤立せる小邦に分れたり。ナポレオンは此の形勢を利川して佛國の味方をライン河東に作らんと欲し。千八百六年六月十六日ライン同盟なる者を組成して之れを日耳曼より分離し佛國の保護國と爲せり。所謂ライン同盟に加入せる諸侯の主要なるものは。ハツアリア、フェルテンベルヒの二王、バーデン選舉侯。ヘッセン侯、ベルク公、レゲンスブルヒ僧正等あり。同盟は佛國の保護を彼らの報償として戦時には六萬三千人の兵を出して之れを助ぐべきの義務を負担せり。是に至りて日耳曼帝國は全然瓦解せりと謂ふべ

は敢へて聰明鋭敏の英主に非ず。また剛毅果斷の明君に非ず。されど帝はメッテルニッヒを信用すると甚だ深かりしなり。故にメッテルニッヒ言つて聽かれざるなく。謀つて用ひられざるなく。埃木利の内治外交の權は全く彼れの掌中に在りて帝は只手を拱してその命を聽くに過ぎざりしなり。メッテルニッヒの權力の強きと斯の如し。而かも彼れは決して帝の感情を害し其の意に逆ふと無かりしなり。彼れは事毎に必ず先づ帝に奏し其の裁可を経て後之れを實行せり。彼れが意を用ふるの周到なる大抵斯くの如く會て帝の逆鱗に觸れたると無し。故に帝とメッテルニッヒとの交情は會て一たびも冷却したると無く。終始相親むを得たり。是れ彼れが國民の望に背くと甚しうして而かも猶能く宰相の位を保つを得たる所以なるか。

日耳曼が帝國の名ありてその實無かりしは遠くライオン同盟以前に在り。而かも歴朝の帝王は日耳曼皇帝の名を稱して今世紀の初めに至りしなり。然るにヨゼフ二世は帝國の瓦解せるを見て空名の無用なるを知りしにや。千八百六年八月六日を以て終に斷然日耳曼皇帝の位を棄て、伊太利皇帝と稱せり。是に至つて日耳曼帝國は實際に於いても形式に於いても全く消滅せり。而して日耳曼聯邦の牛耳を取るもの北には普魯西あり南には埃木利ありて早晩その優劣を決するの機に到らんとす。日耳曼帝國は既に廢滅に歸したれば。其の歴史も亦一段落を告げたりと謂ふべし故に茲に第三編を終りて。更に第四編に入り。以て普埃二國權力の消長を記述せん。

第四編 十九世紀史

余は前數篇に於いては歴代の皇帝の名を以て章節の標題と爲し以て各代に於ける重要な事件を其の題下に配せり。然るに千八百六年八月六日以後は日耳曼帝國は名實共に廢滅に歸して後年日耳曼聯邦の成立するに至るまでは。復た日

第九 メッテルニッヒ自由民權の思潮に抗抵す。

然りメッテルニッヒは總べての進歩總べての改革に反對せり。自由民權の思想を蛇蝎視せるも亦偶然に非ず。メッテルニッヒは自由民權的思想を喜ばず。故に彼れは國民をして政治的問題を論議せしむるを好まざりき。彼れは謂へらく國民は煙草を喫し酒を飲み歌吹舞踏に熱中するも可なり。國民は笑話すべし活快なるべし。されど彼等が政治に容喙し政治問題を論議するが如きは。徒らに紛擾を醸し騒動を來たすに過ぎず。危険の甚しきものなり。是を以て彼れは舞踏會を好み宴會を喜びしかども。政治の會合を嫌へり。政治的俱樂部を惡めり。處士の論議を厭へり。彼れは國民の腦髓

耳曼皇帝と稱すべきもの無し。故に余は本編に於いて敘事の体裁を改め。各時代の重要な事項を捉へて之れを標題と爲し。以て章節を分たんとす。

第一章 日耳曼列邦とナポレオンとの戦争

第一節 普魯西の敗北

千七百九十七年普王フリードリッヒ、ナルヘム二世死し。其の子フリードリッヒ、ナルヘルム三世繼いで王位に即けり。フリードリッヒ、ナルヘルム三世は即位の時二十七歳。頗る有爲の才あり。ライオン同盟が北部日耳曼に於ける普魯西の勢權を殺滅したるを見て心頗る平なる能はず。機を見て佛蘭西を破り同盟を覆さんと謀れり。然るにナポレオンも亦普國が北方に雄視するを害として枕々として之れを壓服するの機を伺へり。斯くてナポレオンは如何にもして普國と戦ふの名義を造らんと欲し。牽強の理由を附會して普國はハンノーバーの地を英國に還すべしと主張し。又普王の后を誹謗したり。是に於いて普王は終に其の侮蔑に堪ゆる能はず。千八

を支配して其の政治的思想を禁ずる能はざるを知らざるも。少なくとも彼等の思想を外部に發表して公衆に傳ふるを禁せんと欲せり。彼は大衆を以て自由主義の巢窟と爲して之れを嫌惡し。苟も民權説を唱ふるの講師學生あれば直ちに之れを放逐せり。彼れ謂へらく。國民は決して國家に對する權利を有せず。只義務を負担すべきのみ。彼れの最も嫌忌せるものは新聞紙雜誌にして出版の自由を制限し言論を束縛せり。當時歐洲の諸國の政府は皆佛蘭西革命に反動を起して壓制抑壓に洗れたりと雖も。言語を塞ぎ。自由を抑ふるとの甚しき塊太利の如きは殆んど其の例を見ざる所なり。メッテルニッヒは政治上に於いて「自由」を敵視せるが故に。宗教上に於いても「自由」を喜ばざりき。されば彼れは「ブル

百六年愈々佛國と戦はんと決心し急に戦備に着手し。且ナポレオンに求むるに佛蘭西の兵をして日耳曼より退引せしむべきを以てせり。されど此の時普國の將士にして材幹を具へ戦に熟練せる者甚だ少く。その兵卒も亦精銳ならず。ブルスヰツク公フェルデナンド曾て武名ありと雖も今や既に老衰して復た時昔の意氣を見ず。而かも公は再び普軍に將として佛軍に當るの任を帯べり。普の勝算無き初より明かなり。斯くてフェルデナンド。普軍を率ひて有名なるテッリンギア森林の北に陣し以て佛軍の來るを待てり。十月十日普王の従弟ルドヰッヒはサアルフェルドに佛軍と戦つて敗死せり。佛軍は勢に乗じて進み。普軍の援道を断てり。十月十四日兩軍再びアウエルステード及びエナに戦ふ。此の日普軍は二派に分れフェルデナンドはアウエルステードに陣しホーヘンローへ公はエナに屯せり。而して兩陣の氣脈通せず進退盡く齟齬したりければ普軍は忽ち敗れフェルデナンドは重傷を負ふて死し。將士の斃れたる者殆んど數ふるに迫ならず。其の捕虜と爲りしもの二萬人の多き上れり。普軍一たびエナに敗れてより佛軍は長驅して伯林に向へり。而して普將の之れに抗するもの甚だ少く。大抵風を望んで走れり。普王は終に皇后と與に伯林を棄てケーンニクスフルヒに遁る。ナポレオン

テスタント」を好まずして加特力教に屬せり。蓋し人民の思想を束縛し信徒の自由を奪ふは加特力教の特色にして。壓制と加特力教とは殆んど異名にして同体なるの觀ありき。さればメッテルニッヒは加特力教の力を藉りて政治的壓制の後援と爲せり。是に於いてか彼れは「ゼンクト」派の徒を召還して之れを保護し。法皇に親しみ僧侶に賂ひ。以て己れの政見を貫徹するの機關に供せり。此の時に當りて日耳曼には英の「メソヂスト」に類する一派の宗派起りて之れに歸依するもの少なからず。殊に「メソヂスト」ベルヒ、バーデン、スヰビヤの如きは此の教徒を以て充満せられたり。蓋し此の宗教たる敢へて政治に關する所なしと雖も。而かもメッテルニッヒは斯くの如き改革的思潮の後日恐るべき結果を來さんとを憂ひて之れ

踵ひて伯林に入りしかば滿都の人民一人として抗拒するもの無く唯々として服従せり。ナポレオンは伯林の人民の斯くの如く卑屈にして毫も愛國忠君の義氣なきを見て痛く普國の好敵手に非らざるを慨嘆したりと云ふ。ナポレオンは伯林に在りて掠奪を逞まし王宮に入りて幾多の重寶を取りフリードリヒ大王の劔を得て大に之れを愛したり。普將レストック及びカククロエトは敗殘の士卒を集めて魯軍と普國の東境に合して其の援を藉り。千八百七年二月七日及び八日の兩日佛軍とケーンニクスフルヒの近傍に戦ひしかども勝敗決せずして兩軍交々綴せり。次いで六月十二日フリードリヒの戦に佛軍全勝を得て。ケーンニクスフルヒ、テルシット、ダンツィツヒ等を取れり。此の戦の後ナポレオンは緩をニーマン河の中流に浮りて魯帝と會見して和議を講せり。七月九日和終に成る之れをテルシットの講和と稱す。此の條約に依りて普國が損害を被れると實に大なり。ラインとエルベとの間に在る普國の領地は盡く割取られて。ブルスヰツクヘッセン、カッセル、ハノーバーと與に一王國と爲り。ナポレオンの弟ゼロームを以て王と爲し。之れをツェスタファーレン王國と稱す。前きに普國が分割したる波蘭の領土はワルソー大公國と稱して佛國

を壓止せんと企てたり。加之彼れは民間の聖書研究會を禁止して謂へらく。人民が聖書を讀みて思想を開發するが如きは偶々以て幾多の疑惑を生じ幾多の誤解を來たすに過ぎずと。噫メッテルニヒは思想の束縛者なり國民の手足を縛するの桎梏なり。一朝國民にして憤然として猛起せば彼れの地位は豈に危からざるを得んや。

千八百十九年日耳曼の一戯曲作家フォン・コッツェプエなるものマンハイムに暗殺せらるゝや。メッテルニヒの壓制をして愈々甚しからしめたり。蓋しコッツェプエは魯帝アレキサンダーに仕へて君主專制の立憲政治に優るとを信せり。前きにアレキサンダーは頗る進歩的思想を懷き。仁政を施して教育を普布し國民に與ふるに多少の自由を以てしたりしかばメッテ

の保護國と爲り。ダンツウィヒは普國の管轄を離れて獨立の市と爲れり。されば普はタルシット條約によりて五百萬の臣民と廣大なる土地とを失へり。加之ナポレオンは猶普王に迫つて一億四千萬フランの償金を出ださしめ。普國の常備軍を四萬二千人に減せしめたり。普國の恥辱も亦是に至つて極まれりと謂ふべし。

第二節 奧太利、佛軍と戰つて敗る。

アウステルリッツの敗北(千八百〇五年十二月二日の戰爭)以後奧太利は汲々として軍備に怠らず再び佛軍と戰つて必ず前敗の恥辱を雪がんとを期せり。奧帝フランシス二世も亦深く會稽の恥辱を思ひ全力を盡して軍隊を練習し兵糧を調へ以てナポレオンの來るを待てり。されば奧太利の泰運は未だ開けず運戰多く利わらず。千八百〇九年四月九日奧太利侯カールはイン河を渡りてババリアを略取せんと試みたれども終に志を達する能はず。退きてレゲンスブルヒを守りしが又敵の逐ふ所と爲りて更にボヘミアに退けり。是に於いてグニープ右岸の守備全く解けり。復た佛軍を拒ぐもの無し。佛軍進んで維納を取る。時に五月十二日なり。奧太利侯カールは如何にもして頽勢を蹶さんと欲し。將に大舉して來つて佛軍と雄雄を決せん

ルニヒは目するに「ジャコピン」黨(佛蘭西の革命黨)を以てしたる程なり。然るにナポレオンがセント、ヘレナに流されたる頃よりアレキサンダーの意見思想は全く一變して。保守的壓制的君主と爲り。普王及び奧帝と力を合せて自由民權的思想を抑壓せんとを計れり。彼のコッツェプエは斯くの如き君主に事へて擅制思想を有し。一戯曲を作りて民權黨を嘲弄せしかば。奧太利の國民は大に之れを憤れり。時にエナの大學にサントと稱する神學生あり。コッツェプエを殺すは神の爲めに人間の大道を擁護するものなることを信じ。終に之を刺せり。而して此刺殺は忽ちにして四方に喧傳し。歐洲諸國の人民は嚙然として起つて自由民權の爲めに戦はんと欲せり。是に於いてか諸國の政府も亦益々壓制の手段を強うし言論を

とす。然るにナポレオンはカールに先つて直ちにダニューブ河を渡り。五月二十一日及び二十二日の兩日大に奧軍とアスベルン及びエスリンゲンに戰ふ。佛軍利わらず再びダニューの左岸に退けり。若し奧太利の軍にして此の機に乗じて馳突猛進せば佛軍を掃蕩するに決して期し難きに非ざりしならん。然れど策此に出でずして徒に遂巡せしめば。ナポレオンは七月四日再びダニューブ河を渡りて大にワグラムに戰ふ。兩軍全力を盡くし相争ひ五日より六日に至りて勝敗猶決せず。奧軍の右翼は始め佛軍を破りたれども左翼は大に敗れ元帥カールは軍を引ひて退きしかば。佛軍終に全勝を得たり。是に於いて奧帝フランシスは到底佛軍の抗すべからざるを知り。十月四日和平をナポレオンと講せり。此の媾和によりて奧太利はカルニオラ、フリウリ、クロアチア、グルマチア、トリーステ等を失ひサルツブルヒをババリアに讓與しカリシアを魯西亞及びサクソニーに分與せり。

第三節 普魯西大に戰備を修む

今やナポレオンの一舉手一投足は日耳曼と左右して諸侯は皆その願使に従へり。されど人民は漸く邦家の恥辱を思ひ。獨立を回復して

東刺し新聞紙の發行を禁止し志士を獄に下し論客を罪して以て自由主義を抑へんと努めたり。殊に埃太利はメッテルニッヒの手下に壓縮せられて人民は全く自由を失へり。

斯くて日耳曼聯邦は自由主義と專制主義の衝突益々甚しきに際し。伊太利のチーブルスには「カルボナリ」と稱する一黨派起りて又自由民権を慕ひ。千八百二十年七月徒黨蜂起して國王に迫り。憲法を立て、人民に參政權を附與すべきことを強要せり。メッテルニッヒ之れを聞いて大に驚き。謂へらく。是れ革命の導火線なり。速に鎮壓せざるべからずと直ちに埃、普、及び魯の帝王宰相等をトロップツに集め。兵力を以てチーブルスの革命黨を討するを議せり。三國の君主は直ちに之れに同意せしかば。埃太利及び露西亞の

佛國の干渉を脱するの氣漸く崩せり。殊に普魯西に於いては敵愾の氣象頗る熾にして。テルシットの媾和以後普王は斷へず祖國の凌辱を念とし誓つて會稽の恥を雪いで佛軍を驅逐せんとを期せり。宰相ハウグホッフは前きに國政を誤りしを以て。之れを廢して新にスタエンを擧げて宰相と爲し政務を司らしめたり。スタエンは實に不世出の大政治家にして任に就きてより着々として機務を整理し財政を調理し。以て普國の衰運を挽回せんことを計れり。彼れは農僕の制を廢し。苟も材幹ある者は直ちに採つて武官に用ゐ。市邑に與ふるに自治の權利を以てし。孜孜として民力の休養に努めたり。是を以て佛帝ナポレオンは大にスタエンを害とし。普王をして其の官を奪ひ之れを國外に放逐せしめたり。スタエン仍て遁れて魯西亞に走れり

時に普魯西に井ルヘルム、フォン、フンボルトなる者あり。専ら力を學事に致し大に普國の學校組織を改良して國民に教育を普及せり其他國邦の志士は皆奮起して國民の愛國心を鼓舞し佛軍の橫暴を懲らして自由を挽回すべきを熱唱せり。當時有名なる「徳風會」の如きは人民の義氣を振作するに與つて大に力ありき。此の會は主として講師學者及び書生の結合にして或は演説を以て或は文章を以て百方國民の愛國心に訴へたり。當時普國はテルシット條約の結果として四萬二千以上の常備軍を有する能はざりしかども。普王は策を設けて巧みに此の制限を脱せり。即ち四萬二千人の兵隊を精練し終れば直ちに之れを除隊して。新に四萬二千人を訓練し。名義は常に四萬二千人なれども實際に於いては大に之れに超過したる多數の精兵を養成したり。斯くて普國は萬端の準備を整へて以て機會の來るを待てり。

第四節 普軍再び佛軍と戦ふ

軍十七萬人はチーブルスに入りて忽ち「カルボナリ」を鎮壓したり。是に於いてチーブルス王は益々壓制を逞うして人民は倒懸の苦に陥れり。此の時に當りてチーブルスの獄舎は國事犯人を以て満たされ。志士義士の鐵窓の下に呻吟する者擧げて數ふべからず。暴政酷治斯くの如きは當時歐洲に其の比を見ざりしと云ふ。而してチーブルス王をして斯くの如き壓制を逞うせしめたるものは實にメッテルニッヒ其人なりき。

千八百二十一年ヒエドモントにも革命黨起り。北部伊太利をして埃太利の羈絆を脱せしめんとを企てたり。されど是れ亦埃、魯の鎮壓する所となりて。革命黨の計畫は空しく水泡に歸しぬ。是に於いて伊太利は全く外強の壓服する所と爲り自由なく民權なく。極制的暴君の跳梁す

普國は孜孜として國力を培養し軍備を整へて乘すべきの機を待てり。然れどもナポレオンの勢は猶頗る熾にして機未だ熟せず。千八百十年ナポレオンは新にブレメン、ハムブルヒ、ローベツタ及び日耳曼の北海岸を取りて之れを佛國の領と爲せり。然るに千八百十二年の冬ナポレオンは一度魯都モスクフに敗れてより泰運漸く傾けり普王は機乘すべしと爲し諸邦に先つて佛軍を撃たんと欲せり。時に伯林は猶佛軍に占領せられたるを以て。普王はプレスラウに駐まり千八百十三年二月三日檄を四方に飛ばして普國青年の義氣に訴へたり。同月十八日王は魯帝とカリシユに會して堅く同盟を結び。必ず佛軍を驅退して多年の憤恨を晴らすべきを誓へり。三月十五日普、

るに任せたり。メッテルニッヒは嘗に埃國內の自由思想を抑へたるのみならず。外國の自由思想をも束縛したるなり。彼の普、埃、魯の神聖同盟をして活動せしむるの主動者は實にてメッテルニッヒなるの知らば。彼れ壓制的手腕の如何に強力なるかを知らざるに足らん。

第十 メッテルニッヒ伊太利及びハノーバーに旅行す。

メッテルニッヒは神聖同盟の力を藉りて四方の革命黨を鎮壓したりしかば。茲に聊か閑日月を得て。身身を休養するの機を得たり。是に於いてか彼れは羅馬に遊び。次いでハノーバーに往けり。ハノーバーの王ゲオルグ四世は禮を厚うしてメッテルニッヒを迎へ優待厚遇せらざる所無く。且つ有ゆる謙辭を以て彼れを頌し。比するにシーザー、ケートー、グスタフ、ア

魯は終に公然戰を佛に宣せり。時に普國の青年は王の檄文を見て愛國の義心鬱勃として禁ずる能はず皆干戈を執つて來りて國王の旗下に健闘せんことを希へり。而して此等の青年は皆曾つて軍隊に在りて訓練せられたる精兵にして能く坐作進退の法を知れり。斯くの如き訓練修養に加ふるに凛々たる義氣を以せり。其の勢の熾なる其の意氣の軒昂せる又想像するに足れり。

千八百十三年五月二日戰は愈々リッツェンに開始せられたり。リッツェンは即ち三十年戰爭に雷名を轟かしたる勇將グスタフ、アドルフの斃れたる古戰場なり。普、魯二國の軍は勇戦奮闘する力めたれども。如何せん佛軍は其數甚だ多くして到底敵する能はず。終に退ひてパウツェンを守れり。五月二十一日兩軍大にパウツェンに戦ふ。普、魯の軍は猶佛軍よりも寡なかりしかども。縱橫奮撃して大に佛軍を困しめ、徐かに軍を收めて而して退けり。佛軍大に疲れたるを以て敢へて尾せず。次いでナポレオンは進んでシレンシアに入りしが同盟(普、魯)軍は三週間の休戦を要求せしを以てナポレオンも之れに同意せり。

休戦の間兩軍は日夜軍備に汲々として再び戦を開かんとせり。然るに埃太利は調停の勞を執りて和を結ばしめんと欲せり。時に埃太利

ドルフ、マールボロー、ピット、ツェルリントン

を以てしたり。メッテルニッヒ維納に歸るや。途にして己れの領地なるヨハンニスベルヒに留まりて暫らく紛塵を避けて身身を養へり。次いで彼れはフランフルトに至り。其の五大學を巡視せしかば。大學生は此の擅制的大宰相の風采を視んと欲し。争つてメッテルニッヒの車に従へり。

第十一 メッテルニッヒの晩年。

メッテルニッヒの権力は今や強大の極に達したり。歐洲大陸の列國は彼れの意に従つて自由民權の思想を壓抑し改革的運動を防遏せり。されど革命的運動は十九世紀の上半期に於ける歐洲の一大潮流なり。其山の如き大濤の岸を噬んで來るや。隻手豈に之を支ふるを得んや。メッテルニッヒの勢強しと雖も。焉んぞ此の潮流

にはメッテルニッヒてふ術策縦横の外交家あり。普佛の間に斡旋して頗る調訂に努力せり。是に於いて佛國は七月十五日を以て普、及び魯とブラーグに會議し。更に八月十日まで休戦を延期して。其間に和議を調へんと欲せり。然れども双方の要求する所互に相合せずして和議終に破れ。兩軍再び干戈の間に相見ゆることはなりぬ。是に於いてナポレオンは埃太利をして局外中立を守らしめんと欲し。百方勸誘を試みたれ共、埃國は終に佛に背ひて普、及び魯に與せり。加之瑞典も亦普と同盟に加はり太子ベルナドットをして軍を將いて同盟軍を援けしめたり。されば歐洲の局面は全く一變し。今やナポレオンは獨力を以て埃、普、瑞、魯の同盟軍に當らざるべからざるに至れり。

第五節 普、埃、魯、瑞、同盟してナポレオンを撃つ

同年八月戰は復た開始せられたり。ナポレオンは部將オーデノットをして八萬人を率ゐて伯林に向はしむ。八月二十二日の夜オーデノットはグロス、ビーレンに屯し將に明朝を以て伯林に迫らんとす。然るに此の夜普軍の來襲に逢ふて大に敗れ走つてエルベ河に退く。時

に抗するを得ん。果せる哉彼れの失意時代は漸く近づけり。
 千八百二十二年には西班牙に革命あり。翌年には希臘の國民義旗を擧げて獨立を謀れり。兩者共にメッテルニヒの防遏する能はざる所なりき。彼れの意は土耳其を援けて希臘の獨立黨を鎮壓するを欲せざるに非ざりしかども。もし斯くの如くせば魯西亞の感情を害し所謂神聖同盟の瓦解を來さざるべからず。是れ彼れが希臘を討するを敢てせざりし所以ならん。
 蓋し當時魯國は土耳其を弱めんを計り。希臘を獨立せしめんと欲せり。是れメッテルニヒの政策と正に相反するものなり。而してメッテルニヒは寧ろ希臘の革命黨をして成功せしむるも魯國を敵とせざらんとを力めたり。噫革命を惡むと彼れの如きも外交政策の爲めには終に己

にナポレオンはシレンヤに向つて進みしが。途にして同盟軍が大舉してポハミアよりドレスデンに進むと聞き。急に軍を還して之れに赴き。部將マクドナルドをシレンヤに止めて普將ブルックヘルに當らしめたり。普將はナポレオンの在らざるを機とし來つて戰をマクドナルドに挑みカツパハの小流を距て對陣せり。普將始めは敢へて戰はず持重して以て佛軍の河を渡るを俟てり。佛軍果して普軍を侮り進んで流を渡る。普將乃ち急に兵士を磨き一擊して佛軍を破れり。此の戰と同時にナポレオンは同盟軍とドレスデンの近傍に戦つて二たび之れを破れり。同盟軍死傷頗る多かりしを以て退いてポハミアに入れり。是に於いてナポレオンは再び伯林を取らんと欲して之れに向へり。九月六日佛將チーは普軍とデンテキッツに戦ふ。佛軍殆んど普軍に二倍し一舉して普軍を破らんと欲し勇戰頗る力めたれども。普軍も亦死守して降らず。既にして瑞典の將ベルナドットは魯、及び瑞の軍を率ゐ來りて普軍を援ふ。佛軍終に抗すべからざるを知りて退けり。普軍之れを追ふてエルベ河に到り。佛軍を驚すと頗る多かりき。

同年九月普將ブルックヘルは瑞典の將ベルナドットとチーベンに會して普、瑞の軍を合せ勢大に張る。同時に同盟軍の本部も亦ポハ

れの意思を枉げざるべからざりしなり。希臘の革命に次いで千八百三十年の佛蘭西革命あり。ニーザラントの暴動あり。日耳曼列邦の一揆あり。波蘭土の叛亂あり。歐洲大陸の大局面は盡く革命的運動の大渦中に陥りぬ。メッテルニヒの手腕を以てしても亦之れを如何ともする能はざりしなり。彼れの心事此に至り果して如何の感ありしか。

歐洲の各部に革命的の運動が斯くの如く盛なるに當りても。埃太利は猶メッテルニヒの鐵腕に壓抑せられて。人民敢へて革命を起さざりき。されど其後十八年にして。埃國も亦自由民權てふ大潮流に捲き込まれたり。千八百四十八年維納の市民は蜂起して王宮に通り。立憲政治の創建を要求せり。帝難あらんとを恐れメッテルニヒと與に逃れて維納を出でた

ミヤを發しエルツ山を超へてサクソニーに出で。將に進んでナポレオンの背後に出で以て其の歸路を断たんとす。ナポレオン之れを偵知して急にドレスデンを發し。十月十四日ライプツィヒに入れり。時に同盟軍は諸方よりライプツィヒに迫りて佛軍は既に四面楚歌の中に陥れり。斯くて兩軍相對し激戰の期愈々切迫せり。十月十六日戰砲忽ち轟いて劍戟相交はり晨より夕に至りて勝敗猶決せず。されど佛將チーの一隊は普將ブルックヘルの破る所と爲りたるのみならず同盟軍の數は愈々加はり後援續々として到れども。佛軍は後援雖が乏兵馬既に疲れたり。ナポレオンは大勢既に定まれるを見て軍未だ敗れざるに先つて戰を休止せんと欲し。翌日(十七日)使を遣はして休戰を同盟軍に請ふ。されど同盟軍はナポレオンを怨むこと既に久しく。今や大舉して之れを壓服せんと欲するの時なれば。敢へて休戰の請を容れず。十八日更に再び戰を開けり。此の日ナポレオンは死力を奮つて同盟軍を破らんと欲し兵を指麾して勇戰奮闘せしかども敵軍強固にして一步も退かず。既にして日暮れ兩軍交休む。ナポレオンは頹勢挽回し難く戰ふも無益なるを知り。翌日昧爽に乗じて軍を引ひて退けり。退いてエルステル河に達し。全隊未だ盡く渡らざるに誤つて橋を斷ちしかば兵士渡る能はずして遑巡するもの半

り。(本欄参照)嗚呼是れ實に空前の策士
メッテルニッヒは末路なり。
メッテルニッヒは維納を去りし後其の領地
なるヨハンニスベルヒに退き。以て其の
餘年を終れり。嗚呼彼れも亦終に自由的
思想の抗すべからざるを悟りたるか。

第十二 メッテルニッヒの私生涯

國政の大任を双肩に荷ふと四十年。其の
意思は直ちに塊太利の法令と爲り。其の
書入所は歐洲大陸列國の君主を左右し。
胸中に藏する所は擅制抑壓の主義にして
口を開けば必ず自由を抑へよ民權を打破
せよと唱導す。嗚呼是れ實にメッテルニッ
ヒの經歷なり。彼れは無上強大の權力を
以て無上強大の壓力を國民の頭上に加へ
たり。是を以て世の彼れの傳を讀む者。
多く其の性質を揣摩して謂へらく。メッ
テルニッヒは必ずや。傲慢、殘忍、苛酷、

に過ぐ。同盟軍之れに乗じて佛軍に迫り殺傷殆んど算無し。其他敵
に勝はれたるもの一萬五千餘人。河に溺れたるもの亦甚だ多かりき
此の役佛軍は大砲武器を棄て、走り。將士の死せるもの七萬餘人の
多きに上れり。同盟軍も亦四萬餘人を失へり。
ナポレオン既に敗走せしかば魯帝アレキサンダー、普王フリードリ
ヒ、普ルヘルム、煥帝フランシスは凱歌を奏してライプツッヒに入
れり。是に於いて一時全歐を席捲したるナポレオンの威勢は既に傾
きて復た挽回すべからざるに至りぬ。

第六節 同盟軍進んで佛蘭西に入る

ナポレオンの敗走するやバヴアリア公は之れをハナウに要撃したれ
ども却りて佛軍の破る所となれり。十一月二日ナポレオンはライン
ツよりライン河を渡りて佛國に還れり。是に於いて日耳曼の大勢は
全く一變し。會てナポレオンの保護の下に立てる諸州は皆背いて同
盟軍に加はれり。佛軍のエルベ、オデル、ウイスチラ河畔の諸城を
守れるものも亦相踵いで同盟軍に降り。ライン同盟は瓦解し。ツ
ストフアーレン王國は廢され。ヘッセン撰舉侯ブルンス非ック公、
オルデンブルヒ公は其領地を復し。ナポレオンの前きに經營施設せ

の人なりしならん。蓋し斯の推測たる
や。常人の當に下すべき所にして必ずし
も愚者の妄想に非ざるに似たり。されど
是れ決してメッテルニッヒの眞面目を知る
者の言に非ず。余聊か之れを論せん。
メッテルニッヒは温和懇切の人なり。能く
人を愛し。衆を容る。其言語や其の舉動
や。毫も傲慢不遜なるを見ず。彼れの婢
僕は彼れを敬愛すると恰も慈父の如くな
りき。温厚の人に非ずんば焉んぞ斯くの
如くなるを得んや。彼れは皇帝、皇族に
兄弟視せられたり。朋友視せられたり。
苛酷不遜の人にして焉んぞ斯くの如くな
るを得んや。彼れの舉止の閑雅にして談
笑の快活なるは只外面を裝飾するに出で
たるに非ずして實に其性質の温和なるの
致す所なり。一言以て之れを掩へば彼れ
は其の心に於いても舉動に於いて眞個に

る所は今や其影をたも止めず。されど同盟軍は猶是れに満足せず。
以爲らくナポレオンが佛國の王位に在るの間は歐洲の平安を保つべ
からずと。進んで佛蘭西に入りナポレオンを帝位より下さんと欲せ
り。是に於いて同盟軍は三方より佛國の境を越えて巴里に向へり。
ナポレオンは死力を盡くして同盟軍を撃退せんと欲し處々に轉戦し
て往々勝利を得たれども大厦の傾かんとするや隻手の能く支ゆる所
に非ず。同盟軍は益々進んで佛軍の勢愈々盛まれり。ナポレオン思
へらく佛軍若し同盟軍の背後に出で、其歸路を塞がば。敵必ず後を
顧みて軍を遣さん。將に此の策を行はんとす。然るに敵は早くも
是れを偵察し一萬の軍を止めてナポレオンに當らしめ。餘勢は直ち
に進んで巴里に向ひ三月三十日終に之れを陥れたり。翌日魯帝ア
レキサンダー普王フリードリヒ、普ルヘルムは勝餘の精兵を將る威儀
堂々として巴里に入れり。是に於いてナポレオンは百計盡く黽勵し
進退維れ谷まりてまた如何ともする能はず。後二月にして第一回の
巴里條約は佛の新帝ルイ十八世と同盟軍との間に成り。ナポレオン
は廢せられて地中海のエルバ島に流竄せられたり。然り而して第一
回巴里締和條約は。千七百九十二年以來ナポレオンが略取せる土地
を日耳曼に復したるのみにして。毫も償金を佛國より取ると無く。

紳士の好模範たりしなり。是れメッテル
ニッヒが一人として萬人に愛せられ
たる所以なるか。

メッテルニッヒは善く己れの職責を重じたり己れの所信を斷行したり。彼れは自ら信ずる所に依りて己れの職責を盡くすに當りては。全力を擧げ全心を注いで。之れに熱中せり。されば彼れは外交の局に當りて列國の使臣と會同するや。往々萬金を費して豪華稱修を極むることあるも。是唯國家の公事止むを得ざるに出づ。彼れの平素に至りては質素儉約にして敢へて虚飾浮華の風を見ず。彼れの嗜好所は音樂のみ。舞踏の如き演劇の如きは彼れの好まざる所なりき。彼れは優美高雅の性質を具へたるが故に多くの美術を愛せり。されど人工的美術よりは寧ろ天然の美を好みき。以て其の心の質素にし

又前きにナポレオンが日耳曼より掠奪し來りて巴里の裝飾となせる美術品の如きも現狀を存して毫も取り去ると無かりき。敗殘の餘城下の盟を結べるものにして斯くの如く寛大の待遇を受けたる國は蓋し稀なるべし。

第七節 維納會議○ナートルルの大戰

日耳曼の邦土はナポレオンの爲めに縦横擾亂せられたり。されば第一回巴里條約以後歐洲列國が第一に爲すべきの業は秩序と整頓とを日耳曼に來たすに在り。千八百十四年十月一日列國は維納に會して討議を開けり。席に列するものは魯、埃爾帝、普魯西王、丁抹王、ハバリア王、ネーデルラント王、日耳曼諸侯及び西班牙、瑞典、英吉利等の代表者なりき。獨り伊太利は之れに加はらず。斯て會議の開かるゝに及んで各國は互に自國の利益を主張するに汲々として議論百出容易に決せず。普魯西はサクソニーを得んと欲し。魯西亞は波蘭の全部に垂涎したれども。列國は斯くの如き慾望を許さず。紛議爭論沸然として起り利害は衝突し障礙は生み。議會終るの期無からんとす。斯くて荏苒日を曠うること殆んど半歳にして。千八百十五年三月七日忽ち飛報あり。曰はくナポレオン密

て而かも高尚なるを見るに足らん。彼れは又頗る學問を愛し。苟も餘暇あれば直ちに己れの圖書室に入りて靜かに書を讀み。以て無上の快樂と爲せり。其藏する所の圖書は實に一萬五千餘部の多きに達せりと云ふ。

メッテルニッヒは外交家と會見するや陰險にして決して肝膽相照らすが如きこと無し。彼れはナポレオン一世の如き英雄すら之れを驅嚇したり。彼れは冷靜、沈着平然として人を欺くの技倆を有せり。何人も彼れの眞心を洞觀する能はざるなり。されど是れ只外交家としてのメッテルニッヒのみ。若し夫れ彼れが一人として一人と交るに當りてや。肺肝を披きて相談り相笑へり。故に公人たるメッテルニッヒを見て私人たるメッテルニッヒを見ざれば。決して彼れの眞面目を悟了

かにエルバを逃れて佛國に上陸し。處在之に従ふもの甚だ多く將に大舉して同盟軍を擧げんとすと。列國の帝王、委員等は此の報を得て大に驚き直ちに議會を中止して兵備に着手し。列國盡く同盟して以てナポレオンに當らんとを決せり。

千八百十五年六月同盟軍は再び戰場に現はれたり。普魯西の王子シヨルツェンベルヒはライン河畔を固め。英のエルリントン公は和蘭を守り。普の名將ブリューヘルはリグに陣せり。六月十六日ブリューヘルはリグに陣せり。其後二日にしてナポレオンは英將エルリントンとナートルルに戦へり。佛軍猖獗其の鋒頗る鋭し。英軍苦戦すると八時間。既にして普將ブリューツケル精兵を率ゐて來りて英軍を援ふ。佛軍終に大に敗れ相沓蹙して走れり。普軍之れを尾撃して殺傷算無く。佛兵大抵此戰に斃れたり。千古の英雄ナポレオンも到底再舉の策なきを知り海に航して米國に遁れんとせしも、中途にして英艦の捕ふる所となれり。

七月七日同盟軍は再び巴里を占領し。十一月二十日第二回の巴里條約を結べり。佛國は七十億フランの償金を同盟列國に拂ふの義務を負擔し。前きにナポレオンが日耳曼より奪ひ來れる美術品を返還せ

する能はざるなり。
 メッテルニッヒ顯榮比する所無く。富鉅萬を累ぬ、而かも彼れの私生涯は決して幸福、圓滿ならざりしなり。彼れは相踵いで二妻三子を亡へり。彼れの温良を以てして豈に悲痛慘憺たらざるを得んや。其の第二妻の死せるや。彼れ人に書を贈りて曰ひけらく。

余は此の度の不幸よりも悲哀を感じたると無し。唯余の望は盡きたり。萬事止みぬる哉。余が最も愛する妻は相踵いで天國に往きぬ。余獨り生きて塵世に留まるも將た何をか爲さん。されば余も亦去りて天國に赴かん哉。今や余が胸中の憂悶を遣るの途は只業務に執筆するに在るのみ。苟も閑あれば萬感胸に塞がりて如何ともする能はず。されば余は朝は九時より机に向ひ。

午後五時に至りて小憩に就き。夕は六時半にして再び机に向ひ。十時半より來客に接して深更に至るなり。
 蓋しメッテルニッヒは家族に對すると最も親切温和にして。善く妻を愛し。子女を喜び。双親を敬せり。斯くの如きの人に於て妻を亡ふと三たび。子を亡ふと三たび。豈に悲痛慘憺たらざるを得んや。
 メッテルニッヒ二妻を亡ふの後の公爵家の女を娶どり。情交頗る濃なりしと云ふ。メッテルニッヒは敬虔の人なり。熱心なる加特力教徒にして。善く僧侶の教ふる所を守れり。唯惜むらくは。彼れの羅馬教の弊害を脱して新教に歸依する能はざりしことを。されど胸中一點も敬虔の念無く汚行醜爲恬として恥ぢざるの徒に比すれば。彼れの信仰も亦以て多しとするに足

り。又日耳曼はアルサス、ローレーンの地を復せんと欲したれども列國は之れを許さず。紀元千七百九十年の現状を以て日耳曼の境界を定めたり。
 曩きに維納會議はナポレオンの再舉を聞いて暫らく討議を中止せしかども忽ちにして再び開會し。同盟軍がナポレオンと戦ふの間にも討議を繼續せり。斯くて反覆審議の後列國は終に一の決議に同意せり。その議決の大要は左の如し。

- (一) 埃太利は伊太利及びイルリリアの舊領を回復するの外。新にテロル、サルツブルヒ、フォラールベルヒ、インフィエルテルを得ると。
- (二) 普魯西はデルシット條約によりて失ふたる土地を回復するの外。ボセン大公國、瑞典のボメラニヤ、サクソニーの北部、グエストフイーレン、ベルヒの二公國及びマインツよりアアチェンに至るライン河畔の土地を得ると。
- (三) ババリアは埃太利に讓與したる土地の代りにザルツブルヒ、アスアフェンブルヒを得ると。
- (四) ババリア、サクソニト、ザルツブルヒは従前の如く各々王國たるべしと。

維納會議は斯くの如くにして終れり。コルシカの風雲兒が流血片を漂はし積屍山を築きて成就したるの結果は是に至りて復た見るべからず。古より勇雄徒らに兵を弄して萬骨爲めに枯るゝを願みず。禍を招き毒を流すこと豈是れより甚しきものあらんや。戰を好み血を喜ぶの徒は其れ猛省せざるべけんや。

第二章 日耳曼聯邦の成立

普魯西と埃太利とはナポレオンの攻伐に逢えて。暫らく一致共同の運動を爲したりと雖も。由來此の二國は權勢を競ふて相嫉視する一日に非ず。一朝外敵の滅ぶるに及んでは焉んぞ相提携親交するを得んや。況んや兩國合同して一帝國を成すが如きをや。然り而して日耳曼帝國の成立を好まざるものは特り普、埃の二國のみに止まらず。ババリアの如きザルツブルヒの如きも亦分立を希望せり。是に於いてか日耳曼は終に三十九國及びリッペン、ハムブルヒ、ブレメン、フランクフルトの四自治市を網羅したる一大聯邦とは爲りぬ。是れより各邦及び各市は自己管内行政司法等に關する事項に於いては全然獨立の權利を有し。只聯邦全体に關する事項のみ議會の討議に付す。議會の議員は各邦の代表者より成り。埃太利の代表者

れり。

余はメッテルニッヒの私生涯と公生涯とを見たり。彼れの長所の大なるが如く。彼れの過失も亦小ならざりき。其の長短を擧げんか。彼れは親に孝なるの子なりき。彼れは妻に親切なるの夫なりき。子を愛するの父なりき。君に忠なるの臣なりき。婢僕を憐れむの主人なりき。己れの職責を重んずるの官吏なりき。忠實神を敬するの信徒なりき。朋友同輩に禮儀あるの人なりき。彼れは政治家としては機敏、大膽、全力全心を擧げて己れの所信を斷行するの勇氣を有したり。更に纏つて彼の缺點を見んか。彼れは保守的精神を以て凡べての改革に反對したり。自由民權てふ思想の大潮流に抵抗したり。加之彼れの思想は頗る物質的に傾けるが如し。

は常に議長に當りて。毎年メーン河畔のフランクフルトに開會す。聯邦に加はりたる邦は決して互に相關ぐと無く又外國と同盟して聯邦に敵せざることに同意せり。もし各邦の間に議合はざるとわれは。必ず之れを議會に提出して其の裁斷に委せざるべからず。又各邦は其の人口に比例して兵隊を出し國防の義務を盡くさるべからず。ルークセンブルヒ、ランダウ、マインツの三城は何れの聯邦にも屬せず。日耳曼聯邦全体の有として日耳曼常備軍をして之れを守らしむ。又聯邦に加入したる者は立憲政治を採用し。各派の基督教徒に均しく公私の權利を附與せざるべからず。聯邦制度は大略右の如し。而して普、奥の二國は南北に雄視して相下らず。よし一たび一聯邦の下に在りと雖も。早晚全然分離するの時期に達せざるべからず。

第三章 近世日耳曼文藝の發達

十七世紀の末十八世紀の始に於いて。ゴットフリード、ベルヘルム、フラエフェル、フォン、ラエフニッツは當代の大哲學者大思想家として其名を轟かせり。彼れの哲理思想はクリスチャン、フラエフェル、フォン、ラルフに依りて益々發展せられたり。インマヌエル、カント

故に彼れは國民の窮困を憂ひて戦争を防止し平和を維持せんが。商業を振作して工業を獎勵し。國民の生活の幸福を謀るの所なり。此の如き思想は當時の諸國に於ては稀なり。且其の思想は、政治の改革に反對したり。自由民權てふ思想の大潮流に抵抗したり。加之彼れの思想は頗る物質的に傾けるが如し。

の田代、千七百八十三年、神學博士に當り、及んで日耳曼の哲學者に一新生面を開き、その思想は益々發展せられたり。インマヌエル、カントの如き哲學者は、其の思想を發揮し、當時の諸國に於ては稀なり。且其の思想は、政治の改革に反對したり。自由民權てふ思想の大潮流に抵抗したり。加之彼れの思想は頗る物質的に傾けるが如し。

余はメッテルニッヒの私生涯と公生涯とを見たり。彼の長所の大きな如く。彼の過失も亦小ならずりき。其の長短を擧げんか。彼は親に孝なる子なりき。彼は妻に親切なるの夫なりき。子を愛するの父なりき。君に忠なるの臣なりき。婢僕を憐れむの主人なりき。己れの職責を重んずるの官吏なりき。忠實神を敬するの信徒なりき。朋友同輩に禮儀あるの人なりき。彼は政治家としては機敏、大膽、全力全心を擧げて己れの所信を斷行するの勇氣を有したり。更に翻つて彼の缺點を見んか。彼は保守的精神を以て凡べての改革に反對したり。自由民権てふ思想の大潮流に抵抗したり。加之彼の思想は頗る物質的に傾けるが如し。

は常に議長の任に當りて。毎年メーン河畔のフランクフルトに開會す。聯邦に加はりたる邦は決して互に相闘ぐと無く又外國と同盟して聯邦に敵せざることに同意せり。もし各邦の間に議合はざるとわれ必す之れを議會に提出して其の裁斷に委せざるべからず。又各邦は其の人口に比例して兵隊を出し國防の義務を盡くさるべからず。ルークセンブルヒ、ランゲウ、マインツの三城は何れの聯邦にも屬せず。日耳曼聯邦全体の有として日耳曼常備軍をして之れを守らしむ。又聯邦に加入したる者は立憲政治を採用し、各派の基督敎徒に均しく公私の權利を附與せざるべからず。聯邦制度は大略右の如し。而して普、奧の二國は南北に雄視して相下らず。よし一たび一聯邦の下に在りと雖も。早晚全然分離するの時期に達せざるべからず。

第三章 近世日耳曼文藝の發達

故に彼れは國民の窮困を憂ひて戰爭を防遏し平和を維持したり。商業を振作して工業を奨励せり。財政の紊亂を整理して國帑の充實を謀れり。然れど彼れが人類の智性徳性の開發に貢獻したる所は果して何ものかある。彼れは大學を嫌ひ哲學、政治家の發達を妨げたり。日耳曼の政治的思想の進歩は彼れの爲めに妨げられたるを四十年。人類の大道より見れば。メッテルニッヒの偉大なる所以果して有りや否や。されど彼れは千古を空々するの大外交家なり大策士なり。よし其の缺點は大なりとするも。豈に一世の偉人たるを失はんや。大丈夫の世に處する芳聲と後世に遺す能はざるも醜名を萬古に流さば又以て快ならずや。況んや芳名と醜名とを併せ傳へたるメッテルニッヒの如きをや。嗚呼彼れも亦以て地下に顔を開くに

の出で、千七百八十一年に「純理論」を公にするに及んで日耳曼の哲學界に一新生面を開けり。次いでフイフテあり。セルリンダあり。ヘーゲル出で、獨逸は益々哲學の發達を爲れり。バルトルド、ケオルグ、ニトブルは史學に一大進歩を與へ。ヴァンケルマン及びハイネも亦文學界に貢獻する所頗る多かりき。十七世紀の末に至るまで獨逸の詩は猶其た幼稚にして所謂「第二シレンヤ學派」なるものありしと雖も。毫も超群の詩材を出さず。宮廷の詩人は皆佛蘭西文學の糟粕を嘗めて日耳曼固有の特色を發揮する能はざりしが。十八世紀の始めに至りて。フォン、ハゲドルン、フオンハレル等、の詩人出で、日耳曼の詩は漸く發達の緒に就けり。フリードリヒ、ゴッテ、クロプストク出で、詩は進歩の一段階を上り。クリストフ、マルチン、キーランド出で、文學を上流社會に普及したり。クロプストク及びキーランドと時を同うして而かも其の才藻の迫に二人に超越せるものはゴットホルド、エフラエム、レツシングなり。彼れは科學的批評家の鼻祖にして。日耳曼の散文に明晰と氣骨とを興へたるものも亦實に彼なりしなり。其の著の主なる者は「ラオコーン」、「エミリア、ガロットテ」、「ナタシ」等なり。ヨハン、ゴットフラインド、フォン、ヘルデルも亦當代の文學者にして

足れり。

鎮血宰相ビスマルク公

天の英雄を生ずる偶然に非ず。ビスマルクが普魯西に生れたるは果して何等の天職をか荷ひ來れる。

ビスマルクを知らんと欲せば。彼れが如何なる時代に生れたるかを知らざるべからず。彼れに先ちて普魯西の基礎を築きたる者は誰ぞ。彼れの爲めに先驅を爲して荆棘を開きたる者は果して何人なりしか。彼れの事業の大成したる所以。彼れの覇圖の完成したる所以を知らんと欲せば。須らく當時の普魯西の状況を審みせざるべからず。故に余はビスマルクの経歴を叙するに先だち。當世紀の始めに於ける普魯西の大勢を叙述せん。

彼れは散文家たり詩人たり又批評家たりき。英のセークスピアに於けるが如く。伊のダンテに於けるが如く。超然として群を抜きし日耳曼の文豪は即ちヨハン、ワルフガン、フォンゲーテなり。「フウウスト」は其の大著述にして。「トルクアト、タツシ、ノイヒゲニー」の如き之れに次ぐ。ゲーテに次いで日耳曼文界の偉人と稱せらるゝはフリードリヒ、フォン、シルレルなり。シルレルは専ら詩を好みし又戯曲に長じ。「ツァルレンスタエン」、「井ルリアム、テル」等の作あり。エアンバウル、フリードリヒ、リヒテルも亦一世の文才にして「テテン」等の作を以て著はる。ナポレオンが普魯西を蹂躪したるの時。慷慨激越の詩を草して國民の義氣を振起したるものはアルント及びゲールテルにして又一代の詞宗なり。日耳曼國民は古より音樂を愛するの性あり。十八世紀に至りては有名なる音樂家輩出したり。セバスタアン、バッハ、ヘーデル、モザルトの如きは其の名最も著はれたり。

第四章 日耳曼に於ける革命的運動

第一節 國民的合意の思想と自由民權の渴望

曩きに日耳曼は既に聯邦を組織したりと雖も。是れ唯邦國が漫然聯

第一 十九世紀の始めに於ける普魯西王國

十八世紀の末より十九世紀の始めに至る二十餘年の間歐洲の大半はナポレオンの蹂躪する所と爲れり。普魯西も亦彼れの馬蹄に蹴破せられ。普王は奔竄し。國土は分割せられ。十五萬の佛兵は普魯西に屯して跳梁跋扈を逞うし。財寶珍器は佛人の爲めに掠奪せられ。貿易商業殆んど行はれず。國衰へ民疲れ。又如何ともする能はず。此の時に當りて歐洲の諸國は皆ナポレオンの勢を恐れ。敢へて普魯西を援けて奮戦せんと欲するもの無かりしかば。普魯西は孤立して勢日に蹙まり。城壘相踵いで陥り。フリードリヒ大王以來精銳雄悍を以て稱せられたる軍隊はナポレオンの解散する所となり。普魯西は將に盡く佛國の領土たらんとせり。

合したりと云ふに過ぎずして。而かも此の聯合や毫も鞏固たる團結なく。整然たる秩序無し。故に名は聯邦と稱すと雖も其の實は個々分立せる小邦の割據に外ならざりき。是に於いてか 苟も誰見ある者は斯くの如き聯邦の状況に満足する能はず。更に一層鞏固にして有力なる國家を建設せんと希望せり。而して最も這般の思想を懷きしものは大學の講師及び學生なりき。彼等の中には日耳曼帝國が中世に於いて威勢赫赫として四隣を壓したるの當時を追慕して。目下の聯邦が萎靡振はざるを慨嘆して。再び大帝國を建て、舊時の状態に復せんことを希望せる者ありしかども。其の多くは舊時の状態が到底十九世紀の社會に適せざるを知り新に目下の時勢に適合すべき邦國の團結を作るべきことを主張せり。兩派の言ふ所多少の差異ありと雖も。其の鞏固なる國家的合同を希望せるや一なり。然るに聯邦の諸王は斯くの如き合同的思想を好まず。力めて此の思想の發達を妨げたり。千八百十九年大學の一學生が作劇者コツツェプエが舉國一致的思想の架空なることを嘲笑せしを憤りて之れを暗殺せるや。聯邦の君主は革命の機既に萌せりと爲し威力を以て之れを鎮壓するの必要なることを唱へ。各邦の公使等はカールスバットに會議して鎮壓の手段を實行すべきを決議し。數多の學生講師を捕縛し

ナポレオンは普國をみると恰も屬邦の如く。普王に命じて兵隊を徵集し魯國の征討を助けしめんとせり。當時普國の衰微は實に其の極に達したるも。猶愛國忠君の名士義人に乏しからず。ナポレオンの横肆を惡み慨然として國辱を雪がんことを希へり。されば普王フリードリヒ、井ルヘルムは斷乎としてナポレオンの命を拒み。答ふるに兵を出たす能はざるを以てせり。ナポレオン直に普國を討せんと欲したれども。偶々西班牙に事あり。軍を引いて西班牙に向ひしかば。普國は暫らく虎狼の齟牙を免るゝを得たり。而して當時普王を補佐して佛帝の命に抗し。普魯西の頽勢を挽回せんと欲したるの名士は果して何人ぞ。是れ吾人の忘るべからざる所なり。

て獄に下し。出版の自由を制限し。大學の監督を嚴にしたたり。されど滔々たる思想の潮流は豈に姑息の人爲を以て塞ぎ得るものならんや。舉國合同の思想は毫も鎮壓せらるゝこと無くして却て益々其勢を逞うせり。

此の時に當りて自由民權の思想は漸く民間に發生し來れり。曩に日耳曼聯邦の組織せらるゝや。聯邦は立憲政治を創設すべきことを議決せしど雖も。爾來此の議決は大抵實行せられず。偶々憲法を制定するの邦ありしも是れ唯立憲政体の名義を設けたるのみにして人民の權利自由は依然として舊に異なる所なかりき。千八百十五年より同三十年に至るの間にババリア、井、ユルテンベルヒ、バーデン、サヒセン、ワエマル、ヘッセン、ゲルムスタットの諸邦は陽に立憲政体の美名を設けて其の實は舊時の專制政治を維持したり。普王フリードリヒ、井ルヘルム三世も亦僅に地方の小議會を設けたるのみにして敢へて一般人民に參政の權利を與へず。奥國の宰相メッテルリヒに至つては自由民權の思想を惡むと恰も蛇蝎の如く。力を極めて立憲政体の有害なるを唱道せり。是に於いてか聯邦の人民は立憲政治の期望が徒らに齟併に歸したるを憤慨し。舉國の人心騒然として漸く不穩の狀を現はせり。

ルストは實に當年普國の三傑と稱せらる。若し普國に此の三人無かりせば佛帝は全然普魯西を蹂躪したるやも知るべからず。果して然らばビスマルクの英才後進に現はるゝ雖も。能く其の手腕を振つて普國の霸圖を完うし得たるや否や。吾人は轉た疑無き能はず。

スタインは普國の内政を整理して國內の統一を固うし。ハルデンベルヒは外交の局に當り樽俎の間に折衝し。シヨアルンホルストは軍制を刷新して兵力を養成したり。就中スタインは材畧超群頗る國家經綸の才に富めり。紊亂綜錯せる普國の内政を整頓し秩序整然たる制度を立てたるものは實にスタインの力に依れり。他日普國が終に境太利を凌駕して日耳曼聯邦の盟主たるの基礎も亦實にスタインの建設せし所なり。彼れはビスマルクの爲

舉國合同てふ思想と自由民權とを觀念とは當年日耳曼の人心を支配せる二大勢力なりき。然り而して當時の志士識者は皆思へらく。國民的大合同にして成らば立憲政体も亦建設せらるべく。立憲政体にして成らば國民的大合同も亦自ら成らん。二者その一を成就せば他の一は期せずして成就するを得ん。

斯くの如く日耳曼に自由民權の思潮が横流せるに際し。佛蘭西には千八百三十年の革命ありて人民はシャルル十世を廢し以て民權の重すべきを示せり。此の佛蘭西革命は日耳曼の人心に影響したると甚だ大にして自由民權の思想は愈々旺盛を致し。處在の人民蜂起して君主に迫れり。普、奥の二國に於いては人心爾かく恟々たらざりしかども。其の他の小邦に在りては一揆暴徒相踵いで起れり。殊にブルンスヴィック公の如きは最も人民の惡む所なりしかば其の宮殿は燒かれ。公僅かに身を以て逃れたり。サクソニー、ヘッセン、カッセル、サヒセン、アルテンベルヒ、ハノーバー等の君主はブルンスヴィック公の覆轍を踐まんとを怖れ相踵ぎて立憲政体を採用せり。

千八百三十三年四月三日一揆は復たフランクフルトに起れり。學生及び新聞記者等は皆武装して之れに加はり。市の守備兵を擧破し。監獄を襲ふて國事犯人を釋放し。將に進んで議會を襲はんとす。既

めに荆棘を開きたるの先驅者なり。乞ふ余をして聊か彼れの治績と経歴とを見せしめよ。

男爵フォン、スタインは千七百五十七年を以て生る。家世々華貴の名門たるの故を以て、完全の教育を受けたり。二十三歳にしてフリードリヒ大王の朝に仕へて鐵山局の一官吏と爲れり。千七百八十六年英國に遊んで其の内治制度を視察し。大に其の善美を稱賛し私かに之れに倣つて普國の内治を改革するの志を懷けり。歸國の後擢んでられて地方長官と爲り。千八百四年更に擢んでられて工務大臣と爲れり。此の時に當りて普國の財政大に紊れ、冗官空しく位に在りて。治績豈も擧らず。スタインは大に冗員を陶汰し、事務を整理し。賄賂を嚴禁し。普魯西銀行を再興し。大に財政を振作せり。されば

にして軍隊來りて之れを鎮壓し暴動漸く静まれり。是れより各邦が大學及び新聞を監督すると愈々嚴にして。言論を束縛すると一層甚しきに至りぬ。されば革命的的思想は之れに反動して愈々昂騰し來り。やがて抑ゆべからざるの勢力とは爲りぬ。讀者乞ふ後節に説く所を見よ。

第二節 關稅同盟の成立

千八百二十五年、ババリア王マキシミリアン死し、ルドヴィヒと繼ぐ。ルドヴィヒは頗る識見あり又學藝を嗜めり。ムニッヒに大學を建て。美術工藝を奨励保護したりしかば、美術家は日耳曼の諸方より來り集まりて。ムニッヒは美術の叢淵と爲れり。ルドヴィヒの功績の更に大なるものは關稅同盟の基礎を築きしと是れなり。彼れは、ネーデルラントと條約を結びて關稅に關する事項を協定して兩國の交通貿易を便にしたり。普魯西は之に倣ふて幾多の北部諸州と關稅同盟を結び。中部諸國も亦此の種の同盟を結び。されば此の時には、猶日耳曼全國を一貫する關稅大同盟無かりしが。千八百二十八年以來大同盟の思想と傾向とは漸く現はれ。終に普魯西を中心として關稅同盟は組織せられたり。是れに依りて聯邦

財政整理の事たるスタインの伎倆を試み。敏腕を振ふの難局たりしや素より疑無しと雖も。幾くならずして彼れは一層困難なる政局に當らざるべからざるに至りぬ。千八百六年普魯西軍が佛軍と戦つて敗るゝや。普王はスタインをして外交の局に當らしめ以て敗後の國體を完うせんと欲したり。スタイン王に請ふて曰はく。王もし臣をして難局を排し功を奏せしめんと欲せば。願くは臣に委するに外交の全權を以てして敢へて或は聖府束縛するに勿かれど。王素より其の請を許すを欲せざりしかども。普國の勢日に衰へて外交の困難なる到底凡庸政治家の當るべからざる所にして。スタインを外にしては一人の此の難局に當るに足る者無かりしかば。王止むを得ずして。スタインの言を納れ全權を委任せり。されば其後久し

の貿易通商は益々繁榮し。舉國一致の思想に一大助力を與へたり。而して普國の勢力も亦是れが爲めに頗る増加し。他日北部日耳曼の盟主たるの基礎漸く成れり。

第二節 奧帝フランシス第一世と普王フリードリヒ、ネーデルラントの死

千八百三十五年三月二日奧帝フランシス一世死し。其の子フェルディナンド繼ぐ。メッテルニヒ猶宰相の職に居りて政務を總理し依然として民權思想を壓服せり。千八百四十年六月七日普王フリードリヒ、ネーデルラント三世死し。フリードリヒ、ネーデルラント四世繼ぐ。四世の即位するや。盡く國事犯人を解放し。且大に治績を擧ぐべきを明言せしかば。人皆望を屬し。王必ず民權を伸べ憲政を施すべしと思へり。されば此の期望は一片の空泡に歸して王の全く爲す有るに足らざるを明にせり。蓋し王は性質溫良にして學藝を好みりと雖も。優柔不斷にして果斷勇爲の氣象に乏しく。且徒らに王室の權勢威力に戀々として浮華無用の外觀を衒ふを好みり。是を以て伯林は學藝の淵藪となり大學は旺盛を致し都市は裝飾せられたるも。國民の權利自由は依然として一步を進

からずして王はスタインの權勢を嫉み。終に其職を解けり。スタイン去つてナツツに居ると暫時にして。普國の外交内政は到底彼れが久して閑地に悠遊するを許さず。王は再びスタインを召還して臺閣に列せしめたり。

是に於いてスタインは鋭意内治を整理して國力を恢復するを力め。區々たる小策の恃むべからざるを知りて。一刀兩斷の處置を行ひ。幾多の大改革を實行せり。是れ實に普國の歴史に特筆大書すべきの改革にして。スタインが畢生の力を振ひたるは實に此の時に在りき。彼れは先づ農僕制度を廢して萬人に自由を興へたり。彼れは土地賣買の自由を許したり。彼れは地方制度を改良して秩序整然たる内治の組織を立てたり。彼れは市民に與ふるに自治の權利を以てせり。彼れは國

めず。憲政の實施殆んど期すべからず。是に於いて人民は痛く失望し。王に迫つて立憲政治を創立せんとを請へり。千八百四十七年王終に議會を伯林に招集したり。されど此の議會は新に全國より撰出せる代議士の集會に非ずして。從來各地方に存在し來れる小議會を伯林に併合したるに過ぎざりき。王は此の議會に公言して曰はく。余は決して憲法を人民に與ふる能はず。臣民と君主との關係を變更すべき所爲には余盡く之れに反對せんと。されば當年の議會は一事の爲す所無くして止めり。

第四節 千八百四十八年の佛國革命と日

耳曼聯邦

自由民權の思想は次第に發達したり。されど聯邦の君主は依然として舊時の面目を改めず。斯くの如きと幾年にして千八百四十八年は來れり。是れ實に日耳曼の政史に紀念すべきの年なり。此の時に當りて改革派の希望は愈々熱し來りて殆んど抑ゆべからざる勢あり。將に奮起して列邦の政府に迫らんとするに際し。偶々佛蘭西にて復た革命ありて國王ルイ・フィリップを廢し新に共和政治を創設せり。日耳曼の人民は此の革命に刺激せられて立憲政体を渴望すると益々

富衰へ民力疲敝せるの時一億五千萬法の債金を佛國に支辨するの重任を負担せり。彼れは百方術を盡くし策を運らして國民の愛國心を鼓舞し。其の勇氣と徳性とを涵養せり。是に於いてか普國は漸く生氣を恢復し。百敗疲敝の餘猶幾分の元氣と期望とを現はして。鬱勃たる敵愾の念は志士義人の胸中に燃へ。國民も亦漸く祖國の屈辱を悲しみ。機を見て將に土を捲いて起らんとするの勢ありき。

スタインの快腕は端無くもナポレオンの忌憚する所と爲れり。千八百八年ナポレオンは終に普王に命じてスタインを追はしめたり。スタイン去つて魯國に遁れ。その朝廷に止まれり。

スタインが終生の大希望は日耳曼帝國の統一に在りき。彼れは普魯西の強大ならんよりも寧ろ日耳曼全國の強大ならんこ

甚しく。死を決し全力を擧げて民權を伸べ自由を得んと企てて。その勢侮る可らざるものありしかば。聯邦の小なる者は大に恐れて急に内閣を解散して新に之れを組織し。人民に與ふるに自由の權利を以てし。以て僅かに人心を和らげたり。

同年普魯西及び埃太利に於いては革命の氣焰更に一層熾なりき。千八百四十八年三月維納大學の書生は蹶起して憲政の創設を政府に要求したり。宰相メッテルニヒ恐怖して英國に逃走し。改革黨の運動は至る所に起れり。埃帝終に大勢の抗し難きを見て。人民の投票を以て代議士を撰出し議會を開くべきことを約せり。されど革命黨の勢剽悍にして容易に靜まらず帝難有らんことを恐れ一族を携へて維納を去りインスブルックに移れり。之れと同時に普都伯林に於いて維納よりも一層激烈なる革命あり。三月十三日(埃の宰相メッテルニヒが逃亡したる日)及び十四日の兩日市民は兵隊と衝突して激戦を起したり。普王は躊躇之れを久うして終に人民に黨するに決し。同月十七日憲法を制定し人民に參政權を與ふべきことを公布せり。是に於いて革命黨は更に王に迫つて軍隊を伯林市外に退けんとを請ふ。十八日市民群を爲して王宮に至り直ちに此請を聽されんとを迫る。偶々二個の流丸ありて市民を殺せり。市民は以て軍隊の爲す所

とを希へり。彼れば此の希望を達せんが爲めに計畫施設したる所決して少なからざりき。市民に與ふるに軍人たるの權利を以てし。貴族が獨り官職を專有して租税を納めざるの制を廢して。庶民の爲めに仕官の途を開き廣く人材を登用し。租税の賦課を國民に均うしたるが如きは。國民の愛國心を發揮し。日耳曼の統一を助けたるに決して少きに非ざりしなり。後世ビスマルク、モルトケ等が聯邦を組織したるの基礎は實にスタインの築きし所なり。

スタイン既に追放せられ。ハルデンベルヒ代つて宰相となる。ハルデンベルヒ材幹智略素よりスタインに及ばずと雖も。性快活にして機敏なりしかば頗る王の寵を得たり。蓋しスタインは嚴酷にして傲慢の風あり。氣骨稜々として往々人を凌

と爲し。直ちに城中に闖入して之れを攻撃し。激戦夜に及び。死傷甚だ多し。翌日王終に市民の請を納れて軍隊を市外に出だし。内閣を解散して新に之れを組織し。撰擧法を制定して之れを公布し。遠からずして國民議會を召集すべきを約せり。(以下第六節を見よ)

第五節 「準備會議」○「國民議會」○「聯邦議會」の廢止

普埃に於いて激烈なる革命の破裂したると同時に。五百人の委員は日耳曼の各州よりフランクフルトに會合して所謂「準備會議」なるものを開けり。是れより先き。舉國の改革黨は立憲政体創立の機既に熟したるも普埃二國は猶斷乎たる處置に出づる能はざるを見て其の頼むに足らざるを知り。乃ち自ら會議を開きて憲政を創設し鞏固なる國家を建立するの準備を討議せんと欲したり。是れ即ち準備會議の由來する所なり。斯くて準備會議は三月二十一日(一八四八年)を以て開會せしが。過激派は此の會議を永久の議會と爲して從來の「聯邦議會」に換へんと欲せり。されど衆多く之れに反對して準備會議は唯新に「國民議會」を召集するの準備を爲すべきとを決せり。「聯邦議會」(千八百十五年聯邦成立の時に組織せられたる者)も亦此の

く。王侯貴人を見ると恰も小兒の如く。眼中殆んど人無きが如くなりき。故に普王は頗る之れを忌憚し兩者の間は不和なりき。ハルデンベルヒに至りては洒落快活にして。頗る埃の宰相メッテルニッヒの風采あり。彼れが王に寵せられたる偶然に非ず。されどハルデンベルヒも亦決して凡庸無爲の人物に非ず。彼れは最も外交の術に長じ樽俎の間に列國の星使と談論するの技倆を有したり。普國近世の勃興は彼れに負ふ所決して鮮なからず。

スタイン、ハルデンベルヒと與に普國聯邦の創建者として忘るべからざる者はシテアルンホルストなり。彼れは軍務を總轄し。軍隊を精練し。普國をして強兵を列國の間に誇らしめたり。彼れは舉國皆兵の制度を定め。苟も國民たるものは貴となく賤となく。農となく商となく。盡く

議決を承認し聯邦に通告して「國民議會」に委員を撰出せんとを要求せり。是に於いて過激派は此の處置に不満を抱きて温和派と分離して別に共和政治を創立せんと欲しバーデンに於いて亂民を煽動して内亂を起せり。されど忽ちにして南部日耳曼諸邦の鎮壓する所となり。

「準備會議」の決議したる「國民議會」は千八百四十八年五月十八日を以てフランクフルトに開かれたり。國民議會は埃太利侯ヨハンを推して假りに中央政府の長官と爲せしかば聯邦議會は其の權限を之れに譲りて自ら解散せり。「聯邦議會」是に於いて消滅しぬ。中央政府の長官に推されたるヨハンは「國民議會」の議員中より七人を撰出して責任内閣を組織したり。既にして議會は討議を始めたが。一題の議場に現る、毎に議論鼎沸して殆んど歸着する所なかりき。就中最も議論の分れたる重大の問題は聯邦の憲法制定是なり。最初舉國の人民蜂起して不穩の状あるや列邦の君主は皆異動を恐れて完全なる憲法を制定せんとを人民に約せり。然るに暴動漸く鎮靜するに及んで君主は多く前言を忘れて成るべく憲法の制定を妨げんとを圖れり。是を以て憲法制定の問題は管に議會の内部に於いて議論の區々紛々たりしのみならず。外部に於いても幾多の障礙を

一定の期間兵役の義務に服すべきことを命ぜり。是れ實に國民全体を打つて一丸と爲し、その勇氣を鼓舞しその愛國心を振作し。協力一致して以て外敵に當るの制にして。後年普佛戦争に際しモルトケが率ひて以て連戦連勝したる軍隊は。實にシュアルンホルストその素を成せしなり。

ナポレオン魯都に敗れてエルバに流され。次いでセント・ヘレナに移さるゝや。日耳曼の諸邦は奥大利を以て盟主となし。聯邦を組織せり。之れに加はらしもの三十九邦。各々委員を撰出して聯邦議會を組織し。又人口百人毎に一人の兵卒を出して三十萬の常備兵を設けたり。是れ即ち千八百十五年六月維納に於いて議決したる所なり。(本欄参照)此の時に當りて獨逸戦争に勞れ人々皆平安を希へ

來たしたり。次に最も困難を感じたる一問題は奥大利と日耳曼聯邦との關係是れなり。議員の多數は奥大利本部(屬邦を除く)のみを聯邦の中に加へんと主張せり然るに奥國の政府は奥大利帝國の全部を以て聯邦に加入せんと主張し固く執つて譲らず。是に於いて議會と奥國とは端なくも衝突を來し。議長バロン・フォン・ガゲルンは斷然奥大利を聯邦以外に驅除すべきを唱へ。之れに賛同するもの亦甚だ多し。されどガゲルンの意見に反對するものも亦少なからず。奥國を始めとして加特力教國、及び民主黨等は皆是れに反對せり。千八百四十九年三月奥大利は決然議會に要求する所あり他までも論を主張し奥大利帝國全体を聯邦に加ふべきことを極論し。且更に意見を提出して曰はく。七人の委員を常置して奥大利の委員をして之れに長たらしめ。以て日耳曼聯邦全体に關する政務を司らしむべし。又民選議員より成れる議會を廢し換ふるに列國政府の委員を以て組織したる議會を以てすべしと。議會は斯くの如き要求に接して皆奥大利の不遜を憤り。先きにガゲルンに反對したる者も今は之れに賛同して奥大利に反抗せんと欲せり。同月二十七日議會は終に一の議決を爲し。普魯西王を以て日耳曼皇帝と爲さんと欲し。四月三日此の意を普王に通じ其の承諾を求めたり。舉國皆耳を欲て、

り。されば此の後殆んど四十年の間日耳曼には千軍萬馬を動かすの大戦争無く。稍々小康を保つを得たり。此の間工業は發達し。商業は進歩し。美術に、文學に、暇々として長足の進歩を爲せり。殊に普魯西は發達進歩の度頗る大にして。僅に數十年の間に學術工藝を以て歐洲に誇示するに至りぬ。

然り維納會議の後四十年間獨逸には流血杵を漂はすの激戦無かりき。されど國內は決して平穩無事に非ずして到る所に紛擾を見ざるは無かりき。而して斯くの如き紛擾を醸したるものは實に自由民権の思想と國民的統一の思想となりき。(本欄参考)日耳曼の學藝發達し。幾多の大學設立せらるゝに及んで政治經濟の學は大に進歩し。大學の講師及び學生は一方には國民的合意の必要を唱へ他方には立志

王の答を待てり。既にして普王答へて曰はく。聯邦にして余が皇帝たるを承認し。且つ憲法にして余に與ふるに皇帝の職責を完うするに足るの權力を以てするに非ざれば。余は到底議會の請に應じて日耳曼皇帝たるを得ずと。是に於いてか議會は又一頓挫を來たし議容易に調はず。既にして奥大利は議會を以て事を興にするに足らずと爲して委員を召還し。次いで普國も亦之れに倣ひ。五月二十日に至りては有力なる委員は大抵袖を連ねて任を辭せり。六月十八日普ルテンベルクの政府は終に全く議會を解散するに至りて。幾多の期望と責任とを荷うて起れる議會は爰に空しく消滅して一の功績をだも擧ぐる能はざりき。

第六節 普國々民議會○奥大利議會

爰に普王は伯林の人民に約するに議會を開くを以てせり。(第四節参照)千八百四十八年五月二十二日議會は愈々伯林に開かるに及んで。過激黨は徹頭徹尾政府の議案に反對したり。人民亦過激黨を援け威力を以て溫和黨を壓服せんと欲せり。普王形勢の穩かならざるを見て十一月九日命を下して八日の間議會を休會し。同月二十七日議場をフランドンブルヒに移して此に開會せんと欲せり。蓋し議場

政体創設の必要を絶叫せり。然るに當時歐洲諸國は僅に佛蘭西の革命を鎮壓して。自由民権を思ひと恰も蛇蝎の如く。擅制抑壓を以て國民を駕御せんと欲したり。日耳曼諸邦の政府も亦方に擅制的思想の潮流中に在りて。國民の輿論に背馳し。自由民権の思想を抑ふるに汲々たりき。普魯西に於いても民権的思想と擅制的思想との衝突漸く激うして國內頗る騷然たり。ビスマルクが日耳曼の政治的舞臺に現はれたるは實に此の際に在りしなり。乞ふ以下數節に於いて聊か偉人の經歷と事業とを寫さんとす。

第二 時代
ビスマルクの少時及び壯年時代

民権自由の説國內に沸騰し。君主擅制を非難するの聲日に響々たるに當りて。頑乎として輿論の潮流に抗し。君主萬能の

を移したるは伯林市民の議會に迫りて溫和派を威嚇するを避んが爲めなり。然るに過激黨は議場移轉の議に反對し獨り頑然として伯林に會を開き決議して曰く。議會にして伯林に開會せられざる以上は人民はその議決に従ふの義務なしと。是に於いてカプランデルブルヒの議會は終に議事を進行する能はず數日にして解散せり。次いで千八百四十九年二月二十六日更に議會を召集し憲法制定の討議に着手せり。此の憲法の草案は千八百四十八年十二月五日に世に公にして臣民の熟考を求めたるものなりき。議始まるに及んで政府の意見は議會と衝突し議論百出決する所なくして四月二十七日に至り。此の議會も亦解散せられたり。次いで政府は撰擧法を改正して新に議員を撰擧し。八月七日復び議會を召集せり。而して今回の議會は前數回の議會に比すれば議事の進行頗る穩かにして。政府も議會も與に多少の讓歩を爲して。憲法を議定せり。千八百五十年二月六日普王に新憲法を守るべきを誓ひたり。是に於いて普魯西は始めて立憲政体の國となれり。

普國に於いては憲法制定の議斯くの如く騒然たると同時に。奧太利に於いても革命黨の運動は愈々熾なり。是れより先き維納大學の書生が宮闕に迫りて立憲政体の創設を請ふや。奧帝は終に議會を開く

説を主張したるものはビスマルクなり。彼れは千八百十五年四月を以てシウエンハウセンの一貴族の家に生る。十五歳にして伯林の中學に入り。十八歳にしてゲッテングンの大學に入る。彼れ大學に在るの間。粗暴、放恣にして。毫も檢束を加へず。麥酒を鯨飲し。朋友と争闘し。更に學業を以て意に介せざるもの、如くなりき。されば人皆彼れを厭惡し。是れと親しむもの甚だ少なりき。然れども彼れは生れながらにして一種の威嚴を具へ深然侵すべからざるの威風ありき。是れ彼れの放蕩無賴を以てして猶聊か人に畏敬せられたる所以なり。

ビスマルクゲッテングンに在ると久しからずして。再び伯林に來り有名なる法學者ツビニーに就きて法學を研究せり。されど彼れは伯林に來るの後も粗豪放恣依然

べきとを約せり(本章第四節參考)。七月二十二日議會は愈々維納に召集せられたり。元來奧太利帝國は幾多の邦國より成立し各國民は皆固有の制度風俗習慣を維持したり。されば各地方より來れる議員は各々意見を異にして議論殆んど調和する所無く。徒らに騷然として爭論を事とするのみ。然り而して議會の最も困難を感じたる匈牙利と奧大利との關係是れなり。時に匈牙利にはコッストとて有名なる雄辯家ありて熱心に匈國の奧太利と分離して獨立すべきを唱道せり。匈牙利の人民は翕然として之れに應じ奮つて獨立を謀らんとを希へり。偶々一人あり奧帝の使節ランベルヒ伯をヘッスに暗殺せしかば帝大に怒り。直ちに維納の鎮臺を遣はして匈人を討せんとせり。然るに鎮臺兵中に匈國の獨立黨に同情を有する者頗る多く匈人追討の王命を拒めり。維納市民及び學生の中にも亦兵士と與に獨立黨を援けんと欲する者少なからず。是に於いて維納は騒然として亂れ。獨立派は帝の兵士を撃つて之れを敗り。軍務省に闖入し。宰相ラトールを捉らへて之れを殺せり。帝震駭措く所を知らず。急に逃れてオルミッツに走れり。是に於いて維納は全く革命黨の手中に歸し。議會は議事を續けたれども論争激昂として一事の決する所無し。既にして兵隊は四方より維納に向つて進み。將に帝を援けて革

然として舊の如く。曾て刻苦精勵すると無かりしかば。何人も彼れが後世日耳曼帝國の創建者として萬世の宏基を開くの偉人たるを知る者無かりき。彼れは十九歳より二十三歳に至るまでは幾多の小官に仕へ。二十三歳より三十歳の頃に至るまでは。其の領地なるシエニン・ハツセンに在りて田園の間に閑日月を送れり。彼れは此の間遊獵、騎馬を事とし。又書冊と親めり。最も心を歴史の研究に用ゐ。傍ら哲學をも涉獵せり。彼れが英、佛に遊びてその文物制度の實況を視察したるも亦此の際に在りき。

命黨を鎮壓せんとす。十月二十一日維納終に重圍の中に陥る。次いで同月三十日革命黨は大に軍隊と戦ひしも力敵せずして終に敗走せり。帝黨乃ち維納に入り革命黨の首領を捕へて之れを射殺し。且市民の武器を沒收せり。十一月二十二日更に議會をクレムシールに開き再び憲政創設の事を議せり。時に帝年既に老いて多難の局に當る能はざるを知り。十二月一日位を甥フランシス・ヨゼフに譲りて退隱せり。ヨゼフ位に即くの後奥太利は大抵平穩に歸したれども。獨り匈牙利は依然として王命に服せず。奥將非ンデシグラツは赴きて數々之れを討じたれども。毎々匈軍の破る所と爲れり。是に於いて波蘭人及び日耳曼人の匈人を援ぐる者甚だ多く其軍殆んど三十萬の多きに達せしかば匈國の議會は以て獨立既に成れりと爲し終に公然獨立を天下に宣言せり。奥帝ヨゼフは猶匈牙利を失ふに忍びず。援を魯西亞に求め以て獨立黨を征せんと欲せり。是れより先き魯國は西歐及び中部歐洲に於ける革命の餘波は自國にも革命を誘起せんとを恐れ兵を境上に集めて既に革命黨に對する示威運動に着手せり。されば奥帝の援を請ふに及んで直ちに之れを承諾し。千八百四十九年五月大軍を出して匈牙利に入らしめたり。同時に奥太利の軍も三道より匈牙利を攻め。四方より包圍し一舉して革命黨を鎮壓せ

れが普國の政治舞臺に現はれて縦横快技を振ふの時は久しからずして來れり。千八百四十七年父死してビスマルク其の家を續ぐに及んで。撰まれて普國國會議員と爲れり。是れ即ち彼れが利器を振つて政界の蟠根錯節を截るの時漸く到れるなり。

第三 ビスマルクの政見並に彼れの性質

粗放磊落の一壯年ヘルン、フォン、ビスマルクは果して何等の政見を持して政界に立ちしか。彼れは君主專制を擁護して立憲政体に反對せり。彼れは自由民權の思潮に抗抵して國民の輿論に背馳せり。蓋しビスマルクは普族の家に生れ。王家を愛するの念甚だ深く。君家に忠に社稷を擁護するを以て己れの本分と爲し殆んど其の他を顧みざりき。彼れが千八百四十

んと欲せり。匈人も亦勇奮闘する力めたれども。如何せん魯奥の軍甚だ多くして勢當るべからず。匈軍の勢日に益々盛まり敵軍四方より蟻集せり。八月十一日コッストは參議院をアラドに開き。大將ゲーギーに三軍の全權を委任して匈牙利の頽勢を挽回せんとを謀れり。然るに其の後二日にしてゲーギーは己れの軍を率ゐて敵に降りしかば。匈軍は全く勢を失つて復戦不能はず。革命黨の首領は逃れて土耳其に走り。匈牙利の諸城は相踵いで陥れり。斯くて匈牙利の人民が死生誓つて完うせんと欲したる獨立の計畫は終に一片の水泡に歸せり。

第七節 普魯西と奥太利との軋轢 ○聯邦議會の再興

奥太利が匈牙利の叛亂を鎮定するに忙はしく他を顧みるに遑あらざるや。普魯西は此の機に乗じて奥を凌駕せんと欲し。千八百四十九年五月數邦の委員を伯林に會合して。新に聯邦を組織し普國自ら盟主たらんとを謀れり。五月二十六日普國は終にサクソニー及びハノーバーとの同盟を結べり。次いで北部諸邦の之れに加盟する者頗る多く所謂「日耳曼同盟」なるものは茲に成立せり。千八百五十年四

七年始めて國會議員として政界に現はるゝや。實に斯くの如き保守主義を以て議場に立ちしなり。彼れ議會に出で、より緘黙するも一ヶ月。その一たび口を開けるや斷乎とし君權主義を叫破し。自由黨の鋒鏑に當れり。彼れの辯舌は敢へて爽快流暢ならず。されど其の語氣は沈痛壯重にして一種の威嚴を具へ。往々にして人の肺腑を刺すの言を發することあり。彼れは既に國民の輿論に背けり。國民が彼れを見るに惡魔の如く。自由黨は當然として彼れを攻撃せり。されど彼の剛愎大膽なる。冷然として攻撃非難の衝に當り。殆んど以て意に介せざりき。若しビスマルクにして後年俛太利を排して普國の覇圖を成就し。幾多の偉功を奏すると無かりせば。彼れは終生國民に蛇蝎視せられたる頑陋物たりしならん。

月二十日普國は「日耳曼同盟」の議會をエンフルトに召集せんと欲せり。然るにサクソニー及びハノーバーは此の處置に反對して委員を議會に出だすを拒めり。時に俛太利は既に匈牙利の内亂を鎮定して意を日耳曼の形勢に注ぎ。普國が專恣事を處するを見て大に之れを憤り。普國を排擠して俛太利の覇圖を恢復せんと欲し。ハバリア及びビュルテンベルヒと結び列邦に通牒して委員をフランクフルトに會し。聯邦の組織を鞏固にして。普國の組成せる「日耳曼同盟」を打破せんと企てたり。是に於いてか日耳曼聯邦は全く二派に分れ。一派は俛太利を首領としてフランクフルト議會に加はり。他の一派は魯普西を盟主として伯林に會合し。普國の軋轢は益々激烈と爲りぬ。

斯くの如く俛太利と普とは益々軋轢するに當り。茲に又兩國の衝突をして愈々激烈ならしむるの事情こそ生じたれ。是れより先きヘッセン、カッセルの撰舉侯は宰臣ハッセンブルグの意に従ひ議院の討議を経ずして豫算を製定し擅まゝに國費を支出せんと欲せり。議院は是れを不法として非難せしかば。侯は十一月二日斷然議院を解散し以て租税の徴收を計れり。是に於いて人民は當然として侯及び宰相の不法を攻撃し事情甚だ穩かならず。撰舉侯は終にカッセルを逃れ。

千八百四十八年の佛蘭西革命は歐洲列國到る所に革命の火種を點じたり。日耳曼の民權黨も亦處在蜂起して政府に迫り。立憲政治の創設を求むると愈々急なり。俛太利の有名なる專制宰相メッテルニヒは民怨の府となり。國外に逃走し。其の他の聯邦も皆憲法を制定すべきことを國民に誓へり。普國に於いては民權黨の勢頗る盛なりしかば。普王終に憲政の創設を國民に約せり。ビスマルク此の時猶議員に列せしが。大勢輿論の到底抗すべからざるを見て。枉げて憲法制定に贊同せり。されど彼れの眞意は猶依然として君主の權力を強うするに在りて。苟も憲法の許す限りは飽くまでも君權の範圍を擴張せんと欲したるなり。さればフランクフルトの國民議會(本欄參照)が普王に皇帝の稱號を上るや。ビスマルクは王に勤めて之

フランクフルト議會(俛太利の召集せし者前段に參照せよ)に援を求めたり。フランクフルト議會は直ちに之れを承諾し。十一月一日俛太利及びハバリアの兵を遣はして赴き援はしむ。時に普魯西は俛太利の獨りヘッセン、カッセルに勢を專にせんと恐れ。亦兵を出して十一月二日にカッセル及びフルダを占領せり。是に於て俛太利は普魯西に要求するにヘッセン、カッセルより普兵を引くべきことを以てす。普魯西は斷然此の要求を拒絶し。よし兵力に訴ふるも一步を譲らざることを答へたり。是に於いて兩國の軋轢は愈々激烈と爲り。戰爭將に破裂せんとせり。されど内亂は國方を疲らし人民を困しめ。其の害甚だ大なるを以て。兩國にも平和論を主張するもの甚だ多く。終に干戈に訴へざるを得たり。是に於いて俛太利の宰相シュヴァルツェンブルヒは普國の全權公使マントエフェルとオルミュッツに會談し。日耳曼聯邦の憲法を製定せんが爲めに列邦王侯の「自由會議」なる者を開き。普、俛太利兩國は協同してヘッセン、カッセルの紛擾を鎮定すべきことを議決せり。

十二月二十三日列邦王侯の「自由會議」はドレスデンに開かれたり。蓋し委員之此の會議に出だすと否とは列邦の自由に一任せり。是れ即ち「自由會議」の名ある所以なり。會議は幾度か議事を催うしたれ

れを拒絶せしめたり。彼れの意蓋し謂へらく。議會が皇帝の稱號を授くるが如きは。是れ君主の大權を蝕食して。國民梁の備を作るものなり。君主が皇帝たる否とは君主自ら決すべき所にして他の容喙を俟たざるなりと。ビスマルクが國民に敵視せられたる偶然に非ず。

ビスマルクは決して高尚なる理想を胸中に藏するのみに非ず。彼の心は俗情を以て充たされたり。功名富貴の念は日夜彼の胸底を離れざりしならん。彼れは傲慢不遜にして敢て人に下らず。彼れの風采は野卑武骨にして洒落圓轉の風無し。其の舉動や其の言語や。壯重にして圓滑ならず。彼れは毫末の制限をも好まず。放恣擅斷何人とも雖も其の爲す所に干渉するを許さず。嚴酷、驕傲、殘忍、不遜、粗暴、擅恣、是れ實にビスマルク胸中に凝

るも是れ亦一事の決する所無かりき。斯くて日耳曼の狀勢は紛擾に續々に紛擾を以てして毫も秩序を恢復する能はざりしかば。普魯西は寧ろ千八百十五年の聯邦組織を復して「聯邦議會」を再興するの便利なるを悟り。其他の諸邦も亦普魯西の意向に賛同せしかば。千八百五十一年六月十二日より聯邦議會は復たフランクフルトに開かれたり。

第八節 サクソニー、バーデン、ライン沿岸

革命的波瀾の狂瀾中に漂ひしものは特り普魯西の二國のみならず。日耳曼聯邦に至る所に怒潮の湧沸するを見たり。千八百四十八年五月三日サクソニーが議會を解散するや人心騒然として政府に抗し。ドレステンの市民は蜂起して政府に迫りしかば、王は閣臣と與に逃れて。ケーニンクスタエンに走れり。是に於いて市民はドレンスデンの過半を占領し勢頗る熾なりしかども、普魯西の兵來りて王を援くるに及び。内亂は終に鎮定せられたり。

終に内亂を鎮壓したり。

第九節 丁抹と日耳曼との交戦

結せし特性なりき。只夫れ彼れは一世を籠蓋するの意氣を有し。乾坤を吞吐するの抱負を懷き。之れを貫くに豪毅果斷の氣象と。百折不撓の精神を以てせり。是れ彼れが一世を空うるの偉勳を奏したる所以なり。

第四 ビスマルク、フランクフルトの聯邦議會に列席す

千八百五十一年日耳曼聯邦議會再興せられ。(本欄第四編第四章第七節參照) 聯邦政府は各々委員を遣はして。議會をフランクフルトに開けり。ビスマルクも亦普魯西委員の書記官となりて議會に列席するを得たり。蓋し聯邦議會は毫も日耳曼の福利を謀るに足らずして徒らに列邦外交家の陰謀術を弄するの場たるに過ぎざりき。其の委員は人民を代表するの議員に非ずして政府の全權公使たるに過ぎず

ホルスタエン公國は由來丁抹の管轄に屬すると同時に又日耳曼の一部を爲せり。是を以て丁抹王は日耳曼聯邦の一員なりき。又シュレースヴィグは日耳曼に屬せざりしかどもその人口の大半は日耳曼人なりき。さればホルスタエンの人民とシュレースヴィグの日耳曼人とは常に日耳曼の管轄に屬せんことを希望し。主張して曰はく。千四百六十年の條約に依ればホルスタエンとシュレースヴィグとは分離すべからざるものにして、且つ丁抹王の男系盡くる時は二公國と丁抹との關係は全く斷ゆるものなりと。然るに丁抹王クリスチャン八世は此の主張を不當と爲し。二公國は永久丁抹に隸屬すべきものなることを宣言せり。是に於いて二公國の日耳曼黨は使を聯邦議會に遣はし日耳曼の援を藉りて丁抹の羈絆を脱せんと欲せり。されば聯邦議會は姑息の答を爲して斷然たる處置に出でざりしかば。此の問題は未だ落着するに到らずして。丁抹王クリスチャン八世は死せり。(千八百四十八年) クリスチャンの子フリドリヒ位に即くに及び。父の遺志を繼ぎ他くまでも二公國を丁抹の管下に置くべきことを主張せしかば。日耳

故にフランクフルトは實に外交家の集合場にして國民の權利を重んじ。日耳曼の統一を計るが如きは毫も彼等委員の顧みざりし所にして只列邦相競ひ相欺き相陥るゝの混亂を醸したるに過ぎざりき。されば此の議會に出席すべきものは術策縦横、權謀百出の策士に非ざれば不可なり。然るに普王は武骨、朴訥のビスマルクを以て委員に副たらしめたり。是に於いてか人皆王の無謀を笑ひ。ビスマルクを以て外交家の器に非ずと爲せり。されど普王は固くビスマルクを信じ。ビスマルクも亦己れの材略を自信し。王命を完うし負荷に堪へんとを信せり。果然後れがフランクフルトに在ると久しからずして彼れの外交的手腕は衆の認識する所と爲れり。彼れが爛たる眼光の耀く所。視察周到調査緻密。苟も外交の大局に關

曼黨の人民は騒然群起して丁抹王に叛き。假政府を立て、一時の政務を司らしめたり。丁抹王は直ちに兵を遣はして之れを鎮壓せんと欲したれども、フランクフルトの國民議會は叛徒に與みし。普將ランゲルをして兵を將みて之れを援けしめたり。斯くて日耳曼軍は陸戰に於いて大に勝を制して。シュレスニグより丁抹人を驅逐せしかども、軍艦未だ備はらざるを以て海上に於いて大に丁抹の破る所と爲れり。是を以て同年八月二十七日兩國は七ヶ月間の休戰を約せり。休戰の條約中に。普國及び丁抹は各々二名の委任を出して假りにホルスタインとシュレスニグとの政事を處理するの一條項あり。然るに日耳曼の國民議會は此の條項を不當とし普國の越權を非難せり。是に於いて議論沸騰人心恟々として治まらず。過激黨はフランクフルトの人民を煽動して。國民議會を脅かせしかども。終に軍隊の鎮壓する所と爲りぬ。斯くて千八百四十九年の三月に至りて休戰の期限は経過せしかば、丁抹と日耳曼とは再び兵を交へたり。日耳曼の軍は始めは海陸共に勝利を得て、陸軍はフレデリンヤまで進みしが。七月五日及び六日の戰に普軍大に敗れたり。是を以て同月十四日普國は再び休戰條約を結べり。時に歐洲列國の丁抹を援くるもの漸く加はり。普國は到底戰を繼續するの不利なるを知り。千八百五十年

するものは一物一事として彼れの瞳子に映せざるは無かりき。彼れは精細なる報告書を作りて絶へずフランクフルトの形勢を普國に通知し。細大洩さず。觀察極微に徹せり。彼れの銳意計畫したる所は普魯西の國威を發揚し。王家の權勢を張るに在りき。故に彼れは此の時に至りても猶民權主義を敵視し。出版の自由を制限し大學の學生講師等が自由民權の思想を民間に披舞するを抑制せんと努めたり。されば彼れがフランクフルトに在るや。奥の專制的宰相メッテルニヒと會談して意氣頗る投合したるものありき。されどビスマルクは一意専心普國の覇圖を建つるを力め。メッテルニヒは汲々として奥太利の權勢を維持せんと欲し。兩者の間釋然として相和する能はざりしなり。斯くてビスマルクは幾多の政治家と談論

七月十二日終に和を講せり。されどシュレスニグ、ホルスタインの人民は猶丁抹に従ふを好まずして獨力戰を繼續せしかども。衆寡勢敵せず。七月二十五日大に丁抹軍の破る所と爲れり。次いで奥太利の干涉に依りて戰を止め。丁抹は舊の如くシュレスニグ、ホルスタインを領有すると爲りぬ。其の後千八百五十二年歐洲列強の間に訂結せられたる倫敦條約に依りて。丁抹王のシュレスニグホルスタイン管轄權を確認したれども、日耳曼議會及びシュレスニグホルスタインの人民は猶此の條約を承認するの意無なかりき。されば此問題は後年に至るまで猶落着せざりしなり。余は後章に於いて更に記述する所あらん。

第五章 革命的運動後に於ける日耳曼の政治的狀態

千八百四十八年の佛蘭西革命が日耳曼の革命黨を鼓舞して至る處に叛亂紛擾を惹起したるとは前章記する所の如し。而して此の革命的運動が兩三年を経て漸く鎮靜するに及んで。普、奧兩國を首として日耳曼聯邦の政府は革命の反動を起して頗る抑制抑壓に流れたり。曩きに列邦が制定したる憲法は或は廢され或は變更せられ。其存する

し。幾多の外交家と會見するの間、次第に外交の權略に長じ。時昔朴直無謀の人は今や一變して機智百端術策縱横の人物爲れり。彼れ眼光銳利。人と應接するや。仔細に其の性質氣風を洞觀して巧みに談笑折衝せり。されば巧智權謀を以て有名なるメッテルニヒすら彼れの材略に驚き。魯のゴルチャコフすら彼の奇智に服せりと云ふ。

第五 ビスマルク駐魯全權公使と爲りて魯、ヒートルスブルグに赴く。

ビスマルクの多智なる一方に於いてはゴルチャコフを驅逐して魯の歡心を納め。他方に於いてはナポレオン三世を勸誘して佛、埃の間を離間し。埃太利をして孤立せしめて以て其の勢力を殺げり。是に於いてビスマルクの外交的手腕は萬人の

ものも徒らに名義のみにして實際は擅制政治と異なる無かりき。されば苟も政府に反對するものは言論の自由を束縛せられ。甚しきは往々にして冤罪を被るとすらありき。是を於て人民は痛く失望し本國を去つて米國其の他の外國に移住するもの甚だ多かりき。

千八百五十五年普國が議員の總撰舉を行ふや、政府は多く己れの黨與を撰出せんと欲して。百方撰舉に干渉したりしかば。その結果民權黨の代議士は甚だ少く政府黨の獨り益々跳梁するに至りぬ。名は立憲政治と稱すも雖も政府の偏頗なる處置に依りて其の實を廢すると斯くの如きもの特り普魯西のみに非ずして聯邦多く然らざるは無かりき。是れより先き普王フリードリヒ、井ルヘルムは久しく腦病に苦しみしが是に到りて益々重きを加へたるを以て。千八百五十七年弟ホルヘルムを以て攝政と爲し。代つて政務を總裁せしめたり。井ルヘルム賢明にして識見あり。既定の憲法の蔑視すべからず民權の漫りに侵害すべからざるを知り。從來の内閣を解散して新に内閣員を任命し。議員改撰の時には専ら公平不偏を旨として毫も撰舉に干渉すると無かりしかば。民權派の代議士は大に増加して憲政の實漸く揚がれり。

認る所と爲り。千八百五十九年魯國の全權公使として魯都セント、ピートルスブルグに駐在するの命を被れり。彼れ命を奉じて魯都に至るや。大に魯國外交社會の好評を博し。人皆噴々としてビスマルクを稱賛せり。蓋しビスマルクは驕傲人に下らずと雖も。其の舉動率直にして意氣頗る磊落なりしかば。魯人の朴直質素なる氣風に適合したるなり。當時普國財力疲敝して巨額の費用を外交に投ずる能はず。ビスマルクの年俸は二萬弗に過ぎりき。之れに反して佛、英、埃、等の公使は大抵五萬弗以上の俸給を受けたり。されば壯大なる夜會を催うし。一夕の宴會に萬金を投ずるの豪奢は到底ビスマルクの爲し能はざる所なりしかども。猶能く外交場裏に飛躍して。衆目の注視する所と爲れり。加之彼れの妻ヨハンナ、フォ

ヤ王井クトル、エンマエエル主として伊太利の統一を謀り。久しく分離せる小邦を併合し。且つ埃太利の主權を半島以外に排除せんと企てたり。斯くてサルヂニヤは佛蘭西の援を藉りて埃太利と戦つて之れに勝ち。終に伊太利の統一を完うしたり。日耳曼聯邦の人民は伊太利の統一を見て大に之れを羨み。自國の秩序なく統一なきを慨き。日耳曼聯邦の國民的の思想は益々旺盛を致せり。されど久しく嫉視反目せる幾多の邦國を網羅して而かも其間に團結和合を來たすとは。區々たる爭論討議の能くする所に非ず。一世の偉人出で、以て快刀亂麻を斷つ處置を施すに非ずんば。何を以て日耳曼聯邦の組織を改造して鞏固なる國家を建つるを得んや。天は終に斯くの如き偉人を普國に下して日耳曼の統一を成就せんめんと欲したるなり。

日耳曼の統一を成就するの偉人とは誰ぞや。曰はくオット、フォン、ビスマルク、シュエンハウセン是れなり。千八百六十二年一月二日普王フリードリヒ、井ルヘルム四世死し。弟フリードリヒ、井ルヘルム、ルド非ヒ(前に攝政たりし者)本章前段參照)繼ぐ。之れを井ルヘルム一世と稱す。井ルヘルム一世聰明にして果斷。普く人を見るの明あり。即位の後一年にして。ビスマルクを拔擢して總理大臣兼

ン、フトカムメルは聰明にして材識あり、能く夫を助けて衆望を收めたりしかば。ビスマルク夫妻の名は魯國の外交社會に喧傳せり。

第六 ビスマルク普國の總理大臣と爲る。

千八百六十一年一月二日普王フリードリヒ、井ルヘルム四世歿し太子立つ。之れを井ルヘルム第一世とす。時に普國の政府は自由黨の攻撃を受け内閣頗る動搖せしかば。普王は直ちにビスマルクを魯都より召還し、大臣の職を授けて議會を操縦せんと欲せり。されどビスマルクは内治の局に當るに先ちて。ナポレオン三世の動靜を視察し佛國政界の狀況を觀察するの必要を認め。王に請ふて。公使と爲りて佛國に赴き巴里に駐在し。具さに朝野の狀況を精査し心竊かに佛國の恐

外務大臣に任じ。大に驥足を伸べしめんと欲せり。是れより先き。ビスマルクは普を代表してフラクフルト議會に臨み。又公使として巴里に駐在し。既に超群非凡の技倆あると示せり。彼れは改革派と與に日耳曼の統一を希望せり。されど彼れは區々たる小策の到底此の目的を達する能はざるを知り。劍銃と血とを以て國民的統合てふ目的を達せんと欲せり。是れ即ち彼れが鐵血宰相の名を得たる所以なり。而してビスマルクが鐵血手段を施したる第一着歩は實に普境戦争是れなり。

第六章

普魯西と埃太利との戦争○普

埃の分離

第一節

普埃合同して丁抹と戦ふ(シュレース井ッロホルスタイン事件)○普埃開戦の名義

普魯西が埃太利と戦ひ。次いで兩國分離するに至りたる第一の動機はシュレース井ッロホルスタイン事件(本編第四章第九節參考)是れなり。故に余は先づ此の事件を記述せん。

るゝに足らざるを思へり。彼れ巴里に在るの間英國に遊んで其の政体人情を視察し大に得る所ありき。既にして普國の政府は復た民黨の抗抵を受け。王の要求せる軍費は議會の否決する所と爲りて軍備擴張の計畫空しく畫餅に歸せり。普王は議會を操縦して能く難局を制する者はビスマルクの外に是れ無きを知り。復た彼れを巴里より召還して。直ちに擢んで、總理大臣の頭職を授けたり。

千八百五十一年丁抹王はシュレース井ッロホルスタイン及びブラウエンブルグの三公國の人民に約するに。丁抹臣民と同等の權利を附與すべきとを以てせり。然るに王は此の約を守らずして往々擅恣の處置を三公國に施したりしかば。人民は大に怨恨の念を懷けり。千八百六十三年三月三十日丁抹王フリードリヒ七世は更に不法の命令を下して曰はく。自今以後ホルスタインは舊に依りて丁抹に貢賦するも。その人民は丁抹の政治に參與するの權利を有せずと。此の布告は舊にホルスタインの人民を激したるのみならず。大に日耳曼聯邦の非難する所と爲れり。聯邦議會は終に丁抹王に交渉し六週間以内此の布告を撤回すべきことを要求せしかども。王は毫も之れに應ぜず。却て一議案を丁抹國會に提出し。ホルスタインの從來享有せる特權を奪ひ。且是れを永久分割すべからざるの領土と爲さんと欲せり。千八百六十三年十一月十五日國會は此の議案を通過したり。されど丁抹王フリードリヒ七世は未だ此の法案を裁可せずして突然死亡せしかば。クステアアン九世繼いで王位に即き。十一月十八日法案を裁可し。翌年一月一日より之れを實施すべきことを公布せり。是に於いて普、埃は此の法律を不當として丁抹王に求むるに直ちに之れを撤回すべきことを以てせしかども王敢へて聴かざりしかば。普、埃の

背後には非ルヘルム一世てふ野心勃勃たる君主あり。よし議會は如何に頑固なるも。埃太利は如何に覇權に戀々たるも。道の宰相。道の君主。豈に初一念を貫徹せずして已むものならんや。果然。大衝突は議會と政府との間に起れり。衝突は如何なる問題より起りたるか。曰はく軍備擴張問題。是れなり。ビスマルクは宰相の位に就くや。直に案を議會に提出して在來の常備軍を二倍にせんとを要求せり。民黨は例に依りて之れに反對して曰はく。普國の民力疲敝し財源枯渇して斯くの如き大兵を養ふ能はず。且つ在來の兵數を二倍するが如きは寧ろ多きに過ぐじ。されどビスマルクの胸中には一大計畫を藏し。埃國を斃して普國の覇基を開き。終にはナポレオン三世の野心を挫がんと欲せり。然り彼れは

同盟軍は千八百六十四年二月一日大將ランゲルに従つてアイデル河を横ぎり丁抹に侵入せり。丁抹の軍防戰頗る力めたれども衆寡敵する能はず。普、埃の軍は須臾にしてシュレススブルグの内部を占領せり。丁抹王は勢の不可なるを見て一時休戦せんとを請へり。斯くて休戦すると二月餘。其間和を講せんと欲したれども終に成らず。六月に至りて戰は再び開始せられたり。是に於いて普、埃の軍は破竹の勢を以て丁抹軍を破りしかば。丁抹王勢蹙まり又如何ともする能はず。同年十月三十日を以て和を講じ。シュレススブルグ、ホルスタイン及びラウエンブルグの主權を放棄して普埃兩國の爲す所に一任せり。是に於いて普埃は各々委員を出して三公國の政治を處理せしめたり。是れ即ち普、埃が衝突して開戦するに至りたる原因なりき。普魯西の宰相ビスマルクはシュレススブルグ、ホルスタイン、ラウエンブルグの三公國を普國に加へんと主張せり。埃太利は之れに反對してアウグスブルグ公を立て、以て三公國の主と爲さんと主張したり。是を以て兩國の間に非常の葛藤を生じ。將に干戈に訴へんとするの勢ありしも。幸にして事此に至らず。千八百六十五年八月十四日普相ビスマルクは埃太利の全權公使プロメ公と會議して一條約を結べり。此條約に依りて埃太利は償金を得てラウエンブルグの主

斯の大計畫を實行するには先づ軍備を完了して有事の日に備ふるの必要なるを認めたり。されど外交の機密は容易に洩すべからず。彼れもし斯の大計畫を議會に公言せば。敵國忽ち警を傳へて大事空しく水泡に歸せんことを恐れ。敢へて議場に臨んで肝膽を吐露せず。是に於いてか議會は益々政府の眞意を誤解し。兩者の衝突は愈々激烈を加へたり。斯くてビスマルクは議會と争ふと四年の久しきに亘りて。議會は猶頑乎として政府に反對せしかば。普王は終に議會を解散し。憲法の無益有害なるを揚言し。君主擅制が却りて國利民福に適するを主張し。議會を解散すると四回の多きに及べり。是に於いてか國民は驚然としてビスマルクを攻撃し。新聞紙は筆鋒を揃へて彼れの非立憲的行動を非難せり。されどビスマルクの

權を普國に譲り。ホルスタイン及びシュレススブルグは相續者の定まるまで普魯西及び埃太利の管理する所と爲れり。此の條約に従つて普國は九月一日ラウエンブルグを取り。埃將ガブレンツは埃國の全權公使としてキールに入りてホルスタインの政を司せり。普魯西はマントイフェルを全權公使としてフレンスブルグに遣はしシュレススブルグの政を司らしめたり。斯くて普埃の葛藤は一時平穩に歸したれども是れ決して永く持續し得べき平穩に非ず。普相ビスマルクも亦敢へて姑息の繙縫策を以て一時を糊塗するを好まず。普埃の二國は早晚分離せざるべからざるを知りて。寧ろその衝突を激烈ならしめて早く大局の形勢を定めんと欲したり。果然兩國の葛藤は久しからずして再び激烈となれり。普の全權委員マントイフェルがシュレススブルグに來りて政を執るや命を下して。人民がアウグステンブルグ公(本節前段參考)に黨するを嚴禁したり。之れに反して埃太利は成るべく公を援けて普の勢力を殺がんと欲せしを以て。埃の公權委員ガブレンツはホルスタインの人民を懲罰してアウグステンブルグ公に左袒せしめ。終には公を以てシュレススブルグ、ホルスタインの君主と爲さんと欲せり。是に於いて普國は甚だ埃の處置に不満を懷き。千八百六十六年一月二十六日ビスマルクは公狀を埃太利に贈りてホル

頑固剛愎なる。毫も輿論の向背を顧ず。攻撃非難の中に斷乎として。自己の所信を實行せんと決心し。言論の自由を抑制し。出版の権利を束縛し。或は新聞紙の發行を禁止し。或は政客の演説を禁じ。鐵と血とを以て己の目的を達せんと欲せり。時恰もよし普、埃の兩國は臨なくも。戦争を開始して。ビスマルクの計畫を實行するの機は愈々熟せり。

第七 普埃戦争以後のビスマルク 普埃戦争の開始せられたる原因はミュンヘン、ホルスタイン問題なり。該問題の由來。及び普埃が此問題に依りて衝突を來したる所以は。余既に本欄第四編第六章中に説明せり。故に余は復び茲に蛇足を加へざる可し。

ビスマルクの術策とモルトケ將軍の作戰計畫とは着々其の功を奏して埃軍連りに

スタインに於ける埃の政策を非難せしかば。同年二月七日埃の宰相メンストルフは之れに答へて埃太利は飽くまでも從來の政策を變更する能はずと斷言せり。噫是れ危機一髮。兩國の交戦は到底免るゝ能はざるなり。普國は急に兵備に着手し。サクソニー及びシレシヤの城壘を固めたり。埃國も亦直に軍隊をボヘミヤに集め一朝緩急わらば三軍直ちに普の境上に臨むの勢を示したり。日耳曼の列邦も亦各々兵を出して或は普を援け或は埃に與みせり。既に伊太利は普と同盟を結び戦を埃太利に宣せしかば。埃國は南北に敵を受け形勢頗る不利なるに反して。普國の勢は大に加はりぬ。普國も亦伊太利の勦心を迎へんと欲し。約するにヴェニスに埃太利より取りて伊太利に加ふべきを以てせり。

斯くて普埃は將に戦はんとしたれども。歐洲列強の局外中立を守るものは。兩國に干渉して戦を止め協議會を開きて平和に事局を結ばんと欲せり。然るに埃太利は主張して曰はく。若し列國協議會にしてヴェニス分割問題を討議するの意あらず。埃國は斷然協議會を開くを欲せず。ヴェニスが永久埃國の領土たるべきは一點の疑議を容れざる所にして決して列國の干渉を要せず。是を以て列強の干渉も終に交戦を止むるに由なく危機愈々切迫し來りぬ。

敗れ。普軍は凱歌天地を動かして伯林に旋へれり。是に於いてか。普國の人民は始めてビスマルクの深謀遠略の在る所を覺り。驚々たる非難の聲は忽ち變じて噴々たる頌讚の聲と爲りぬ。國民は戰勝の威勢に眩惑して邦家の隆盛を謳歌し社稷の萬歳を連呼して。復た政府の專斷、缺點を咎めず。ビスマルクの剛愎や、傲慢や、不遜や、抑壓や、專制や、盡く國中の忘却する所となれり。是に於いてか勳章は彼れの胸間に耀けり。名譽は彼れの一身に集まれり。彼れは實に頌讚の熾點と爲りしなり。國民は終に四十萬ターレルを彼れに贈りて感謝の意を表せり。(モルトケ及び軍務大臣フォン、ローンも亦各三十萬ターレルを受けたり)噫昨は非立憲的宰相として攻撃の熾點と爲り。今は和世の明宰相として國民の頌讚を受く。古來

千八百六十六年七月七日シユレンス井グに在る普の全權委員マントイフルはホルスタインに侵入し埃の全權委員グブレンツに迫り。軍を率ゐてホルスタインより退去せしめたり。埃太利は普の此の處置を以て埃國を侮辱したるものとなし。檄を聯邦に飛ばして共に普國を討せんことを求む。是に於いて聯邦の埃國を援くるもの甚だ多く皆兵を出して以て普に敵せんと欲せり。されど普國は毫も之れを怖るゝとなく。却りて計謀の熟せるを喜び。聯邦議會に於ける普の委員に命じて、普魯西は最早聯邦議會の存在を認めず新に憲法を制定して。埃太利を日耳曼より排除すべしと公言せしめたり。

第二節 開戦の眞理由

シユレンス井グ、ホルスタイン事件は偶々普、埃に與ふるに開戦の機會と名義とを以てしたり。されど該事件は決して開戦の眞理由に非ず。開戦の原因は決して一朝一夕にして生じたるに非ず。フリード

丈夫の事柄を蓋ふて定まる。區々たる俗人の毀譽夫れ終に意に介するに足らざるなり。

普國戰勝の結果は如何。曰はく埃太利は日耳曼聯邦以外に排斥せられたり。曰はくマイン河北の諸邦は普國を盟主として北日耳曼聯邦を組成せり。曰はく南部日耳曼諸邦は別に一團を爲して獨立せり。曰はく北日耳曼帝國議會と聯邦參議院とは成立し普王は議院の議長と爲れり。而して日耳曼帝國は茲に立憲政体と爲れり。(本欄第四編第四章參考)。蓋しビスマルクは國內を統一し人民をして王室に歸服せしむるには、國民の渴望する憲法を制定するの必要なるを認め、自ら憲法を草定したるなり。されど彼れは思想は猶依然として君主萬能主義に司配せられたりき。

リヒ大王が埃太利と頗頗して北部日耳曼に雄視するに至りしの日より。兩國が兩立する能はざるの勢は業に既に明なりき。普が日耳曼の覇たるべきか。埃が聯邦の主たるべきか。此の問題は數十年の間列邦人民の胸裏に横はれる一大疑問にして。抑も亦普、埃が開戦したる眞理由なり眞原因なり。然り而して千八百四十八九年の際に至りて人民は此の問題を決議して以て鞏固なる日耳曼聯邦を組成するの必要を感ずると愈々切なりき。時に埃國は既に老朽して勢焰甚だ揚がらず。之に反して普國は新興の勢勃々として國運日に隆盛に赴くのみならず。その人民は頗る愛國の熱情に富み。國民の結合鞏固なると決して普國の比に非ず。されば苟も識見あるものは。埃太利の爲す有るに足らざるを知り。普國を擁して盟主と爲し。以て鞏固なる聯邦を組成し。民間多年の輿論たる國民的統一を完うせんとを希望せり。此の時に當りて普國には名相ビスマルクあり。勇將モルトケあり。兵精銳にして軍備整然たり。埃太利を凌駕して覇圖を樹つると決して難きにあらず。普國は此の狀勢を察し機に乗じて以て速に埃太利を聯邦より除かんと欲したるなり。叙して茲に至れば兩國交戦の理由は既に明ならん。余は更に實戰の狀況を記述せん

第八 普、佛戰爭とビスマルク

普魯西が埃太利に勝つて。覇を北歐に稱するや。佛帝ナポレオン三世は頗るその權勢を忌み。耽々として乘すべきの機を待てり。千八百六十七年兩國の危機はルークセンブルグ問題に依りて愈々切迫し來れり。蓋しルークセンブルグは和蘭王が日耳曼より受けたる私領にして其の住民は多く日耳曼なりき。而して此地には前きに普國が築きたる堅牢なる城壘ありて普王常に之れに屯在せり。故にナポレオン三世は一朝事あるの日にルークセンブルグ城の兵が佛國の憂を爲さんと恐れ。和蘭王に就いて之れを購はんと欲せり。和蘭王は一たび之れを承諾したれども。普國の勢日に盛にして。加ふるに南部日耳曼諸邦も之れに應援するの勢あるを視て。寧ろ佛帝に背くも普國の歡

第三節 戰爭の狀況

千八百六十六年六月十六日普軍進んでハノーバー、ヘッセン、カッセル、サクソニーに入る。次いで普軍は三道より進んでボヘミアに入る。七月二日普王ヰルヘルムは來りて三道の軍を合せ。親ら之を將ひて埃軍と雄雄を決せん。翌日普軍大にケーニヒグレートツに戦つて(或はサドワの戦とも稱す)埃軍を破り。次いで七月十五日再び大に埃太利の軍を破り。將に進んで維納に入らんとす。此の時に當りて。普魯西の別軍は中部日耳曼に於いて聯邦の埃太利に黨するものを討つて又大勝を得たり。六月二十九日ハノーバーの王は全軍を以て普軍に降りしかば。普軍は更に進んで聯邦の軍を破り七月十六日終にフランクフルトに入れり。斯くて埃太利は内外共に利あらず。到底普軍の抗すべからざるを知り。敵軍未だ維納に迫らざるに先ちて速く和を講せんと欲し。七月二十六日を以て媾和條約の談判を開始せり。仍て聯邦も亦兵を收めて談判の結果を待てり。

心を失はざらんことを欲し。終に断然ナポレオンの要求を拒絶せり。時にビスマルクは佛蘭西を凌駕して普國をして歐洲大陸に覇たらしめんと欲せしかば。和蘭王を助けてナポレオンの要求を排斥せしめたり。是に於いて佛國は朝野騒然として普の不遜を憤り平和將に破裂せんとせり。されどナポレオンは佛軍の力到底奥の精兵に當るに足らざるを知れり。且つ南部日耳曼も亦普國に黨して緩急相援ふの約を結べるを聞き。暫く戰を避けて更に時機の來るを俟たんと欲し。列國の調停に依りて葛藤を解かんと決心せり。是に於いて英、佛、魯、奥、普、和、伯の委員は倫敦に會し。ルークセンブルグは舊に依りて日耳曼關稅同盟の中に加はるべきも。普國は該城より兵隊を撤すべきことを議決せり。ビスマルクは覇氣満々

第四節 プラーム條約○奧太利、日耳曼聯邦より排除せらる○「北日耳曼聯邦」の成立

千八百六十六年八月二十三日プラーム條約は普、奥の間に成れり。此の條約に依りて奧太利は全然日耳曼より排除せられ。二千萬ターレの償金を普國に拂ひ。シュレスヴィグ、ホルスタインの主權を放棄したり。是に於いてパルリア、フェルテンブルヒ、バーデン、ヘッセン、ダルムシュタット、サクソニー等も相踵いで和を講じ。パルリア及びヘッセンダルムシュタットは各々地を割きて普國に與へ。フェルテンブルヒ及びバーデンは普魯西と秘密條約を結び一朝事あるの時には兩國の軍を普王の全權に委して攻守を共にすべきことを約せり。普魯西は右の外ハノーバー、ヘッセンカッセル、ナッサウ、フランクフルトを己れの領と爲し。戰勝の餘威赫々として四隣を壓するの勢あり。八月四日普王腓ルヘルム凱旋して柏林に入るや。滿都の人民が狂喜して之れを迎へ。みな祖國の萬々歳を謳歌したり。斯くて奧太利は全く分離して復た日耳曼の一部に非ず。是に於いてメーン河北の諸邦は普國を以て盟主と爲し、「北日耳曼聯邦」は第一回

として佛蘭西を斃すの意に切なりしかば。素より斯の議決に従ふを好まざりしかども。普王腓ルヘルム一世は戰爭の蒼生を苦しむるを痛み。歩を譲りて列國の議決に従へり。斯くて普佛は戰を開くに至らずして平和を維持するを得たれども。是れ唯一時の平和のみ、ナポレオンの野心と、ビスマルクの霸圖とは豈に衝突せずして止むべけんや。今や兩國の平和は恰も一髮を以て萬斤を繋ぐの御りなり。

倫敦會議の後ビスマルクは汲々として日耳曼聯邦の團結を固うするの策を講じ。千八百六十八年日耳曼關稅同盟會議を柏林に開きたり。蓋し此の會議は名は通商貿易の爲めにすと雖も。その實は聯邦の結合を鞏固にするの一手段に過ぎざりしなり。

の議會を柏林に開きて憲法制定の事を議せり。メーン河南の聯邦は此の時に至りても猶「北部日耳曼聯邦」に加はらずして。各々獨立を保ちたり。されば日耳曼諸邦が盡く聯邦に加したるは普佛戰爭以後に在り、

第七章 普佛戰爭 第一節 戰の遠因

普魯西は奧太利を凌駕して日耳曼聯邦の牛耳を執り。其の國力優に歐洲列強の間に伍して一方に雄視するを得るなり。是に於いて佛蘭西は頗る普國の權勢を嫉み眈々として之れを擠排するの機會を窺へり。普奥が將にプラーム條約を結ばんとするや。佛帝ナポレオン三世は普國に要求して曰く。普奥條約にして成らば日耳曼の形勢は一變し普國は特に益々強大ならん。故に普は佛蘭西に割讓するにライン河西の一地を以てすべし。其の土地割讓を求むる理由の曖昧にして牽強附會なるや言はずして明かなり。されば普魯西は斷乎として斯くの如き不法の要求を拒絶したり。然るにナポレオン三世は猶全く前言を空うするを好まず。更に手段を換へて和蘭王よりルークセンブルヒを購はんと欲せり。ルークセンブルヒは曩きに日

ビスマルクは此の時に於いても猶議會と
争へり。自由黨の代議士は常にビスマル
クの處置を非難し攻撃の聲囂々たり。さ
れど鉄血宰相の鉄血主義は舊に依りて舊
の如し。萬非難千攻撃ありと雖も彼れは
牢乎として動かざると巖石の如し。彼れ
は或る點に於いて頗る佛のリセリユーに
似たり。リセリユーが佛帝ルイナ三世の
爲めに全力を盡くせるが如くビスマルク
はオムヘルム一世の爲めに全幅の精神を
傾注せり。君主萬能主義を固執して社稷
の爲めに萬難に當るの精神に至りては前
者、後者酷に似たるものなりき。議會は
ビスマルクを攻撃すれば。ビスマルクは
冷然として答へて曰はく、國家の大事を
行ふ。迅速を尙ふ。公等の區々たる協議
を俟つに違わらずと。曰はく。外交の事
は秘密を守らざるべからず。公等の容喙

耳曼聯邦に屬したる地なり。普魯西は又此の買収を不可と爲し佛蘭
西に向つて抗議を提出せり。是に於いて普佛の葛藤は漸く激しく平
和將に破れんとせり。されど此の時は猶戰を交ゆるに至らずして
兩國は倫敦に協議會を開き。ルークセンブルグを日耳曼より分離す
ると同時に何れの國にも屬せざる中立地と爲し。歐洲列國は此の中
立を擔保して。以て一時普佛の交戦を防遏するを得たり。されど是
れ唯一時を糊塗するの塗抹策たるに過ぎず。佛帝は依然として普の
強勢を嫉み普も亦佛を凌駕して覇を歐洲に稱するの意あり。その衝
突は早晚免るゝ能はざる所なり。果然兩國に開戦の名義口實を與ふ
るの機會は來れり。西班牙王位相續の問題之れなり。されば王位相
續問題を以て普佛交戦の眞理由と思惟するは猶シレンスブルグ、ホルス
タイン事件を以て普佛戰爭の眞原因と爲すが如く。誤謬の甚しきも
のたるや言はずして明なり。西班牙王位相續問題は唯之れ表面的口
實にして。兩國開戦の遠因は、普、佛孰れか歐洲に覇たるべきかの
問題即ち之れなり。

第二節 開戦の名義○西班牙王位相續問 題

を許さずと嗚呼彼れは。實に鐵血宰相の
名を完うしたるものなり。
普、佛兩國は相競ふて軍備に汲々たり。
佛の間諜はライン河畔に出沒してそ地の
形を視察し。普の測量者はアルサス、ロ
ーレンに入りて頻りに山河道路を調査
し。各々事あるの日に備へたり。佛蘭西
にては新式の銃砲を鑄造して盡く之れを
軍隊に下附し。一朝命を傳ふれば四十五
萬の大兵を集むるを得べし。局外より之
れを見れば佛の勢力は遙に普に優るの觀
ありき。されど普の軍隊はシュアルンホ
ルスト(第一項参照)計畫に基きて四十
年來鍛練したる所なり。而して現役の兵
士は四十五萬の多きに達せり。之れを佛
の豫備。後備を合せて四十五萬なるに比
すれば。豈に日を同うして談るべけん
や。兩國の情勢既に斯くの如し。危機賈

千八百七十年七月西班牙の假政府(是れより先き西班牙の人民は女
皇イサベルの弊政を惡みて之れを逐ひ假政府を置いて一時政を司ら
しめたり。)は普魯西の皇族レオポルドを迎へて西班牙王と爲さんと
欲す。レオポルドは其の請を納れ。普王の認許を得て。將に西班牙
に入りて位に即かんばす。此の時に當りて佛帝ナポレオン三世は隨
る人望を失ひ。人民が帝の對普魯西策の屢々失敗せるを非難するの
聲漸く響し。帝は如何にもして普國を凌駕し輿望の衰へたるを回復
せんと欲せり。レオポルドが入りて西班牙に王たらんとするや。佛
帝は以て奇貨居くべしと爲し。直ちに聲言して曰はく。普國の皇族
が西班牙の王位に即くは之れ歐洲列國の均勢を破るものなれば。佛
國は斷然是れに反對す。佛蘭西の立法議會も亦帝の意を贊同し兵
力に訴ふるも普國を服従せしむべきとを論せしかば。人民は翁然と
して之れに應じ。他くまで佛國の要求を貫徹せんと欲せり。是に於
いてレオポルドは事態の頗る穩かならざるを見て。寧ろ西班牙王の
位を棄つるも平和を保維せんとを希望し。七月十二日終に即位を拒
絶せり。されどナポレオン三世は猶之れに慊たらず。普王に要求す
るに。自今以後「ホーヘンツォレルン」家(普魯西の王統)は決し
て西班牙の王位に即くと無かるべきを以てせり。時に普王はエムス

に一變の間に迫れり。ナポレオン三世は頗る野心に富めり。彼れはシーザーの遺風を慕ひナポレオン一世の雄略を學べり。されど彼れの膽氣や彼れの材略や彼れの勇氣や。決してシーザー、ナポレオン一世に比すべくも非ざりき。彼れは大膽なるが如くにして小膽なり。彼れは強ひて雄才大略を衒へども其實は爾かく才略に富まず。一たび「クローデター」に依りて皇帝の位に上りしかども。其後人心漸く己れを離るゝを見て。事を外國に構へて暫らく國民の非難を避けんを試みたり。されどナポレオンは決して普と戰ふを好みしに非ず。國內の事情止むを得ずして強ひて戰はんと欲したるに過ぎざりき。彼れ既にビスマルク、モルトケの恐るべきを知れり。普軍の精銳なるを知れり。一朝干戈を動かすも勝

に在りしかば。佛の公使ベチテッテはエムスに來りて王に謁し。佛帝の要求を齎らして王の同意を求む。されど普王は斯くの如き不法の要求に應ずる能はず。佛公使が如何に論議するも王は故らに知らざる爲して斷然その要求を拒絶し。翌日伯林に打電して危機の切迫せるを報じ。王も亦直ちに伯林に向つて出發し。同月十五日ブランデンブルヒに着して。太子、ビスマルク伯、モルトケ伯、ローン伯等に會し。直ちに北日耳曼聯邦に激して兵を徵集せり。翌日聯邦參議院（次節參照）は全會一致して開戰の處置に同意し。十九日王は聯邦議會（次節參照）に臨み壯嚴沈痛なる演説を以て開戰の止むを得ざるを明にせり。此日佛國より開戰の通告到る。是に於いて普、佛は愈々干戈の間に見えざるべからず。

第三節 交戰の狀況

算未だ容易に期すべからず。故に彼れは徒らに虚勢を張りて容易に戰はず。幾度びか遂巡躊躇せり。ビスマルクの炯眼は夙にナポレオンの心情を洞察し。其の與みし易きを知れり。

始めナポレオン三世は想へらく。余若し兵を起さば。南部日耳曼はよし余に與みせざるも。其の局外に立ちて中立を守るや必せりと然れども之れ甚だ日耳曼の事情に通せるものなり。南部日耳曼は此の時既に國民的統一の思想に動かされ普國と進退を與にして日耳曼の統合を完うせんと欲せり。況んや普魯西は曩きにバーデン、

然りナポレオンは戰を避けたり。されど事情は終に平和を維持するを許さざりき。而して開戰の導火線は實に西班牙王位相續問題なりき。西班牙王位相續問題の何ものたるやは既に本欄に詳説せり。故に茲に贅せず。佛帝は此の問題に關して普王に要求する所あり公使を遣はして普王に見へしめたり。然るに普王は佛の要求を不法として公使の言に耳を傾けざりしかば。（本欄第四編第七章參照）佛國の人民は以て佛國を侮辱したるものと爲し。當然として開戰の必要を呼號せり。是に於いてナポレ

ルテンブルヒ等と密約を結びて攻守を與にするを盟へるに於いてを。果然南部日耳曼諸邦は皆兵隊を徵集し。七月二十日普王に通告するに軍隊の編成既に成り普將の來りて之れを統轄するを俟てるを以てせり。普王は乃ち太子を遣はして南部日耳曼の軍に將たらしめたり。普魯西は既に南北兩日耳曼の軍を合せて。其數百餘萬の多きに上れり。普王自ら元帥たり。將軍モルトケ之れに副たり。全軍を分ちて三と爲し。第一軍は將軍スタインメツツを以て將となし。第二軍は王子フリードリヒ、カルルを以て將となし。第三軍は皇太子を以て將となし。部署堂々として佛蘭西に向へり。八月初旬第三軍はツァイツェンブルヒ及びツュルヌに戰ひ。第一軍第二軍はサアールブルケンに戰つて。みな佛軍を破れり。時に佛將バゼーンは大軍を將りてメツツに在り。將にシャロンに之きて佛將マクマホンの軍と合せんとすされど普軍は來りて其の道を遮りしかば。終にシャロンに到る能はずして空しくメツツに止まれり。普魯西の第一軍及び第二軍は來りてメツツを圍み。更に第三軍を分遣して佛將マクマホンを撃たしむ。マクマホンはメツツを援て圍を解かんと欲したれども。八月三十日普軍とビエーモントに戰つて利あらざりしかば。終にメツツ

オン三世は輿論に抗する能はずして終に戦を宣するの止むを得ざるに至りぬ。交戦の状況は余既に本欄に記述せり。故に茲に蛇足を添へず。

セダンの一戦佛軍大敗するや。普軍は長驅して直ちに巴里を圍み。普王井ルヘルムは有名なるヴェルサイユの宮殿に陣せり。佛軍巴里を要守すると五ヶ月にして糧盡き力疲れ。終に降を普軍に請へり。普國は媾和の條件として。五十億法の償金とアルサス、ローレン及びメツツを佛國より取れり。

ビスマルクは戦勝の功を帯びて普國に歸れり。國民は歡呼して彼れを迎へたり。巨萬の財寶は彼れに寄贈せられたり。日耳曼皇帝(普王井ルヘルム一世前)にヴェルサイユ宮に於いて日耳曼皇帝の位に即けり。本欄を參考せよ。は彼れに興

を援ふ能はず。既にして九月十五日普、佛各々大軍を催うして。セダンの近傍に戦ふ。戦未だ半ならざるに佛將マクマホン大に傷き。將軍井ンブフエンをして己れに代らしめたり。斯くて佛軍は奮闘する力めたれども諸軍皆敗れ退きてセダンに入れり。時にナポレオン三世セダンに在り四面重圍の中に陥つて又如何ともする能はず。終に戈を倒にして降を普軍に乞ひ。十六日武器兵馬を併せて盡く普軍に渡せり。此の時セダンに在るもの。兵卒八萬三千人。大將五十人。士官五千。盡く捕虜と爲れり。普王はナポレオン三世に給するに井ルヘルムシーへ城を以てして是れに居らしめ。以て普國の命を待たしめたる。

佛國の人民はナポレオンがセダンに破れて敵の虜と爲れるを聞き。共和政治を組織し所謂「國防政府」なるものを假設し。以て善後の策を講せり。時に普軍は和を講ずるを欲せざるに非ざりしかども。所謂「國防政府」なるものは佛蘭西全体を代表するの権限ありや否やは甚はだ疑はしきのみならず。佛人は猶容易に普國の媾和條件に同意するの勢無かりしかば。普の第三及び第四軍は直ちに巴里に向つて進み。十四日を経て全く巴里を圍めり。時に佛の傑士ガンベツタなる者亦圍中に在り。如何にもして普軍を破り佛國の汚辱を救は

ふに漠大の土地を以てせり。彼れは無上の勳章を得たり。彼れの權勢は赫々として太陽の天に輝くが如くなりき。況んや皇帝井ルヘルムは此の時既に七十を越へたるに於いてをや。日耳曼の政權全く鏡血宰相の掌中に歸せしなり。

第九 普佛戦後のビスマルク

ビスマルクが多年經營せる日耳曼統一の事跡に成就して。帝國は茲に建設せられたり。彼れが功成り身退くの時既に到れるが如し。されど守成の難きは創業の難きが如し。況んや日耳曼帝國僅に成りてて其基礎未だ鞏固ならざるに於てをや。ビスマルクが「歸去來」を歌ふて田園に歸るの日は未だ來らざるなり。

普佛戦後鏡血宰相が經營施設せる所は何事なりしか。曰はく。三國同盟の組成なり。曰はく。加特力教徒の抑制なり。曰

んと欲し。密かに輕氣球に乗じて圍を脱し。トールムに至りて同志の士と相會し。檄を四方に飛ばして民兵を招集し。百方を盡くして普軍と戦ひしかども。兵に訓練無く武器も亦備はらず。毎戦普軍に破られて勢日に盛まれり。斯くて九月二十七日ストラスブルヒ陥り。十月二十七日メツツも亦陥り。將軍バゼーンは兵卒十七萬五千。大將三人。士官六千人と與に普軍に降れり。時にガムベツタは大軍をロイルに集めて巴里を救はんと欲し。普軍とオルレアンに戦つて大敗し。終に其の目的を達する能はざりき。その後ガンベツタの軍は二に分れ將軍ジャンジは一軍を率む。將軍フエドヘルプは他の一軍を率めて。死力を盡して處々に勇戦したれども。毫も功を奏せず。終には兵馬疲れ武器損じて殆んど戦に堪へざるに到りぬ。是れと同時に佛將ボルバキは十五萬の大兵を率めて東南に向ひ將に進んでアルサスを過ぎ南部日耳曼を侵さんとせり。されど普將ヴェルデルは募兵を以て之れをヘリコールに防ぎその進路を遮り。その後佛將クリンヤントが來りてボルバキに代はるや。普將マントエツフルは撃つて之れを破りしかば。佛軍は路を轉じて端西に逃れ僅に普軍の銳鋒を避くるを得たり。此の時に當りて巴里の軍隊は百方術を盡くして普軍の圍を潰さんと欲したれども。終に目的を達す

はく。社會政策の實施なり。是れ余が既に本欄に説きし所なり。諸君乞ふ之れを參照せよ。

鏡血宰相は普佛戰爭以後に於いても猶軍備の縮小に反對せり。否彼れは國力の堪ふる限りは軍備を擴張せんことを主張したり。普國既にナポレオン三世に勝ちて日耳曼の統一を完うせり。鏡血宰相敢へて更に事を外國に構へて他の領土を侵略するの意無しと雖ども。帝國の四境を防禦し佛人の敵愾に備ふるには猶軍備の擴張せざるべからざるを認めたり。蓋し彼れの意に謂へらく。日耳曼は四邊強國と界して。嶮山海洋の以て之れを隔つる無し。一朝事あれば敵軍直ちに邊境を超ふるを得べし。故に國家の安固を完うするには勢大軍を置きて不時の變に備へざるべからずと。千八百八十八年ビスマルク

る能はず。百計に盡きてまた奈何ともする能はず。是に於いてか「國防政府」は和を講ずるの止むを得ざるを知り。其の意を普軍に致し。千八百七十一年一月二十八日巴里の城門を開きて普軍に降り三週間の休戦を約して。其の間に媾和條約を訂結せんと欲せり。

第四節 フランクフルト媾和條約

巴里既に降り。ビスマルクは二月二十六日を以て佛蘭西の代表者たるチェール及びフーブルと媾和條約を結べり。此假條約に依りて佛國はアルサス(但しヘルフォルトを除く)及びローレン(メツ及びチオンヴィルを包含す)を普國に割き。且つ五百億フランの償金を拂ふべきを約せり。三月一日普軍の一部は進んで巴里に入り。その一部を占領せしかども。ポルドーの佛國議會が彼の假條約を承認するに及んで。また軍を引いて廊外に退けり。次いで同月二十七日日耳曼及び佛蘭西の委員は更に本條約を結ばんが爲めに。プラッセルに會議したれども。兩國の委員は意見相合はずして議久しく決せず。日耳曼の人心は頗る激昂して復た戦はんとする勢を示せり。是に於てビスマルクは佛の委員フーブルとフランクフルトに會し五月十日を以て愈々本條約を議定せり。後日耳曼及び佛蘭西

クは日耳曼帝國議會に於いて有名なる軍備擴張演説を爲せり。其の大意に曰はく。

日耳曼國民は今日に於いて力の及ぶ限り兵力を強うせざるべからず。惟ふに我が國は歐洲の中央に在りて。一方は海に面するも他の三面は直ちに強國と境を接せり。西には佛蘭西てふ懷悍戰を好むの國民あり。東には魯西亞てふ蠶食吞噬を逞うするの國民あり。是れ我が國が兵備を固うせざるべからざる所以なり。余は敢へて戰を好み難を外に構ふる者に非ず。余は今後は他くまでも平和を保たんとを希望す。而して平和を保つのは。軍備を完うして列強の覬覦を防ぐに在るのみ。苟も日耳曼にして軍備を完うせば。敵國豈に輕しく戰を挑まんや。吾人は神を敬

の議會は各々此の條約を批准せり。而してフランクフルト條約は六体に於いては前きの假條約と異なる所無かりき。

第八章 日耳曼の統一〇日耳曼帝國 憲法の制度

余は是より奥太利が日耳曼より分離し。北部日耳曼が普國を盟主として聯邦を組成せる時代に溯りて日耳曼統一の發送順序を記述せん。千八百六十七年二月廿四日「北日耳曼聯邦」が第一回の議會を伯林に開きて憲法制定の事を議したるは余が本篇第六章第四節の末段に記せし所なり。斯くて制定せられたる憲法は同年七月一日より實施せられたり。此の憲法に依れば普王を以て聯邦の統領と爲し。聯邦議會と聯邦參議院とを置きて聯邦全体に關する事項を議定す。而して議會は人民の撰舉したる代議士を以て組織し。參議院は各邦政府の撰出したる委員を以て成立す。蓋し此の憲法は亂雜にして毫も組織無く秩序無かりし從來の状態に幾多の改良を興へて聯邦の組織秩序を整然たらしめたるや疑無しと雖も。而かも是れ決して聯邦の結合聯絡を鞏固完全たらしめたるものに非ず。されば聯邦の組織

す。天下畏るべきものは只一の神あるのみ。吾人が平和を維持せんと欲するは神意に悖らざらんが爲めなり。軍備擴張は實に神の爲めに世界の平和を維持するの途なり。

ビスマルクは性粗暴落なりしかども轉敬虔の念に厚し。神を敬し天道を重んずるの點に於いては頗る英のクロムウェルに似たるものありき。彼れの軍備擴張演説は實に其の赤誠を披瀝したるものなり。

ビスマルク累生の勲業中最も大なるものは日耳曼帝國の統一にして。彼れの最も長ずる所は外交の術策なり。彼れは内治の施設に於いては甚だ人に卓越したる所無かりき。殊に出版の自由を抑制したるが如き。加特力教徒を鎮制したるが如きは。寧ろ彼の失策に歸せざるべからず。

は更に一段の進歩を爲さざるべからざるは萬人の認めたる所なり。有名なる國民自由黨は即ち聯邦組織を改善し。南部日耳曼をも聯邦の中に加へんとを希望せり(本篇第六章第四節末段參照)千八百六十八年五月日耳曼全國(南北日耳曼)の關稅會議を柏林に開くや。パーデン(南日耳曼の一邦)は聯邦に加はらんとを希望したれども其他の南部諸邦は聯邦加盟に反對したるを以て南北兩部合同の議遂に調はずして止みぬ。此の時に當りノイエルテンベルヒ(南部)には民主黨あり。パプリア(南部)には羅馬加特力を奉ずるものあり。前者は普國が君主擅制に傾けるを見て其の下に立つを肯んせず。後者は「プロテスタント」を好まざるを以て北部日耳曼と合同するを欲せざりき。是れ南北兩部を併合する困難なる所以なりき。然れども千有餘年の間日耳曼てふ同一名稱の下に建國せる邦國は幾多の歴史の觀念を同らし幾多の地理的狀態を同うす。一は北に在り他は南に在るの故を以て久しく分立するの必要無きなり。果然南北を合せて一九と爲すの時機は來れり。何ぞや。曰はく。普佛戰爭是れなり。佛軍來りて日耳曼の境に臨むや。北部と地理的歴史的觀念を同うせる南部諸邦は皆起つて北部を援け以て空前の大勝利を博せり。佛軍既に敗れ普軍巴里に入るや。南部は斷然日耳曼聯邦

第十 ビスマルクの掛冠

古來高名の家は鬼必ず之れを窺ふ。ビスマルク位人臣を極め。勲業一世に高うして。權威殆んど君主を凌げり。噫彼れも亦鬼の窺ふ所と爲らざるべからざりしか。彼れが勇退するの機は既に來りぬ。千八百八十八年老帝非ルヘルム一世死し。其の孫繼いで位に即く。之れを非ルヘルム第二世とす。非ルヘルム二世年少うして氣頗る鋭し。ビスマルク樞機を握りて己れの爲す所に干渉するを見て。心轉た平なる能はず。ビスマルクも亦幼帝の意を察して心頗る喜ばず。終に意を決して辭表を奉呈せり。帝直ちに之れを許し其の職を解けり。然りビスマルクは終に冠を掛けたり。されど彼れの位を去りしや。決して英のツールゼーのヘンリー八世に於けるが如く

に加入せんと欲し十月(千八百七十年)委員を巴里ツエルサイエ宮に遣はし聯邦加盟の事を議せしむ。時に普軍及び日耳曼聯邦の大本營はツエルサイエ宮に在り。直ちに南部諸邦の議を納れて聯邦加盟の事を承諾し。十一月十五日にはヘッセン及びバーデンと。同月二十三日にはパプリアと。同月二十九日には非ユルテンベルヒと。各々聯邦加入の條約を結べり。其後北部日耳曼聯邦議會及び南部日耳曼議會は共に此の條約を批准したりしかば。南北兩部は茲に愈々合同し。北日耳曼聯邦の名を廢して日耳曼聯邦を改めたり。全年十二月四日パプリア王ルドルフ二世は聯邦諸國及び自治市に通牒して。聯邦の統領に皇帝の號を附せんとを謀れり。聯邦及び自治市は皆此の議に賛成したりしかば。千八百七十一年一月十八日普王非ルヘルムは巴里のツエルサイエ宮に於いて日耳曼皇帝の位に即きぬ。普佛戰爭漸く局を結び。巴里陥り。休戰の約成るに及び日耳曼皇帝非ルヘルムは三月七日を以てツエルサイエ宮を發し。同月十七日柏林に還り。四日を経て。日耳曼新帝國の第一回議會を柏林に開けり。議會は前に北日耳曼聯邦の爲めに定めたる憲法を改正して新帝國に適當するの憲法を定むるの必要を認め。第一に憲法制定に着手し大略一ヶ月にして成就せり。此の新憲法に依りて。日耳曼帝國

ならざりき。ウールゼーの晩年や位剝がれ職奪はれ、楚囚の辱を受けて失意落膽の中に悲哀の餘命を送れり。ビスマルクに至りては則ち國民の輿望を荷ひ。公爵の顯榮を負ひ。七十五歳の高齡に達して。勇退高踏せり。其の領地や大に。其の財や饒かに。悠悠として閑地に就く。功成り名立ちて而して骸骨を乞ふこと彼れが如くんば。又何の遺憾かわらん。噫彼れの生涯は光榮の生涯なり。名譽の生涯なり。

幼帝血氣の盛なるに乗じて一朝老宰相を斥けたれども。老相の勳功治績は忘れんと欲するも忘るゝ能はざるなり。帝豈に彼れを思ひ彼れを慕はざるを得んや。果せる哉。帝は千八百九十四年一月二十六日ビスマルクを宮廷に召して手を握つて談笑し。兩者の間に蟠まりし猜疑の念は

は二十五邦及び三自治市を包含したり。而して帝國全体に關する事項は帝國政府の管轄する所なれども。一邦若しくは一自治市に關して他に影響せざる事項は列邦及び自治市に於いて自由に獨裁するの權利を有したり。次に立法權は聯邦參議院及び帝國議會に屬し。行政權は皇帝に屬したり。皇帝は宣戰媾和の權を有し外國と同盟を結び條約を締結するの權利あり。而して皇帝を補弼して責任を負ひ聯邦參議院の議長たる者は總理大臣にして。總理大臣は常に外務大臣を兼ねるものとす。

以上余は日耳曼新帝國の成立及び帝國憲法の制定を記述し。帝國組織の梗概を明にしたり。余は次章に於いて日耳曼帝國最近の狀勢を略して以て本篇を終らん。

第九章 日耳曼帝國最近の狀勢

第一節 ビスマルクの外交の伯林會議

日耳曼帝國外交の局に當りて。縱橫敏腕を振ひし者はビスマルクなり。彼れは普佛戰爭の後は専ら歐洲の平和を維持するを力めたるものゝ如し。彼れは佛人が敵愾の氣頗る盛にして或は再び獨逸に敵せんとを恐れ。奧太利及び伊太利と親しんで所謂三國同盟を組織し。

今や釋然として氷解し。復た肺肝相照すを得たり。時にビ公歳既に七十八。氣力復た時昔の如くならざりしかば。敢へて再び宰相の職に就かざりしかども。爾來屢々王宮に伺候して常に帝を輔佐擁護せり。

千八百九十四年四月一日 ビスマルク七十九回の誕生日に當れり。帝書を賜ふて之れを祝し。且つ日耳曼帝國が公に對する感謝の表章として鋼鐵の甲冑を賜はれり。此の日日耳曼全國より公の佳節を祝して財器を寄贈したるもの積んで山を爲し。國中の大都名邑は皆祝筵を開きて公の萬々歳を祝せり。上は萬乘の天子に師父と爲り。下は百萬の蒼生に愛慕せらるゝとビスマルクの如きもの古來果して幾人か有る。噫、始と善くし終を全うする彼れが如きは實に丈夫の光榮なり。

更に東、魯西亞の歡心を得て以て己れの後援と爲せり。

伯林會議は日耳曼の外交と直接の關係なし。只魯土戰爭の結果は偶然伯林に於いて列國の會議を開き。ビスマルクを推して議長と爲したるに過ぎず。其の會議の結果に至りても獨逸に影響する所無かりき。故に余は此の會議の起源及び決議等を茲に説くの必要を見ず。是れ寧ろ魯國若しくは土耳其の歴史に詳説すべき事項なり。されば余に唯伯林會議がビ公を議長として千八百七十八年六月十三日より翌月十三日に至るまで開會せられたるを一言するのみ。

第二節 普國政府と羅馬教會との争

日耳曼帝國統一の後。ビスマルクは羅馬加特力教會を以て帝國の統一を妨ぐるものとなし。成るべく其の勢力を殺ぐの策を講せり。千八百七十二年普國々會は一法律を制定して「ゼシエト」派(羅馬教の一派)の徒を日耳曼以外に追放し。翌年普國の教務大臣は議會の協賛を経て幾多の條例を發布し頗る羅馬教會の權力を殺滅せり。此等の條例は五月に於いて皇帝の認許を得世に公布せられたるの故を以て世呼んで五月條例と稱せり。此の條例の規定したる所は。(一)凡べて僧職に従事する者は政府の認可を受くべきと。(二)羅馬加特力

第十一 ビスマルクの私生涯

余は前數項に於いてビスマルクの公生涯を見たり。稿を終るに臨み。更に彼の私生涯を一見せしめよ。

ビスマルクが議會に立ちて叱咤呼號し。列國の使臣と談論し。政客に接して國事を論議するに當りてや。舉動傲慢、辭色激昂、人をして悚然として恐れしむるものありき。されど彼は必ずしも爾かく恐るべきの人に非ざりき。彼は質朴にして率直なり。其の意氣の淡々として愛すべき小兒の如きあり。故に彼の妻子は彼れを愛し彼れを親しみ。一家團樂して和氣常に霑然たりき。されど世人は多く彼の真相を知らず偏に是れを畏怖して相親交するもの甚だ罕なりき。ビスマルクも亦尊大自ら持し曾て人に下つて交を求めざりしなり。

第三節 社會黨

の倍倍たらんと欲する者は日耳曼の大學に修學すべきと。(三)羅馬加特力の小學校は政府の監督を受くべきと。の三ヶ條なりき。然るに羅馬加特力教會は五月條例を蔑視して毫も之れに従はざりしかば。政府は頑強なる僧侶を捕へて獄に下し。百方力を盡くして條例を勵行せんと欲したれども。僧侶の頑固なる依然として舊狀を改めず。是に於いて政府と羅馬教會との衝突は日耳曼の人心をして頗る洶々たらしめたり。帝國議會の代議士にして羅馬教徒たるものは大にビスマルクの政策を非難し。嘗に教會に關する政府の法案に反對せるのみならず。總べての政府案に反對し。以てビスマルクを困しめんと欲したり。されどビスマルクは國民自由黨として大政黨の味方を有したるを以て。羅馬教徒の反對にも拘はらず。政府案は大抵議會を通過して。ビスマルクの政策は着々として實行せられたり。

獨逸の近世史に重大なる一現象は社會黨の勃興なり。されど余は茲に社會黨の歴史、主義等を細説するの餘白を有せず。讀者もして社會主義の何ものたるかを明にし社會黨の如何なる運動を爲せるかを知らんと欲せば請ふ余が筆に成れる「日本現時之社會間附近世社會主義論」てふ一書を參考せよ。

ビスマルク平素の行狀は如何。彼れは曾て色に耽り行を汚がせると無し。彼れは能く神を敬し天を畏れたり。されど彼れは性來粗放磊落なりしを以て其の生活は決して規則的秩序的なる能はざりき。彼れは一日に一食するのみ。而も一食の量の多きは以て五人の食に當れり。彼れは大杯を傾けて麥酒葡萄酒を飲むと恰も長鯨の百川を吸ふが如し。彼れは長柄の土耳其烟管を執つて繼へず烟草を喫せり。彼れは國事に思を痛めて往々にして寢に就かざるとあり。而かも時としては日三竿にして猶且床中に在るとありき。噫彼れは斯くの如き不規則不衛生的の生活を爲して。其の身体は老いて愈々健に。今や八十餘歳にして鑠鑠として壯者の如し。彼は獨り精神に於いて鑽石の如くなりしのみならず。肉体に於いても鐵の如く

主義論「てふ一書を參考せよ。カール、マルクス社會黨の經典たる資本論を著はして社會主義の爲めに萬丈の氣焰を吐けり。されど彼の思想は世界的にして日耳曼的ならざりき。故に彼れは萬國勞動者同盟なるものを倫敦に起せり。之れに反してフルチナンド、ラッサルの思想は頗る國家的なりしかば。彼は日耳曼勞動者同盟なるものを組織して以て日耳曼社會黨の首領と仰がれたり。普佛戰爭以來日耳曼社會黨の勢力は益々旺盛を致し。千八百七十七年に至りては十二人の代議士を帝國議會に出せり。然るに翌年社會黨が皇帝に危害を加えんと企てたると兩度なるに及んで。ビスマルクは痛く社會黨の凶暴を惡み。有名なる鎮壓令を下して。警察官に與ふるに特別の權限を以てし。全力を盡くして社會黨を鎮壓せんことを計れり。されど社會黨は秘密機敏の運動を爲して巧みに警官の監視を脱したりしかば。鎮壓令は毫も社會黨を壓服する能はずして却りて其の勢を激成せり。

ビスマルクは徒らに權力を以て社會黨を壓制するの得策に非ざるを覺り。寧ろ勞動者の窮狀を救ひ社會の不平を和けて以て社會黨の横暴を抑へんと欲し。爾來汲々として勞動者の保護に力めたり。彼の勞動者保險法、工業條例の如きは皆ビスマルクの政策に出でたるも

強健なるなり。
 ビスマルクの嗜好は如何。彼れは國事に忙はしうして風流的事を樂むの閑日月を有せざりき。彼れが宰相の位に在りて樞機を握れるや。日に千餘通の書信と電報に接し一々之れを應答せり。彼れは議會と戰はざるべからず。列國の星使と折衝せざるべからず。在外の普國公使を指揮せざるべからず。其繁忙多事なる殆んど常人の堪ふる能はざる所なりき。彼れ何を以てか悠々として花に吟じ月に歌ふの暇あらんや。彼れは往々にして田舎の別墅に退いて神身を養ふと無きに非ざりしかども。千百の公用國事は至る所に彼れを追窮して彼れは終に忙中の人たらざるを得ざりしなり。されば彼れは稀に山野を跋渉し獸を射て以て僅に一日の閑を貪るに過ぎざりき。其の嗜好に至りては只

のなり。彼れは又自國労働者の困窮を救ふには労働者の數を減ずるの得策なるを認め。大に海外殖民を奨励したり。
 第四節 學 藝
 前世紀以來日耳曼の文學は駁々として進歩し來り。十九世紀に至りては科學、哲學、文學の發達を以て世界に誇稱するに至りぬ。されば余は今や僅に數葉の餘白を有するに過ぎざるを以て。學藝發達の次第を詳説する能はず。只有名なる學者の姓名を列擧するに止めんとす。
 哲學者として有名なるはヘーゲルとシユオペンハウエルなり。前者の哲理は今代發達するもの甚だ稀なり。後者は説を立つると明亮にして曖昧惛り難きの點少きの故を以て多數人の人民に歡迎せられたり。ハルトマンは後者の系統に屬する最近の哲學者なり。
 科學者として最も著はれたるはアレキサンデル、フォン、フンボルトなり。彼れは「萬有論」を著はして天然の原力に對する彼れの觀念を明にせり。オケン、ミュルレル、リービグ、ヘルムホルツ、ブンゼン、キルホッフ、ハエケル等は種々なる科學上の發見を爲してその名を著はせり。

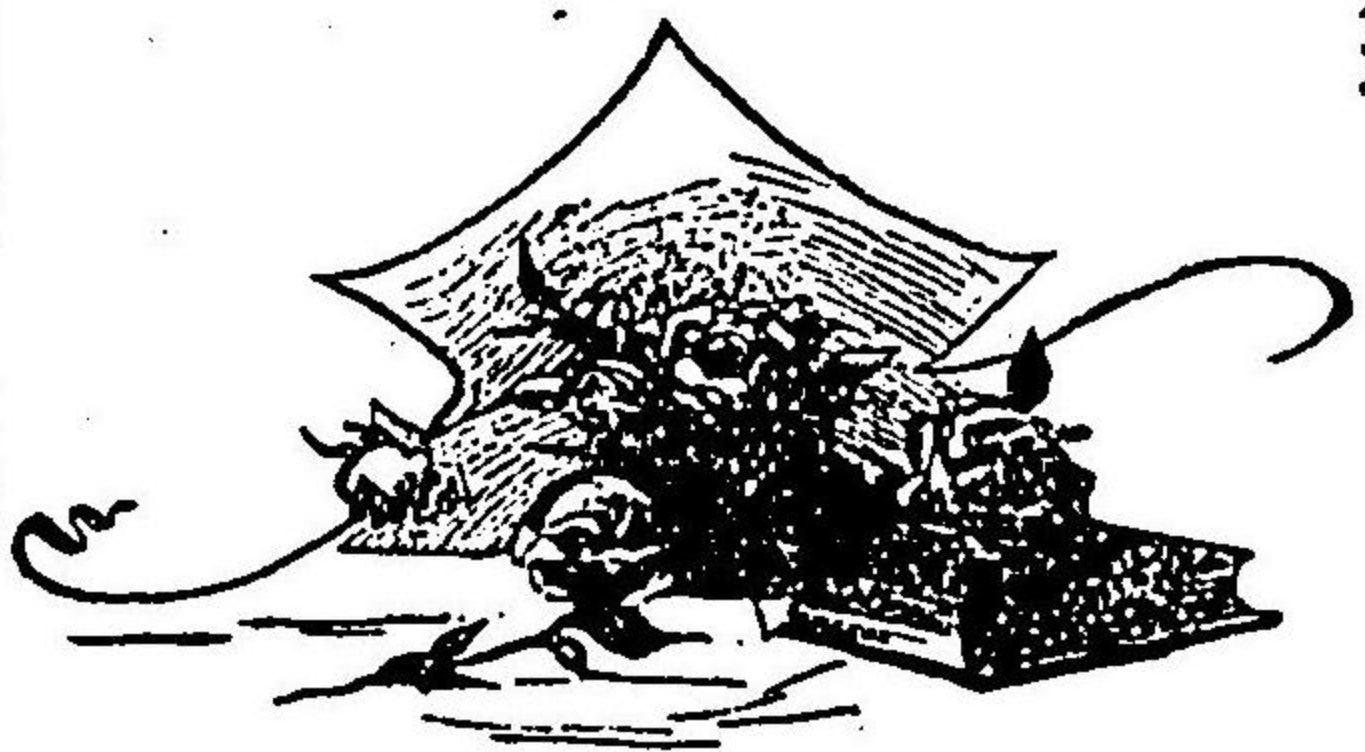
音樂の一あるのみ。其の他の技藝美術の如きは殆んど彼れの顧みざる所なりき。されば彼れは八十餘歳の今日に至るまで博物館に入りしと只一回のみ。演劇の如きに至りては曾て一たびも瞥見せしと無しと云ふ。
 ビスマルク位人臣を極め財豊かに富大なりと雖も。敢へて奢侈虚飾を好まず。平素頗る儉節を守れり。其の住屋は敢へて壯麗華美に非ず。其の室は僅かに質素なる裝飾を有するのみ。彼れの偉大なる所以は愈々以て見るに足らん。
 ビスマルクは好んで歴史を讀めり。されば科學、美文、等の如きは彼れの殆んど顧みざる所なりき。彼れは頗る談論を好み。其の人に接するや談論紛々殆んど風の發するが如し。人皆其の快談雄辨に意を奪はれて肅然として之れを傾聴せ

次に文學界を見るに。史家にはランケ、ギーセブレヒト、ドロイゼン、モムゼン、ヴァイツ等あり。言語學者にはグリム兄弟、ポツプ、ポットあり。想作的文學者にはシュレゲル。テイーケ、ハルデンベルヒ、フン、アルニム、クレメンスプレントノ、インメルマン等あり。詩家及び散文家として獨逸文學に光彩を添へたるものはハイチナリ。アナスタクシウス、クルン、ヘルツエヒ、フライリグラトも亦詩を以て著はる。獨逸の小説は今世紀に至りて大に發達したり。就中有名なる作者はアウエルパッハ、フライタッハ、スピールハーゲン等なり。
 次に政治學者としてはブルンナユリ、グナイスト等あり。法律學者にはツヴィーニあり。ミッテルマイエルあり。
 更に 翻つて藝術界を見るに。建築家にはシィンケルあり。彫刻家にはラウヒあり。畫家にはオフホルバック、コルネリウス、カウルパッハあり。音樂家にはビートフエン、ヴェーベリ、マイエルビーも名あり。
 斯くの如く日耳曼は今世紀に於いて文學に技藝に幾多の大材偉人を産したり。世界の學者文士が争つて笈を日耳曼に負ふもの亦宜なる

り。北米合衆國の伯林駐在公使ベイヤード、テール氏は曾て人に語りて。大にビ公の雄辯を稱賛せり。ビスマルクが列國の使臣と密約の間に折衝するの狀勢靡として想見すべし。

余はビスマルクの公生涯と私生涯とを見たり。叙事簡短にして未だ全く彼れの眞面目を描き出だす能はずと雖も。彼れが千古の偉人たるは以て知るに足らん。今や斯の偉人は勳業を完うし榮名を負ふて。靜かに其の莊園に餘命を樂む。地球は猶幾年の間老偉人を失はざるべし。余は筆を擱くに臨んで彼れの壽命の長からんことを希ふや切なり。

哉。今や願みて我が國の狀態を視るに。哲學者無く。詩人なく。小説家無く。音樂家無く。畫家なく。科學者無し。否是れ無きに非ざれども。其の識見や狭く其の規模や小に其の研究や淺くして。到底技を世界の藝林文園に競ふべきに非ず。余は獨逸の史を叙して彼の國現世紀の文藝彬々たるを見。轉た余が國の學者文士の不振を嘆じ筆を投じて慨然たる之久之。



通俗獨逸歴史

大尾

通俗獨逸歴史

定價金參拾錢

明治三十四年八月廿九日印刷
明治三十四年九月十日發行

著者 河上清

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市本郷區丸山福山町六番地

印刷者 水谷景長

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博進社工場

不許複製

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

通俗百科全書

每月一回發行
全部二十四冊
一冊金廿五錢●十六編以下參拾錢●郵稅壹冊八錢

日新百般の學術を講明し、社會智識の開拓を計る者、是れ我が通俗百科全書の任する所にして、即ち最も實用有益なる通信講義録たり、最も懇到なる教師、最も親篤なる朋友たり、而して本書は著者各々得意の科目を選びて編述に従事せる者、資料既に精醇にして有用の種目悉く備はる、されば文明日新の智識を得んと欲するの士は、必ず一部を座右に備へざるべからず。

第一編	通日本歴史	全壹冊	足立 栗園君著
第二編	通世界歴史	全壹冊	長谷川 天溪君著
第三編	通明治歴史	全壹冊	坪谷 水哉君著
第四編	通徳川十五代史	全壹冊	岸上 質軒君著
第五編	通文藝學	全壹冊	奥村信太郎君著
第六編	通倫理學	全壹冊	足立 栗園君著
第七編	通法學	全壹冊	桐生法學士著
第八編	通商業簿記	全壹冊	高橋邦次郎君著
第九編	通政治案內論	全壹冊	鳥谷部銑太郎君著
第十編	通英語案內論	全壹冊	石川辰之助君著

次 目

第拾壹編	通言語學	全壹冊	宮田 修君著
第拾貳編	通銀行簿記	全壹冊	窪田 眞澄君著
第拾參編	通社會簿記	全壹冊	高橋邦次郎君著
第拾四編	通工業簿記	全壹冊	春山育次郎君著
第拾五編	通官廳簿記	全壹冊	高橋邦次郎君著
第拾六編	通理化地	全壹冊	藤野 修君著
第拾七編	通日本地理	全壹冊	大和田 建樹君著
第拾八編	通文章地理	全壹冊	宮川鐵次郎君著
第拾九編	通世界地理	全壹冊	澁江 保君著
第貳拾編	通動物學	全壹冊	川村 守義君著
第貳壹編	通植物學	全壹冊	永持 德一君著
第貳貳編	通獨逸歷史	全壹冊	河上 清君著
續刊第廿三編	通俗佛語案內	全壹冊	永島長次郎君著
目次第廿四編	通俗佛語案內	全壹冊	森田寬三君著

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

博文館發兌歷史書類

日本史

(著者譯者) 製本(書名) 冊數(正價郵稅)

Table listing various Japanese history books with columns for author/translator, title, volume, and price. Includes titles like '大日本通史', '日本歷史要解', '日本歷史評林', etc.

Table listing more Japanese history books, including '新撰日本小歷史', '道俗明治歷史', '德川五代史', etc.

東洋史

Table listing East Asian history books such as '東洋歷史', '支那文明史', '朝鮮開化史', etc.

西洋史

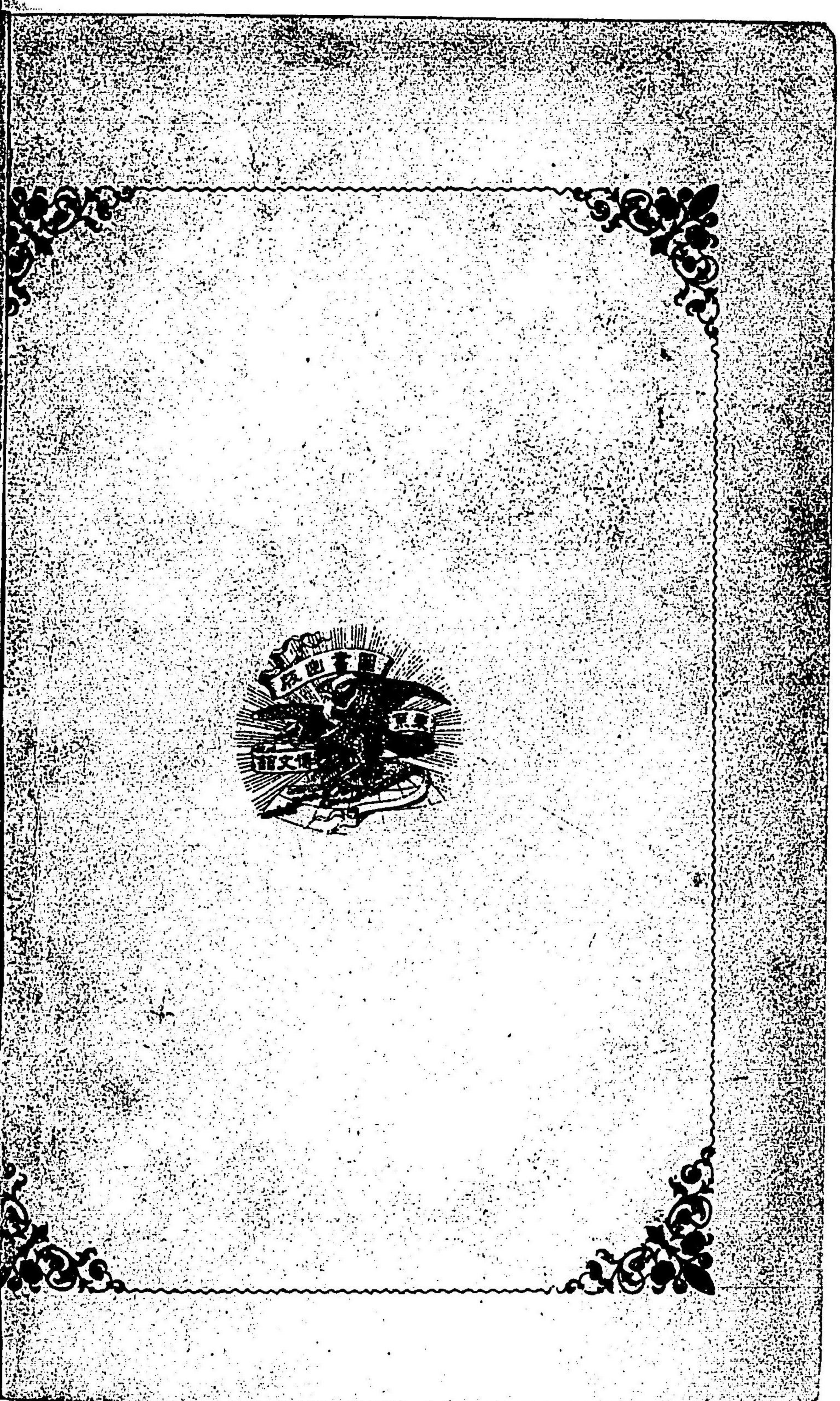
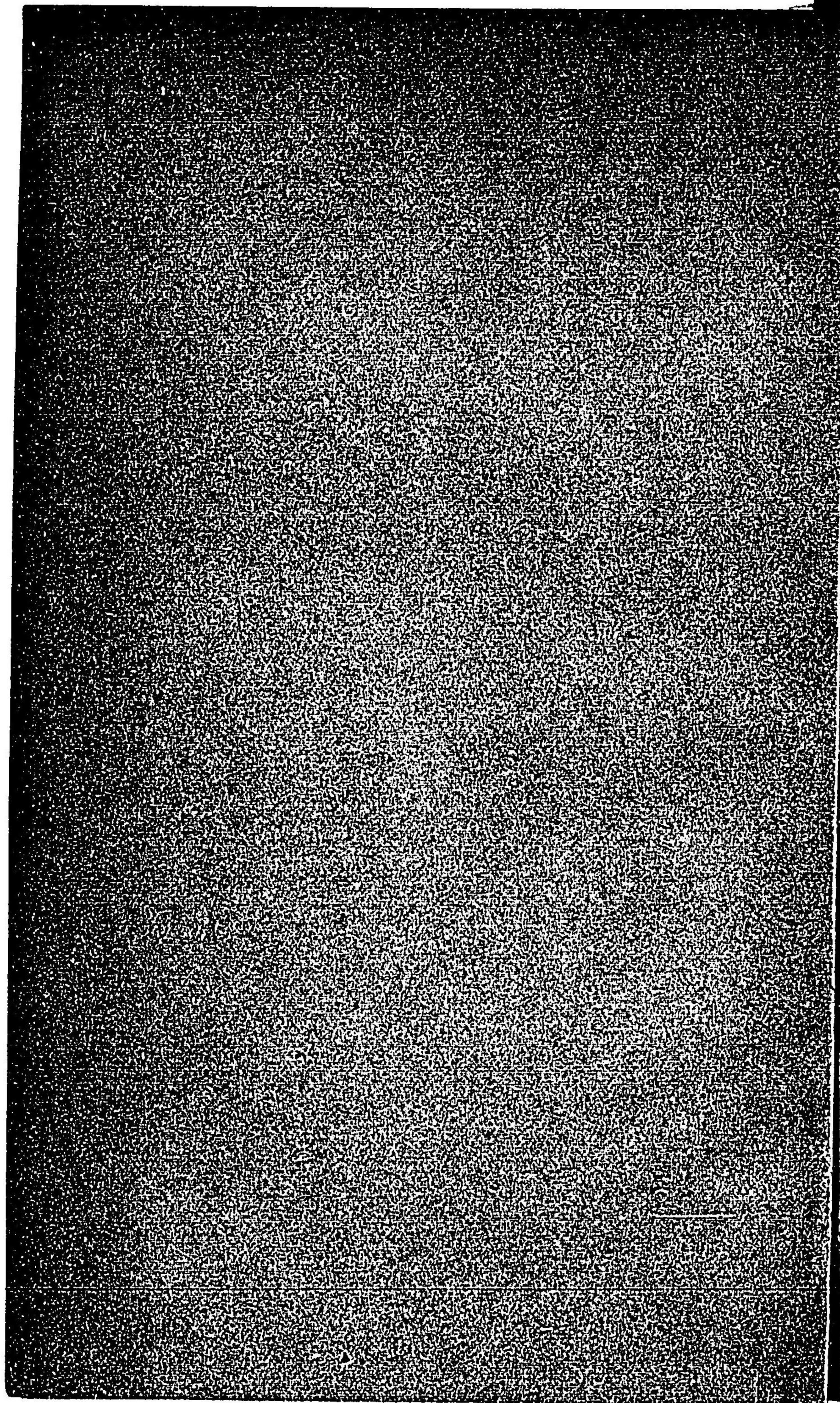
Table listing Western history books such as '西洋歷史', '露西亞史', etc.

眞書太閤記

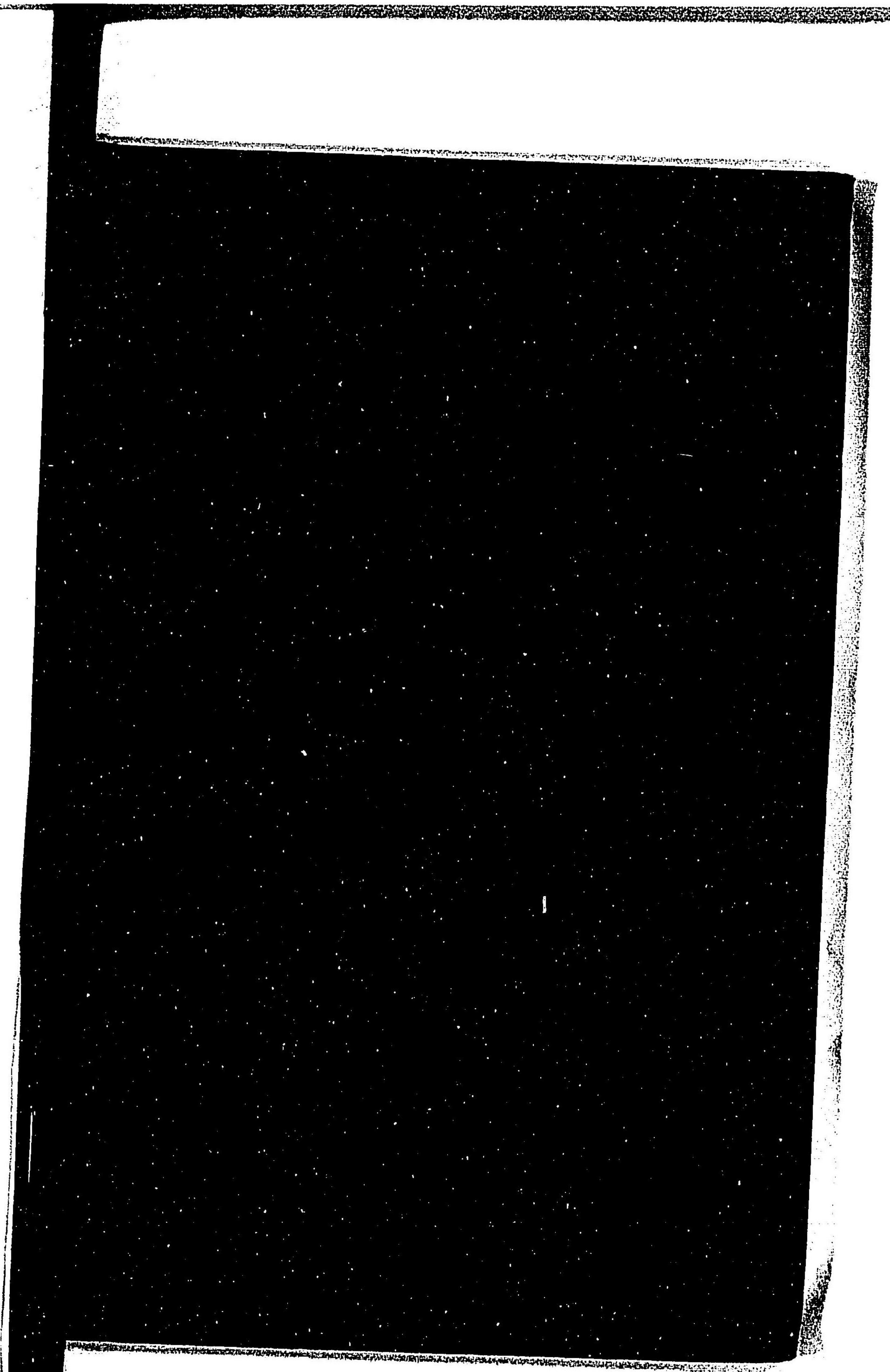
Table listing books related to Toyotomi Hideyoshi and other historical figures, including '眞書太閤記', '附朝鮮軍記', etc.

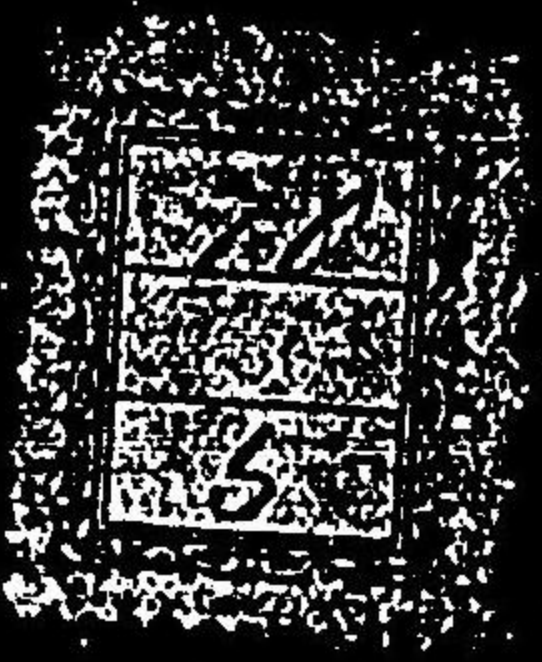
史記讀本

Table listing editions of 'Shiji' (Records of the Grand Historian) with columns for title, volume, and price.



78
5





026852-000-4

78-5

通俗独逸歴史

河上 清/著

M34

ADF-0033

